

---

## 魔法少女リリカルなのはΦ's【活動遅延中】

kei=megu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはφ・s 【活動遅延中】

### 【Nコード】

N49350

### 【作者名】

keiimegu

### 【あらすじ】

【作者が日常生活を送るのも困難なため、暫く活動が著しく遅延します。感想には返信します】

乾巧、またの名を仮面ライダーファイズ、ウルフルフェノクの青年。

彼は灰となり、この世を去った…と思われたが、

目覚めると、何故か病室のベッドの上だった。

ファイズ×なのは、始まります。

この作品には、とらいあんぐるハートでの設定が多々あります。つまり、なのはとらハが融合した独自の世界設定となっているということです。映画も入ってます。

これも全て、乾巧って奴の仕業なんだ。

Arcadia様にて投稿していましたが、事情により削除いたしました。長期間放置は流石に……

## プロローグ

「じゃあな、真理、啓太郎。夢、叶えてくれよ」

「たつくん……」

「巧い……」

その青年、乾巧は『二回目』の人生を終えようとしている。

体は灰になり、所々から青い炎をあげている。その傍らにはファイズギア、ファイズブラスター、そして復元されたオートバジンがあった。

スマートブレインが倒産した後もオルフェノクは現れ続けた。しかし、スーツを転送する人工衛星イーグルサットは会社の倒産と共に機能を停止させる。そのため、巧は暫くウルフルフェノクとして、人間に害するオルフェノク達を倒していた。

しかし、有志を集め、ファイズ、カイザ、デルタの今まで確認していた三つのベルトに加えて、サイガ、オーガのスマートブレインに隠されていた二つのベルトに、スーツの情報を書き込むことに成功させ、衛星を介さずとも、変身することが可能となった。

また、破損していたカイザギアは、ファイズギアの情報を元に復元することにより、オルフェノクなら誰でも装着できるようになっている。

適応条件が低く、人間の味方のオルフェノクでは、巧の他、数名しか適応せずに実験段階で多くの犠牲を出したサイガ、オーガの二つは封印され、三つのベルトでオルフェノクに対応していた。

ファイズブラスターにも、ブラスターフォームの情報はインプットされ、オートバジンはライオトルーパーの乗っていたバイクを解

析することにより復元に成功した。

だが、ファイズになるという事は、オルフェノクの寿命を縮めることを意味する。

だから、巧はその命の炎が尽きようとしていた。

（なかなか楽しかったぜ）

そう思いながら彼の二度目の生涯は、同居生活をしていた二人の仲間に看取られながら幕を閉じた。

巧は灰となり、この世から消えた。

かつて乾巧であった灰は、真理と啓太郎の手からこぼれ、風になって飛ばされていった……。

二人はその場で崩れ落ちて、大声を上げて泣き続ける。

ここに、小さいながらも巧の……いや、巧の友人だった木場という男が巧に託した夢、『人間とオルフェノクが共存する世界』ができていた。

——先人の知恵は素晴らしい。曰く

『二度ある事は、三度ある』

「あ？　ここはどこだ……天国か？」

そう病院のベッドの上で呟いた巧は自身が三度目の生を受けた事に気づいていない。

「目覚めたかい？」

不意にそう言われ、巧は声のした方向を見る。少し違和感を感じたが、その声の主の顔を見た。その男は自分と同じ年くらいだろうと巧は思った。

「アンタは」

そう言いかけた巧であつたが、その男にも違和感を感じた。いや、生存本能が刺激された。まるで狩られるような気がするのだ。

また、その男も巧に違和感を感じている。『子供』で在りながら  
も巧は歴戦の戦士の持つ独特の雰囲気を持つからだ。

巧は話しかけている男の枕元を見た。そして、驚愕する。

『高町士郎』

それはいい。ただ、

『33歳』

なんと、二十歳少し前の巧より何歳も年上なのだ。

(……見た目若いな)

巧より同じ年どころか、年下にも見えそうな士郎であった。

「ここは……っ!？」

巧は言いかけて、また止まった。

(声がおかしい?)

そう、何故か声が高いのだ。更に体を見た。そして、窓に映る自  
身の顔を見て確信した。

——体が子供に戻っている  
と。

「どうしたんだい？」

「あ、ああ。少し動揺して……で、ここは天国か？ 俺は死んだ筈  
だ」

「死んだ？」

本気で驚いている土郎を見て、巧は考えた。

（もしかしたら天国で、死んだ事に気づいていねえのか？ でも、病院のベッドの上というのは違う気がする。もしかしたら……また生き返ったのか？）

乾巧は幼い頃に一度死んだ。だが、オルフェノクとして覚醒し、蘇った事がある。だから、これが不思議とは思わないが、

（なら、どうして生き返った）

ふと巧は自分の横の机を見ると、いつも見慣れたアタッシュケースが『5』個並べてあるのが見えた。さらに、トランクボックス型のファイズブラスターも置いてある。

「それは君が倒れていた場所に置いてあったらしい。あと、バイクもあったとか」

巧はふつと息を漏らした。

（どうやら、俺はまた生き返ったようだな）

薬によって促進された、体の崩壊は感じられない。不意に、病室のドアが開く音が聞こえた。

「おとーさん！ きたよ！」

「お、なのはか。恭也も」

「父さん。……あれ？ その子はやっと目覚めたのか？」

恭也と呼ばれた男が見ているのは無論、巧である。

「ああ、看護師さんは3カ月も寝ているって言っていたな」  
「父さんより先にいたからな」

巧は自分が何カ月も寝ていたという事に驚愕した。

「んー」

「……」

だが、そんな事よりもなのはという少女の視線が気になって仕方ない巧。なのははずっと巧の顔を見ている。

「ああ、君の名前を聞いてなかったな。君の名前は？」

士郎に言われて、巧は

「乾巧だ」

と、いつものような無愛想な表情で答えた。

「これは長男の恭也、こっちは次女のなのはだ」

「よろしくな、巧君」

「よろしくなの」

巧は年下。高校生くらいに見える恭也に君付けで呼ばれるのに違和感を感じる。ちなみに巧の見立て通り、恭也の年は15歳だ。

「なのはは5さいなの。たくみくんは？」

そう言われて、巧は自分の体を見下ろす。昔の記憶をたどり、行きついた答えは、

「……多分お前と同じくらいだ」  
「そうなの！ よろしくね！ たくみくん!!」  
「あ、ああ」

何故か巧はなのはと友達に（強制的に）なった。

「君には親がいるのかい？」

面会時間が終わり、なのは達が帰った後、士郎は巧に聞いた。なのはには、何故か『たつくん』と呼ばれることとなった。

まあ、彼女は永遠に『た、た、た、たつくん!! オ、オルフェノクがああ』という、おなじみのセリフを吐くとは思えないと巧は考えたが。

「いない」  
「そうか、やはりな……」

士郎の話を聞くと、巧が病院に搬送されてから親捜しがあったらしい。でも、親は一向に見当たらない。

「なら、私の家に来ないかい？」  
「士郎さんの？」  
「そうだ」

巧は願ってもない事だと思った。なぜなら、衣食住はオルフェノクにも必要だからだ。

「……いいのか？」

「別に養子になれって言っているわけではないが……どうだい？  
君さえよければ」

「——これからよろしくお願いします」

暫く考えて巧は頭を下げた。

だが、その時には気付いていなかった。

なのはは普通の人間と違う才能を秘めていて、それが原因で前世以上の厄介事に巻き込まれるという事に。

時が過ぎて、巧が高町家に居候し始めて4年近く経った。

『巧』

『たっくん』

『乾君』

『乾』

巧は呼ばれる。懐かしい声に。

「真理、啓太郎、木場、草加」

最後の声には自分を見下したような響きまで思い出してしまった  
が、懐かしいから放っておく。

「真理ってだれ？」

その声に巧は急に覚醒した。

「おはよう、たつくん。で、いつも聞くけど真理って誰なの？」

「誰でもいいだろ」

巧はベッドから降りる。先ほど述べたように、巧が高町家に居候を初めて4年たつ。だが、巧は自分の事を誰にも話さなかったし、正体がバレる事もなかった。

——そう、恭也の恋人、忍と、なのはの親友すずかには出会った当初は怯えられたが。自分も、彼女らと、そのメイドは普通とは違うというのは分かったが、何も言わなかった。

入院していた間、オートバジンは病院に保管されていて、今は高町家のガレージに置いてある。時折整備は恭也とかがするが、巧は本当にたまにしか乗らないし、乗るとしてもファイズに変身してからだ。

幼い体の巧がファイズに変身すると、どういう原理か、いつも戦っていた頃の大きさになるのだ。オルフェノクになっても同じである。

三度目の生を受けた『海鳴市』でも、オルフェノクは発生していた。だが、それに気付いて駆けつけたときには既に青い炎を上げて灰になっているものが多かった。

本当に、時々しか巧は戦闘行動を起こさなかった。

巧の近くに落ちていたという五つのアタッシュケースの中には、ファイズ、カイザ、デルタ、サイガ、オーガギアが入っていた。巧はファイズフォンを自分の携帯電話として使用している。その他の

ギアなどは全て嚴重に鍵を、もとから着いている鍵に加えて更にかけて保管してある。

「今日はね、変な夢を見たの」  
「ふーん」

巧はなのはの言葉に適当に返事をしつつ、高町家の面々に挨拶した。実を言うと巧も悪夢っぽい何かを懐かしい夢を見る前に見た気がしている。

だが、偶然だろうと思い、何も言わなかった。

「おはよう。なのは、巧君」  
「お兄ちゃんとお姉ちゃんは？」  
「道場にいるみたいだよ」

桃子、なのはの母親のその言葉を聞いた二人は、道場に向かった。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、朝ご飯だよ」  
「おはよー。なのは、巧君」  
「お、なのは、巧。あ、なのはー。服が前後ろ表裏逆だぞ」  
「ふえっ。……嘘はやめてえええええ！」

これが高町家の日常である。

ちなみに影が薄いなのはの言っているお姉ちゃんは美由希という眼鏡をかけた家族公認のドジっ子だ。

巧は必要ないと桃子や士郎に言ったが、強制的になのはと同じ私立聖祥大学付属小学校に通う事になった。そして、いつものごとく朝食の場で、万年新婚夫婦にしか見えない士郎と桃子のやりとりを見せつけられ、げんなりしながら通学バスへと乗り込む。

「おはようございまーす」

巧は無表情で乗り込み、なのはは元気に挨拶をして乗った。

「すずかちゃん、アリサちゃん」

「おはよー、なのは、巧」

「おはよう、なのはちゃん、巧君」

「おはよー」

巧は終始無言であった。さらに、三人の少女と違うところに座ろうとしたが、

「こっちきなさいよ」

とアリサに言われ（というか、引きずられ）、一緒に座ることとなった。

（なんで俺の周りには強引な女ばかりなんだ…真理とか）  
そう思ってしまった巧であった。

「将来の夢かー」

昼休み、巧はいつものように一人で弁当を食べようとして、いつものようにアリサに屋上まで引きずられていった。

三人はさっきまでの授業の話をしている。

「アリサちゃんとすずかちゃんは今結構決まっているんだよね」

「うちはお母さんもお父さんも会社経営だし、一杯勉強してちゃんと跡を継がなきゃぐらいだけど」

アリサは大企業の社長の娘らしい。大企業とか大組織と言えばあのスマートブレインをどうしても思い出してしまう巧だ。

「わたしは機械系が好きだから、工学系で専門職が良いなと思って  
いるけど」

「そっか、ふたりともすごいよね」

でも、この年で将来を考えるって凄いなと思う巧だ。なぜなら、自分の夢を見つけるのにも長く時間がかかったからだ。

というか、どう考えても小学三年生がする会話ではない。

「でもなのは喫茶翠屋の2代目じゃないの？」

「うん…でも、それもなんか違うかな？って感じだし…たっくんは？」

（自分の夢…啓太郎と同じ…）

「世界中の洗濯物が真っ白になるみたいに……皆が幸せになります  
ように」

『へ？』

「いや、気にするな」

丁度チャイムが鳴った。

「ほら、もう休み時間も終わりだぜ」

そう言って、巧は教室に戻って行った。

「あー、こっちこっち。ここを通ると塾の近道なんだよね」

放課後、アリサが進むのを達巧は後ろからついて行った。

「にゃ？」

「どうした、なのは」

「いや、声みたいなのが聞こえて……」

そうか、頷いて四人は塾に向かう。巧も何故か同じ塾に行く事にされていた。必要無いって言っても桃子が授業についていけなくなると言って聞かなかったからだ。確かに、授業はハイレベルだったが。というか、なのはの頭の良さに巧はすごく驚いている。

翠屋の値札やPOP作成。どう考えてもおかしい。

「（たすけて）」

『っ！』

巧となのはは誰かの声が聞こえた。巧は声の方向に向かって、一人で走りだした。一緒にいた有里すずかは驚いて声をかけるが巧は無視した。

その背後を三人は追う。

「これ、フェレットか？ でも何か違う」

「どうしたのよ。急に走り出して」

「あっ見て！ 動物怪我しているみたい！！」

巧が考えているとアリサとすずかが追いついた。だが、運動神経が切れているのはまだ追いつけていない。

地面で怪我をしているフェレットを見つけた四人はそのまま動物病院へ連れて行った。

「怪我はそんなに深くないけど、ずいぶん衰弱しているみたいね。きつとずっと一人ぼっちだったんじゃないかな？」

『院長先生、ありがとうございます』

「いいえ、どういたしまして。……あなたはもう少し愛想良くしたら？」

「これは地顔だ」

悲しいことに、本当の事であった。

夜、巧は今日の事を思い返していた。

（あの声。二人共聞こえたから……）

巧はそれを幻聴と断言出来なかった。なぜなら、

（俺も不思議な存在だから……）

自分自身が現実ではありえない存在なのだ。こういうことが不思議とは思えない。必然だと考える。

（お願い…僕のところへ！ 時間が……）

「またこの声か」

巧は隣の部屋のなのはが動き出したのを感じる。

（何かが起きるな）

巧はアタッシューケースを持ち、外に出てなのはの後を追った。

- Open your eyes · for the next  
Φ · s ! -

## 第一話 Orphnoch【改訂中】

そこは、薄暗い部屋だった。

「この力……！ フッフ……」

一人の男が笑っていた。足元には灰が散っている。その灰の塊の近くには、服があった。

「くつくつく……楽しみだなあ。もつと殺すのが……」

男はかつて人であったものを踏みながらその部屋から出て行った。それを遠くから見る人影があった。男ではない、女性的なボディラインであるが、よく見れば未成熟なものであると分かる。彼女は無言でその男を見つめると小型端末をポケットから取り出し、連絡を取り始めた。

「……はい、そうです。……問題ないです」

まだあどけなさが残った声は、彼女がまだ大人でない事を示している。長い金髪が夜の月に反射して綺麗に光った。

「……そちらの計画通りに暫く泳がせようと思います」

その少女は無表情のまま端末の電源を落とした。

巧の走る音が夜の市街地に響く。

（無事でいてくれよ）

よく耳を澄ませると、遠くから破壊音が聞こえた。

走る巧の隣に、いつの間にかオートバジンが並走していた。巧は手に持っていたアタッシュケースの中身の一つであるベルトを腰に巻きつけ、巧はポケットからファイズフォンを取り出した。

目の前には見た事のないような黒くて大きい怪物と、小学校の制服みたいな服を着て美しい赤い宝玉のようなものが付いた杖を持ったなのはがいた。

ファイズフォンの5を三回押し、最後にENTERを押す。

【S t a n d i n g b y】

怪物は巧に気づき、攻撃をしようとした。なのははそれが陰になって巧がいる事に気が付いていない。

巧は走りながらファイズフォンを持った手を上に高く掲げて叫ぶ。

「変身！」

【C o m p l e t e】

ファイズフォンをドライバーのバックル部、フォンコネクターにフォンを突き立て左側に倒す。ファイズドライバーから赤いフォトンストリームが走り、フォトンブラッドがその中に流れる。その形状は大人の巧に沿った物だが問題は無い。そしてドライバーに格納

されたスーツも電子に分解され人の形をとる。  
フォトンブラッドの激しい光が怪物の目を潰した。

「ふえ！？ ふえええええ！？」

「何なんだ。この光は！」

なのはただひたすら驚き、フェレットはその光が何なのかに思いを巡らせていた。

変身を完了させた巧——ファイズ——は右手をスナップし、怪物に向かっていく。

「ハアッ」

右からストレート。怪物の体は後ろによろめく。

「おらぁ！」

右足で強い蹴り。更によろめいた怪物に一拍おいてもう一発パンチ。もう一回蹴ると、怪物は自ら距離を取った。

そして、ようやくなのはとフェレットはファイズの姿を見る。フォトンブラッドの輝きによりよく姿は見えなかったが。

「さがってる」

そう言って巧はまた、右手をスナップして駆けだした。

「ふっ！ はっ！」

右手で怪物を殴り、左手でもまた殴る。

「ハアッ！」

そして荒々しく蹴り飛ばす。

巧はベルトのハードポイントの右側に付けてあったファイズポインターを取り外し

【Ready】

ファイズフォンに付けてあったミッションメモリーをポインターに付け、右足にセットした。

「■■■■！！！」

「うるせえんだ……よっ！！！」

怪物が全く聞き取れない鳴き声を上げながら触手でおそいかかるが、巧は綺麗に避けて、たまに当たってひるみながらも飛び蹴りを放った。すると、怪物は体を四散させたが、本体は残っていた。

【Exceed Charge】

ファイズフォンを開き、ENTERを押すと、ポインターに光が集まる。

その間に怪物は体を元に復元していく。

巧は両足を開き、左足を怪物に向けるように体を半身にして両手をダラリとおろした。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！」

怪物は尚も分からない叫び声を上げながら巧に襲いかかる。

「危ない！」

フレットは叫ぶが、巧は怪物に向かって走り、ジャンプして前方一回転。そのまま怪物に足を向けた。

すると、ポインターから円錐状の赤い光を放たれ、怪物をポイントした。怪物はその光に押され、前にも後ろにも。更に横にも動けなくなった。

「てやああああああつ！！」

巧は円錐の中に入り、蹴りをかます。円錐は完全に怪物に刺さり、巧は怪物の後ろに現れる。一拍置いて、何かが碎ける音と共に、怪物はその場に赤いゆの文字を浮き出させて爆散した。

そして地面には、青い宝石らしきものが欠片となって、風に吹かれて散って行った。

「……早く帰れ。子供は寝る時間だ」

巧はオートバジンに跨り、高町家とは反対の方向に走り去っていく。幸い人がいなかったため、ファイズのまま運転できた。

巧は遠回りして高町家に付き変身を解いた。

「ったく。また厄介事に関わることになんのか？」

巧はそう呟いて、自身に割り当てられた部屋に入って行った。

「は？ 飼うのか」

「うん。たつくんも可愛いと思うでしょ？」

「全然」

次の日の朝、巧が朝食をとろうとしていると、昨日のフェレットがいた。名前はユーノと言らしい。巧としては自分に厄介事を持つてきたとしか考えていないため、歓迎する気は全くない。

「ほらほらあ、巧君も可愛いと思わないかしら？」

桃子が美由希の膝に乗っていたユーノを抱き上げて聞く。

「昨日からフェレットの飼い方を調べたんだぞ」

「父さん、母さん……俺が寝た後も調べていたのか」  
「もちろん！」

巧は知らないことだが、昨日の晩、なのはが帰ってきたのを見つけた恭也たちからなのはは怒られた。

が、そこまで怒られる前に手に持っていたユーノの事へと話が变わり、話がうやむやに。そのままペットとして飼うことになったのである。

そして、子供が寝た後も新しいおもちゃを手に入れた子供のよう  
にキラキラした瞳の桃子と共に土郎がフェレットの飼い方をインタ  
ーネットで調べていた。

「ほら、早く食べねえと間に会わねえぞ」

食事を終え、ユーノで遊んでいたなのはにフェイスフォンを開いて時間を見せる。

「あ！ もうこんな時間！？」

そんな感じで慌ただしく朝の時間は過ぎていき、舞台は学校に移る。

「あ、なのは、巧。タベの話聞いた？」

「え、タベって？」

なのははアリスにそう聞かれた。大方あの怪物のおかげで起きた被害の事だろうと思い、巧は聞き流そうとし、冷たいお茶を飲んでいた。

「昨日行った病院で車の事故か何かあったらしくて……。壁が壊れちゃったんだって」

「あのフェレットが無事かどうか心配で」

「でね、その付近でなんか変な格好をした人がバイクに乗ってたって聞いたのよ」

「頭におつきく光る黄色い目があったって」

巧はお茶を嘔き出しそうになった。だが、それには三人とも気付かないで話を続ける。

「それなら、名前を付けてあげなくちゃね？」

「なのはちゃんはもう決めてるの？」

「うん。ユーノ君って言うんだよ」  
「へー」

巧は冷静を装って、またお茶を飲み始めた。  
するとアリサに声をかけられる。

「たーくーみー！ あんたも話にちよつとは参加しなさいよ！」  
「別にいいだろ」

そう言って、巧は机に突っ伏した。そして、地面に頭をぶつけた。

「オイッ！ いてえだろうが」

「何よ！ せっかく一緒に話をしようと思って話しかけてあげてる  
んだけど？ こっちは！」

「うるせえな、話をするもしないもこっちの勝手だろうが」

頭を乗せていた机を思いっきり引かれて。巧は頭を教室の床に打  
った。かなりの音がしたが、この程度で済んだのは巧だからである  
う。

……少し、涙目であつたが。

「うーーん……」  
「いたたたた」

学校が終わり、帰るときにアリサが伸びをしていたのはの髪を引つ張った。

「ふう」

巧はいつものように帰ろうとした。が、

「待ちなさい、今日は一緒に帰るわよ」

アリサに止められた。

「は？」

「友達が一緒に帰ろうって言っているのよ。それを」

「断る。じゃあな」

「ちょ、巧君！」

巧はいつものようにやっぱり一人で帰ることにした。

海鳴は良い所だと巧は思っている。通学路に海があるからだ。かつて日本中をアルバイトしながら旅をしていた巧からすれば、その土地の良いところなどは自然と分かってくるものらしい。

「ふう」

（このまま事件が起きなければいいんだがな……）

巧は砂浜で一人考えていた。そしてそこから帰ろうとすると見知った顔とすれ違った。

「あれ？ 巧君」

「……すずかか。どうした？」

「今日はお散歩。久しぶりに外に出たくなったの」

それを聞いた巧はそのまま通り過ぎる。

「ま、遅くなるなよ」

じゃあな、と言い残し巧はその場から去ろうとした。……が、

「キヤアアアッ!？」

背を向けた瞬間に、悲鳴が聞こえた。

「どうしたっ」

振り返ると、右腕を切断されたすずかと、灰色の怪人がいた。

「っ!？」

『小僧、怯えないか』

「オルフェノク……」

そこにいたのは、スティングフィッシュオルフェノクだった。巧が初めてファイズに変身して戦った相手と同じ個体。その怪人の影がうつるべき地面には上半身が裸の男が写っている。

「ま、小僧はこの女でも見てな。いやあ、夜の一族って言うのは殺しがいいがそうだ。今まではすぐに死んでたからな」

「い……嫌っ! 見ないで」

そう言っているうちに、すずかの右腕は再生した。

「なっ!？」

『へっ、こいつが人間じゃない事はわかっただろ？ 小僧。こいつは怪物だ』

「嫌あ……」

『うるせえっ！ おめーも小僧と一緒に殺してやるから安心しろ』  
「キャッ」

すずかは蹴られて、巧の方へ転がって行っただ。

「……すずか」

「……」

怪物は呆然としている二人に向かって走り出す。

「うらああああっ」

【Burst Mode】

「うるせえ!」

「な!？」

襲いかかってきたオルフェノクに向けて、ファイズフォンを向けた。入力コードは106。光弾を三

つ出した。

「すずか、お前は人間だ」

「えっ」

泣いていたすずかに巧は声をかけた。

「人間も、オルフェノクも共に生きていけるんだ。お前はただ……」

特殊なだけだ」

「どういう……?」

巧は自分のもう一つの姿、ウルフルフェノクになり、倒れていくらずかの方を向いた。

「え!？」

『どうだ? 俺は怪物だ。おまえより、もっと』

地面には巧が写っていた。

『はっ、お前も同類だった訳か。おもしれえ』

『同類? 一緒にするな。俺は乾巧だ。人間だオルフェノクのだと言っ前に『乾巧』っていう一個人だ!』

巧がそう宣言したと同時に乾いた破裂音が大量に聞こえた。ステイングフィッシュオルフェノクに、弾丸が浴びせられているのだ。弾丸を浴びせた張本人、オートバジンが片手に持っていたアタッシュケースを巧に投げる。巧は人間に戻り、アタッシュケースを開き、中身を取り出した。

『お前はその力を使わねえのかよ! その力があればなんだって出来るんだよ!』

「するかよ」

『何!?』

「俺は誓った。みんなが幸せになるようにって!」

【Standing by】

巧はファイズフォンにコードを打ち込んだ。

「变身！」

【Complete】

- Open your eyes . for the next  
Φ . s ! -

## 第一話 Orphnoch【改訂中】（後書き）

補足説明。

忍はとら八において腕を時間をかけて再生しました。ちなみに忍は頭脳派。

それに対してすずかは一般人のなのはより成績が下の強化がある得意、不得意と言えそうですが、様々な場面で運動が得意なことが描かれている。

よって忍は頭脳チート。すずかは身体能力チートと考えました。そのために再生速度が半端ないことになっています。

## 第二話 加速の銀【改訂中】

ステイングフィッシュオルフェノクは三叉の槍を構える。先ほど  
すずかの腕を刎ねた物だ。

「そこにいろ」

そう言つて、巧はバジンの後ろにすずかを待機させた。

「ふっ！」

太い、風を斬る音を出しながら槍を振るうが巧には当たらない。

「せい！ はっ！」

対する巧も自身の攻撃が当たらない事にいらだちを覚える。中の人  
が違えばこつも強さが違うのかと考える。最初に変身したときに  
遭遇した奴はキックで倒されたが。

「あ、おい！ 待てっ」

遊泳態になり、空中を飛び始めたオルフェノク。

【Single Mode】

ファイズフォンに103を入力し、光弾を撃つが、簡単に避けら  
れた。そのままステイングフィッシュオルフェノクは逃げ去ろうと  
した……が、その体は気付けば地面に落ちていて、無数の赤い円錐  
にポイントされて逃げられなくなっていた。

その数秒前、オルフェノクが逃げるそぶりを見せたために、巧は  
加速の準備に入っていた。

「……逃がさねえよ」

【Complete】

アクセルメモリーをミッションメモリーと交換する。

【Ready】

そしてファイズポインターを足にセットし、ミッションメモリーもセットした。その間にファイズの装甲が開き、赤かったフォトンストリームは銀色のシルバーストリームに変化する。

ファイズ、アクセルフォーム。一定時間だけ、通常とは桁違いの早さで動くことが出来るようになる。

【Start Up】

スイッチを入れた。まず巧は全力でオルフェノクの上に飛び、オルフェノクを叩き落とす。この間一秒にも満たない。

着地し、走りながら殴るのを何回も繰り返す。一回通り過ぎ、停止。手をスナップ。すずかにはその瞬間しか視覚できなかった。そして更に走りながらポインターでポイントしていく。

知り合いを傷つけたために、巧も相当頭にきているようだ。

「てやああああああああああつ!!」

強化クリムゾンスマッシュを連続で放つ巧。徹底的に潰すつもりのような。そしてようやく止まる。

【three two one】

一つも赤い円錐は残っていない。そして、

【Time Out・Reformation】

死刑宣告にも似た、非情な無機質な音声。それと同時に、オルフ

エノクは青い炎に包まれ、灰となっていく。その場に赤い巾のマークを残して。

「ふう」

変身を解く巧。首を左右に振りながら歩いてすずかとバジンの所による。

バジンは意図を汲み取り、自律走行で高町家に帰って行った。その後、透明人間とバイクという怪談話が広まったというのは別の話

「大丈夫か。腕は」

「……うん。平気だよ」

「ったく、巻き込まれやがって。ほら帰るぞ。送ってやるから」

そう言つて、巧はすずかの家の方に歩きだした。たまにお茶会に招待らされるので、嫌でも場所を覚えるのだ。

「聞かないの？ 私の事」

「面倒くさいな、お前。お前は月村すずか。それ以外の何物でもねえよ。同じように俺も乾巧だ。それ以外の何者でもない」

面倒そうにそう巧はそう言った。

「うえ、グスッ」

「ちっ、泣くなよ」

「う、嬉しくて……私たちは理解してもらえないし……グスッ」

はあ、と巧はため息をついた。

（木場……）

かつて人間とオルフェノクの共存を望み、その命と引き換えに人

間に未来を譲った戦友を巧は思った。

「ほら、行くぞ」

「待って」

服の裾をすずかに握られ、巧は引つ張られた。

「何だよ」

「巧君も、怪物じゃないと思うの……」

かなりの至近距離で、目を合わせて言われたために巧はすぐに顔をそむけて歩き出した。

「あ、ちよつと待って」

巧の横にすずかは並んだ。

「全く、仲間も増やさず死ぬだなんて……役に立たなかったわね」  
「そうだ、我々は選ばれた存在だと言うのに……」

数人の男女がいるその部屋。年齢や職業にも関連性がなさそうな集まりだ。

「我らが同胞は増え続けているのか？」

「オリジナルはまだ数少ないわ」

「せっかく覚醒したあいつを放置して仲間を増やそうとしたのに……。僕が行った方が良かったかな？」

「それより、問題はこいつだ」

その中でリーダーらしき若い男がモニターを指さす。

「我々をオルフェノクと呼んだ」

「ふん、その名は気に入ったが……こいつは裏切り者か？」

「このベルトも気になるね」

その画面には巧が写っていた。

「最近魔導師がこの世界で動いているようだ。もうそろそろ気付かれるかもな」

「むっ、ベルトについて知りたいのに」

「我らは見つかかり次第、管理局に殺され続けている。仕方が無いさ。だが、いつかは……」

そこにいる人間は全員で唱和した。

——全ての世界を我々の楽園とする！！

と

その日から、彼らは自分たちをオルフェノクと呼ぶようになった。

「では、移転するか」

「ああ」

魔方阵を展開させた男はふと思い出したように呟く。

「あいつはいいのか？」

その呟きにもう一人の男が答える。

「問題はない。あいつはオリジナルだが……私たちに逆らえない。絶対にだ。何があっても裏切り者をいつものように殺してくるだろう」

「それもそうか」

「リリカル、マジカル、ジュエルシードシリアル??！ 封印！」

どこかの神社で一人の魔法少女と、一匹のフェレットが青色の宝石を封印した。分かるだろうが、なのはとユーノだ。

「……あの人が一つ壊しちゃったけど、一つ封印したね」

「仕方が無いよ。僕が本当は封印しなくちゃいけないのに……」

「あの人、どうして私を助けたんだろう」

なのははてくてくと家に向かって歩きながら肩のユーノと話して

いる。

「あれ？ あれって……？」

なのはは、浜辺で見知った二人が一緒にいるのを見た。

「たつくとすすかちゃん？」

その二人の影が暫く重なり、その後歩きだしたのをなのはは見た。それを見て、なのはは一つ誤解をした。

「なのは、早く帰らないと！」

「あっ！？ お母さんに怒られちゃうの！」

なのはの見た角度からするとどうやらキスをしたように見えたりしい。巧の知らないところでまた厄介事が増えた瞬間だった。

数日後もなのはは夜に魔導師の杖、レイジングハートを握って怪物と対峙していた。

【Stand by ready】

「リリカル・マジカル、ジュエルシードシリアル？？、封印！」

【Sealing】

ユーノの助けもあって、日に日に魔法の使い方が上達していつている。

「お話を聞いて欲しいの」

「……」

なのはがジュエルシードという青色の宝石を封印するのを見届けたファイズ、巧は会話をすることなくオートバジンにまたがって帰って行った。

（あのピカピカな人、会ったのは二回目なのに人見知りやさんなのかな？）

かなりの的違いな事を勝手に考えながらなのはは帰宅した。  
そして更に数日後。

「なのは、朝だよ？ そろそろ起きなきゃ」

ユーノに起こされるなのはだが全く起きる気配はない。

「ねえ、なのは。ちょっと？ なのは。なーのーは！」

「……今日は日曜だし、もうちょっとお寝坊させて」

「今日は日曜日。久しぶりに寝たい気分なの」というような態度で、起こしに来るユーノを無視してなのはは布団にくるまった。

普段、自分で朝早くに起きるのはがここまで寝坊しようとするのは珍しいことだ。

そしてようやく起き上がった。

「はあ」

「なのは、今日はゆっくり休んだほうが良いよ？」

「でも」

「今日はお休み。もう四つも集めてもらったんだから。少しは休んだほうが良いよ？ それに今日は約束があるんでしょ？」

「うん、そうだね。……じゃあ、今日はちよつとだけジュエルシード探しは休憩つてことで。たつくんを呼ぼうか。ユーノ君！！」

（で、何で俺はこんな所にいるんだ？ いや、運動は体にいいし、やった方がいいと思う。だがな……）

心で呟き、巧は周りを見る。ボールはまだ逆サイドにある。

そう、今日はなのはの父親、高町士郎が監督を務める翠屋FCの試合の日であった。本来、彼は何もしなくて良いはずだった。だが、

『よし、巧君。選手が一人休んでいるから入ってくれないかな。数が足りないんだ』

と士郎に言われ、

（こっちは居候させてもらっている身だから断れないし……）  
ということだ、

「はあ」

何故かサッカーをする事になっていることにため息が尽きない巧であった。ちなみに、アリサの父親がサッカー好きと言うことで、士郎と仲が良かったりするのはどうでもいい話だ。

「おい。そっち行つたぞ」

だが、巧は手を抜けない。士郎に

『負けたら店を手伝うか、私との鍛錬に付き合つて欲しい』

と言われたからだ。元々御神流なんてものを継ぐつもりもない巧は勝つつもりだ。

「はあ……」

巧はため息をつきながらボールをトラップ。そしてシュート。相手ゴールキーパーが動けないような球だった。

『キヤー！頑張つてー！』

巧は自覚していないだろうが、彼はなかなか容姿は整っている。不機嫌そうな顔をやめれば、それもそれで一つのアクセントになっているらしいけれども。だから、女子に応援されている。

「はあ……」

（うるせえな。見せ物じゃねえ。こっちはやりたくてやってる訳じゃないんだよ！）

これも巧のため息の一因である。それに、ちらちらとやたらとこちに視線を送るのはとすずかが鬱陶しい。

「はあ……」

今日一日でどんだけため息ついてるんだと、巧は自分で思った。

サッカーを観戦しているなのは、アリサ、すずか。さっきからなのは巧とすずかを見ている。

「やっぱり……」

「ん？ どうしたのなのは」

「にははは、なんでもないよ」

口に出しちゃったかあ……となのはは思った。アリサちゃんはど  
う思っているんだろうと考える。

（ん……たつくとすずかちゃんってやっぱり付き合っているの  
かな？）

なのはとしては、巧が不機嫌そうな顔をしているけど、根は優しい  
事を知っているためにすずかが好きになってもおかしくは無いと  
思っているが、

（たつくんはどうしてすずかちゃんが好きになっただろう）

と、かなりの誤解をしている。

第一、彼らは付き合ってさえないない。偶然、なのはは彼らが体が  
重なったのをキスしたように見えただけなのだ。

まあ、どの時代でも女というものはそう言うのに興味があるのだ  
ろう。なのはは勝手に色々想像していた。巧にとっては本当にい  
い迷惑だが。

そして、試合終了。

「よし、みんな。よくやった！ いい出来だったぞ！ 練習お  
りだ。じゃ、勝ったお祝いに飯でも食うか！！」  
『やったー！！』

結局、試合には勝った。選手が翠屋に移動する。翠屋の店内では  
チーム全員がいるため、なのは達は外にテーブルを出してご飯を食  
べることとなった。そこに何故か、巧が加わっていたが。

「そういえば、何だかこの子、普通のフェレットとは違うかい？」  
「そういえばそうかな？ 動物病院の院長先生も変わった子だねっ  
ていつてたし……」  
「あゝ、えっと、まあちょっと変わったフェレットということだ。  
ほらユーノ君、お手！」

ユーノは少女三人のおもちゃと化している。

「キュ！」  
「わ〜〜〜！！」  
「かわいい〜！」

実際、巧は「自分でここにいらなくてもいいんじゃないか」と思っ  
ていたりする。結局、巧は一回も話に加わらなかった。まあ、もら  
った紅茶を冷ますのに全力を注いでいたが。

「さて、じゃあ、わたし達も解散？」  
「うん、そうだね」  
「そっか、今日はみんな午後から用があるんだよね？」

アリサが帰るみたいなので、解散することになった。一行。なの

はは予定を皆に聞いた。

「お姉ちゃんとお出かけ」

「パパとお買い物!!」

「いいね！ 月曜日にお話しかせてね？」

すずかは忍と、アリサは父親とお出かけらしい。

「たつくんは？」

「ふー、ふー」

巧は貰った紅茶をまだ冷ましている。

「たつくーん」

「あ？ 何だ」

「何か予定とかあるの？」

巧は顔を上げた。

「いや、何もねえぞ」

「え？ じゃ、じゃあ、私と一緒に来ない？」

いきなりすずかが言いだした。

「は？」

「お姉ちゃんが、用があるって」

「……わかった」

暫く考え、巧は、了承した。

（こ、これって！）

なのは一人で舞い上がっていたりする。

（家で二人つきり！？ だったら、たつくとずかちゃんラブな状態につ！？）

完全にずかの話の聞いていないし、かなりの誤解をしている。

「巧……お、こんにちは」

なのはがトリップしていると、恭也が四人＋一匹の所へやってきた。

「巧。なんでなのは今はあえて聞かないが、後で嫌でも吐かせてやる」

「ふー、ふー……は？」

何故か恭也は怒っていた。

「じゃ、行くぞ。二人とも」

そう言つて、恭也は巧とずかを連れて月村家に向かった。

ちなみに、巧は紅茶を一口しか飲んでいなかったりする。熱さを確かめようとした時の一口だけだった。

- Open your eyes · for the next  
φ · s ! -

### 第三話 新たな厄介事【改訂中】

「で、どこまで知っているんだ？」

「どこまでって、……なんの事だ？」

「とぼけるな！！」

月村家に着くと巧は忍、ノエル、恭也に囲まれた。すずかはおろおろしてそれを見ている。

「夜の一族の事だ！」

ああ、と頷く巧。

「聞いたぞ、すずかに。で、何か問題でもあるのか？」

「——は？」

「別に化け物だなんて思ってたねえよ。……俺の方が化け物だからな。じゃ、帰る」

三人を押しつけて巧は月村家を出た。

いや、出ようとした。

「おい、そこまでされる理由がわからねえんだが」

「……なんで反応できるの？」

忍が驚くのも当然だろう。ノエルが飛び蹴りをしそれを巧はかわした。常人なら骨が砕けるくらいの威力の蹴りを、だ。

「別にあんたらの敵じゃないから排除する必要は無い。だから、いいだろ」

面倒くさそうに巧はそう言って家を出た。

「お、お姉ちゃん、誤解してるって!」

「え、すずか……どういう事? 脅されたとかじゃないって事?」

巧が家をでた後、ようやくすずかが忍に話しかけた。

「うん…あのあと巧君の事を調べていて、私の話をきいていなかった?」

そう、襲われたその日。すずかは巧にばらした経緯を話した筈だったのだ。しかし、忍は財力を使って巧の裏をとろうとしていて、聞き流していた。

それを忍は聞くと、真っ青になった。

「う、嘘、そんな、理解者になりそうな人を……」

「多分、大丈夫だよ。巧君、優しいし。いまどき流行りのつんでれ? だし」

「いや、今の流行りはヤンデレよ」

くそどうでもいい話をしながら、忍は今後巧にどう接するのかを考えていた。

ちなみに、恭也はすずかの話を聞いて、怒りが完全に収まったところか、逆に感心していた。曰く、

『誤解されても大切な物を守ろうとするのは素晴らしい』  
との事だ。

そして、数日後のこと。

「はあ、血をよこせと?」

巧は月村家にまた呼び出された。今度はなのは、アリサも共にだ。先日、恭也達からの詰問があった日、なのはは新しいジュエルシードを手に入れて決意を新たにした。だが、今はそんな事はどうでもいい。なぜなら、そのことはなのはとユーノしか知らないからだ。

前回の非礼について謝った後、忍は巧に血を要求した。

「ええ。私たちの事を知ったら、友人となるか、記憶を消すかのどちらかなの」

忍が言うに、一族の掟とやららしい。

月村家、夜の一族とは人類の突然変異が定着してしまった一族のことだ。いわば、オルフェノクのような急激な進化を遂げたものとは違って、大体同じような感じの進化した人間の集まりだ。

美しい容姿で頭が良く、高い運動能力や再生能力など世の中の人間が何時の世でも欲するものを先天的に持ち、さらには心理操作能力や靈感などの特殊能力を持つ。

しかし、過ぎた力の代償として体内で生成される栄養価のバランスが悪いために完全栄養食である人間の生き血を求める。しかも、異性の。

さらに20歳過ぎると老化は急速に遅くなり、寿命は人間の数倍に及ぶ。

「無理だな」

「ええ!？」

すずかは驚いた。なぜなら、巧は自分の事を認めてくれた初めての人からだ。拒絶されるとは思ってもいなかったのだろう。巧が拒絶したのは、急激な進化の代償としての短い寿命しか持たないオルフェノクとは決して共に歩むことができないからというのと、

「すずかは知っているだろうが、俺は怪物だ。オルフェノク人間を急激に進化させたような存在」

そう言つて、すずか、忍、恭也、ノエルの三人に加え、何故かそこにいるファリンというメイドの前で巧は姿を変えた。

『その血を吸つて、無事でいれるという保証は無い…』  
ということだ。

巧は姿を人間に戻す。

「まあ、友人つていうのはいいぜ」

「本当？」

「ああ」

「……嬉しい」

巧が淡々とした口調で喋っているのを見て恭也が口を開いた。

「お前は辛くないのか？ 人間じゃないことが」

「……俺には仲間がいたし、それに叶えたい夢もあるからな」

どこか遠くを見る目で巧はそう言った。

「にやはは、たつくんは猫に好かれてないね」

「どーせ俺は好かれねえんだよ。ほっといてくれ」

話が終わり、巧とすずかはなのはとアリサのいる部屋に行った。その前に、血液を巧は抜かれたが。忍が「寿命が短いなら私たちと足して割ったらちょうど良くない？」って言ったからだ。

巧はなのはの言うとおり、何故か猫に好かれていない。オルフェノクだからだろうか？ でも、子犬に好かれていたオルフェノクもいたはず。巧は若干拗ねている（ようになのはには見えた）

「あ、あれ？ ユーノが」

猫と戯れている少女たちを横目に拗ねていた（？）巧も異変を感じていた。すずかも何かを感じたようだ。

（何かあるな……）

なのはもユーノを探してくると言っ、外に出て行った。

「俺も行ってくる」

どうせ猫に相手にしてもらえないと思い、巧はなのはを追いかけようとする。

「え？ なんで」

何か悪い予感がするから、とは言えないから巧はなのはの運動神

経について喋った。

すると、アリサはすぐにGOサインを出した。なのはは絶望的な運動神経しかない。

巧が暫くなのはの後を追いかけていると、周りの空気が変わるのを感じた。

「ん？　なんだ、あれ？」

巧の視線の先には巨大な猫がいた。

不意に、聞きなれた電子音がしたかと思うと、バジンを隣に立っていた。

「神出鬼没だな、お前」

渡されたアタッシュケースには黄色い線が入った携帯などが入っていた。

「これか？　……基準がわからねえんだが。別にファイズでいいだろ」

モーターの動く音を立てながら頷くバジン。

やれやれ、とそう心の中で呟きながら、巧はその、カイザギア一式を手にとって、巨大な猫を凝視した。

「でかい」

そして、黄色い弾がいくつもその猫に当たった。

【Standing by】

「何だっ！　変身……！」

【Complete】

光弾が猫に当たったのを見たのと同時に、変身コード『913』をカイザフォンに入力。巧はカイザへと変身した。ファイズよりも力を巧は感じる。

ファイズフォンとは違う、低い音声でカイザフォンは変身が完了したことを告げる。

体には二本のフォトンストリームが流れ、その色はファイズの紅いフォトンストリームよりも強い事を示す黄色。腰のカイザブレイガン、ガンモードを構えた。

「急に光ったと思えば誰だいアン……ひっ!？」

声に反応してその方向を見ると、一人の女性がいた。

(あれは…)

だが、ただの女ではない。狼の耳、更に狼の尻尾まで生えている。

「ア、ア、ア、アンタ人間じゃないね!？」

同じ狼だからだろうか、その女性は巧の『異常さ』を察知した。

「お前のそれ、コスプレか。にしては痛々しい」

巧が一步踏み出したのとほぼ同時に、その女性は一步下がった。

「違う! アタシはフェイトの使い魔だ!」

「フェイトって誰……あいつか?」

巧は空でなのはと戦闘をしている黒い死神のような服装で黄色く光る刃の鎌を持った金髪の少女を指差した。巧にはウルフォルフェノクとしての恩恵か、眼の色が赤い事にも気がつく。

上位オルフェノクには人間体でも様々な能力を持つものもいる。かつて巧が戦っていたラッキークローバーにもそういう者がいた。

（つて、あり得ないぞ、この眼の色は）

そう、遺伝学的にあり得ないのだ。人間の虹彩の色は茶、黄、青を基本としたものだけなのだ。金髪のためにアルビノではない。いや、色がアルビノの眼よりもはつきりしすぎている。

（カラーコンタクトか鬘……いや、わざわざやる理由はないな）

巧は今までを振り返ってみる。

（いや、まさか……そんな訳無い）

思い返せば、海鳴はおかしかった。日本人にしては髪の色がおかしい人が多いし、なのはの眼にいたっては純粋な日本人なのに青い。バジン以上のAIを持つであろうノエルまでいる始末だ。

「異世界、なのか？」

（俺自身、オカルトの仲間なのにな）

だが、巧は思考を切り替える。身内に害する者を排除するためだ。

「お前ら、目的は何だ？ 答え次第では倒す！」

「アタシ達は探し物をしているんだ！ フェイトの邪魔を、邪魔をするなら！」

「じゃあ、月村家に用があるわけでも、なのはの力を利用するといふ訳じゃねえんだな？ じゃあ、何にもしねえよ」

「アタシは勝てなくても……て、ええ！？」

野生の本能か、彼女では巧に勝てない事は分かっていたようだ。

「ほら、行け」

そう言って空を見れば、金髪の少女、フェイトがなのはを気絶させて、巨大な猫に雷を落とし、元の大きさに戻っていた。

「アンタの名前はなんだい？ アタシはアルフ」

「乾巧だ。さつさで行け」

しっし、と手を追い払うように巧は手を振る。すると、アルフはフェイトと共に空を駆けていった。

「必要無かったな。これ」

巧の呟きにバジンは肯定するように頷いた。カイザフォンを取り外して巧は変身を解除。カイザギアー式をバジンにたくしてなのはの所へ向かった。

「んん……ううは」

（あの女の子に攻撃されて、それで……）

「起きたか」

「もう心配したのよ」

「運動神経が切れているのはらしいな。フェレット探そうとしてこけて気絶するなんて」

なのはが目覚めると、ベッドの上だった。

「って、お兄ちゃん酷いの」

頬を膨らませてなのはは抗議した。

「なのはちゃんを運んでくれたのは巧君だよ」

「えっ、そうなの？」

すずかにそう言われてなのはは巧を探す。

「ふーふー」

巧は紅茶を冷ましていた。隣ではファリンが謝っている。

「ねえ、ファリンさんどうしたの？」

「いつものおっちょこちょいで巧君に熱い紅茶を出したのよ」

月村家の二人目のメイド、ファリンは完璧に何でもこなすノエルと違っておっちょこちょいをやらかす。本日はなのは達に紅茶を出した時の失敗も含めて、二回目である。

（ファリンさんなら仕方無いよね）

余談だが、巧は紅茶を冷ますのに十五分費やしたらしい。隣ではファリンが謝り続けていたとか。

（無い！ 無い！ どうしてだ！）

巧は心の中でうめく。ここは図書館。海鳴で一番大きい所だ。パソコンの検索ボックスには『スマートブレイン』と打ち込んであった。子供の体になってから不思議に思っていたのだ。

『あの大企業が倒産したのだから、たまに特集があってもいいのに、何でないんだ』  
と。

巧は頭を抱えて考え込んだ。月村家で芽生えた疑問は消えない。

（ここは異世界というのは分かった。これは紛れのねえ事実。でも、どうしてだ）

魔法や人外の生物が混在する世界。そして、大きな力を持つ宝石。その全てが巧の頭を悩ませる。

（何故ギアー式があつたりバジンもいる？）

巧はその頭を抱えた姿勢のまま考え込んでいた。

「……い？　おーい？」  
「は？」

不意に呼びかけられて、巧は顔を上げた。声をかけたのは巧の見知らぬ、車いすで茶髪の少女。

「なんだ」

「よかったあ。死んでたわけじゃなくて」

関西なまりの声だった。

「死んでるわけねえだろ」

そう言うと、少女はあはは、と笑った。

「本当はな、あの本を取ってほしかったんや」

指さした方向を見ると車いすに座っている彼女では届かないくらいの高さだった。

「この人に頼めばいいだろ」

「いやな、私はいまこの足のせいで学校休んでいて、友達がいらないや…せやから、年も近そうやし、お話しできたらな、て」

そうか、と頷き巧は本を取って彼女の手に渡した。

「ほら。じゃな」

「おおきにな。あ、私の名前は八神はやて、九歳や。君は？」

「乾巧だ。一応同い年だ」

「ほんまか？ よろしくな、巧君」

ああ、と頷いて巧は図書館を出た。

高町家への帰り道に巧はいきなり背後から襲いかかられた。

「なっ!？」

「くっ、今のを避けるとは……やはりただの少年ではなかったか」

襲った犯人は謎の仮面をかぶっており、髪は青く長身だった。

「てめえは誰だ？ 何のようだ」

「とばけるな。それを聞きたいのはこっちの方……だっ」

男は右足を蹴りあげ、巧を襲う。対する巧はそれをかがんで避け、間合いを開けた。それと同時にバジンがバスターホイルから十二mm弾を大量に発射する。男はカードを使って、プロテクションを発動させた。

「お前も魔法使いか！」

「質量兵器か。……少年、そのような機械を所持して彼女に近づくとは、厄介だな。本来ならばリンカーコアをいただく所だが、まだあれは覚醒もしていない。だから死んでもらおう」

「わかんねえ、ぜんっぜん意味がわかんねえ!!」

巧は先日使用しなかったカイザギアをバジンから受け取り、変身する。

【Standing by】

「変身!」

【Complete】

フォトンブラッドの輝きで一瞬相手をひるませ、その隙に巧は一撃を加える。

「そらっ!」

「ぐっ」

男は人形のように吹き飛び、ビルの壁に突き刺さった。結界が張ってあるらしく、かなりの音がした筈なのに誰ひとりとして男が激突したビルから顔を出さない。

そして、巧は振り向きざまにカウンターキックをする。

「そこだ!」

「うわっ!」

さっきビルに刺さった男と全く同じ姿の男は派手に飛んで行った。

「二対一かよ。危険だから倒す」

巧は未だに立ちあがれていない一人目の男に向かって走り出す。大方脳震盪でも起こしているのだろう。体に力が入りそうにもない。だが、

「くっ、撤退だ……」

男がカードを取りだすのが早かった。一瞬で男二人は転移してしまった。

「卑怯だな」

カイザフォンのENTERキーを押し、変身を解く。

「また厄介事に巻き込まれた気がするぞ……」

「どうでしょうか」

「馬鹿な奴らは多いわ。全く、自分たちの行動で首を絞めているというのに」

そこは明るい部屋だった。そこには二人の女性がいた。身分が上に見える女性は目の下に隈がある。

「全く、聖王教会にも見放されるし、管理局からは生体ロストロギ

アとして封印指定……事実上の殺害ね」

「力と心が育ってませんからね」

二人が覗き込んでいるモニターの先には大量の灰があった。

そこは戦場。

多くのオルフェノクが入り乱れ、己の獲物を振り回している。

「私たちが止めなければいけません。同族として」

「ええ、なんとしても、私たちと人間との共存のために……」

二人の女性はそう呟いた。

部屋の扉が開いた。

「すみません！ 隊長、副隊長。少々撤収に戸惑いましたが、諜報部隊無事、帰りつきました」

「お疲れ様です。ささ、部隊長さんもおかけに」

「いえ、お構いなく。重要なお知らせが」

「なにかしら？」

部隊長と呼ばれた男の報告はこれだ。

「……彼らは自らをオルフェノクと名乗って、世界を征服しようとしているですって！？」

「はい。我々に起きた急激な進化。それが起きた者をオルフェオノクと、彼らは呼んでいます」

男はモニターを操作した。

「私たちは人を自分たちと同じ存在に作りかえることができます。だから」

男は決意を込めた目で、二人の女性を見る。

「仲間を進んで増やそうとする奴らは、止めなければなりません」

- Open your eyes · for the next  
t Φ · s ! -

#### 第四話 海鳴温泉にて【改訂中】

「お、こんにちは。巧君」

「……なんだ、お前か」

「『お前』やのうて、『はやて』って呼んで欲しいなあ。友達なんでしょう」

「いや、いつ友達になった？」と巧は心の中で突っ込む。ここはとあるスーパー。巧は高町一家。忍、すずか。そのメイドのノエル、フアリン。そしてアリサの参加する温泉旅行のための買出しに出ている。

実際、行くつもりは全く無かったが、家に居候させて貰っているため、士郎に頼み込まれると拒否できなかったのである。

「あ、あれを取ってくれんか？」

「ほら」

「おおきにな」

「ふん」

「ふふっ」

巧はさつさと買い物を済ませてスーパーを出ようとした時にはやてに出くわした。だから、彼女の買い物の手伝いをしている。

何故、手伝いとか面倒臭がりそうな巧が彼女の手伝いをしているのか。少なくとも、進んではないが、彼はこれからも手伝うだろう。

巧は『孤独』を味わった事があるから。更に言うと、母子家庭で育った彼には親がいない寂しさが分かるのであった。

旅行当日、巧には座席が無かった。ということだ、

「あ、おい！ 押すな」

「あー！ もううつさい！ 少しは黙っていなさいよ！」

となった。確実に車内は乗れる数を超えている。

例年はアリサの親達も来るのだが、今年はこれなかったらしい。

この温泉旅行は三家の恒例行事だ。バニングス家の車が無いために、座席が少なくなってしまったのだ。

まあ、巧がバジンにのればよかったのだろうが、流石にそればかりではない。

また、恭也達が乗っている方に誰かが乗れば良かったのだろうが、恭也と忍のラブラブ空間に入れる勇氣を持った者はいなかったようである。

「喧嘩やめようよ」

「巧君、アリサちゃん」

道程は、遠い。巧達は狭い車内で何とか耐えている。

が、しかし。常時色々と言っている巧とアリサはいつものように喧嘩している。

「ほらほら、仲良くしましょうね」

思わず桃子がそう言ったが、

「はい」

「……猫かぶり」

「なんですって!？」

巧とアリサが喧嘩し、それをなのはとすずかが止める。これは日常茶飯事だ。誰かが止めなければ終わらない。

「ついたよー」

「……やっとか」

「んっ、ふぁ……眠い」

「あは。すずかよく寝たようね」

ようやく旅館に着いた一行。よく考えればノエルやファリンあたりがバジンを操縦し、二人乗りをすればよかったのではないのか。誰ひとりとしてそんな事を考えもしなかったようである。

そもそも、バジンは巧の七不思議（なのは命名）のうちの一つである。

巧は誰ひとりにもこれが三回目の人生だとは言ってもいない。そのために、幼かった子供の傍に何故バイクが置いてあったのかがなのはには疑問だったのだらう。いや、巧自身にも理由は分かっていないが。

巧の七不思議は『バイク』、『アタツシユケースの中身』、『誰も持っていない携帯』、『倒れていた理由』、『大人びた言動』、『夜でも見渡せる目』、『猫舌（笑）』だ。ちなみに、この七不思議は女子三人の間だけで話されており、巧はそんなことを言われているとは全く知らない。

…まあ、すずかは図らずしも半分くらい真実を知ってしまったが。

上級オルフェノクであれば人間態でも様々な特殊能力を発生させることが出来る。オリジナルで、オルフェノクとして戦ってもかなりの強さを誇る巧には、その気になれば狼とほぼ同程度の視力で見ることができ、暗闇でも問題なく行動できる。

さて、三人のうちで巧の秘密をよく知る少女であるすずかは先ほどまで巧の肩に頭を預けていたのだが、それをなのはが見て何と想ったのかは想像しやすいだろう。

「じゃ、たつくん、お兄ちゃん。また後でね」

「巧！ 覗かないでよね！」

「誰がその貧相な体に興奮するか、馬鹿」

アリサの発言を軽く受け流す巧であった。

「あ、ちよつと！！ 待ちなさいよ！」

「行くか、恭也」

「ああ」

「無視するな——！！」

巧と恭也は男湯に向かい、女子組は女湯へと向かった。

…そうそう、忘れていないとは思うが、ユーノは無事なのはに連れられて、女湯に入った。必死の抵抗も叶わず、巧をファイズと

知らないため念話で救いを求めれず、孤立無援の状態。頑張れ。負けるな！

フェレットな彼も、一応(?)健全な男である。先ほどの巧とは違って少しは女の裸に興味があるのであろう。見ないように、見ないようにしながらもちらつと見ていたりしていた。

さて、場所はかわって男湯。全く人がいないために、ほぼ貸し切り状態だった。

「ふう、広いな」

「ああ。……そういえば」

恭也は思いついたように巧に声を掛ける。

「姿変えたときだ。服、どうなってるんだ？」

「はっ？」

恭也はオルフェノクの状態となったときに、服がどうなっているのが気になったらしい。

「ほら、今変身してみろ」

『ん? どうか?』

「そう。ほら、身長も俺と大差ない。でもさ、服着ているときはどうなっているんだ？」

「気にした事もなかったな」

この瞬間に、恭也から見た巧の不思議に『怪人になったときに服がどこに行くのか』が増えたという。

「まあ、それはさておき。最近なのはが夜に出かける事が多いが、どうしてだ？ お前も同じくらいに出たりするだろう」

「気付いていたか」

「当然だ。……やっぱり、あのときと同じか」

恭也の言う『あのとき』とは、少し前に起きたプールでの事件だ。簡単に説明すると、なのはたちが行き、恭也が監視員をしていたプールでジュエルシードが発動したというものだ。

巧はジュエルシードの破壊をしようとしたが、なのはが封印をした。まあ、この事件については機会があれば語ろうと思う。

「ああ。そうだ。やっぱりあいつを止めるのか？」

「そうしたいところだが、あいつの芯の強さは俺よりも強いかもしれないから無理だな」

事実、高町家のヒエラルキーの頂上になのはは君臨している。

先の事件で恭也は魔法と言う物を知った。

「おい、てつきり止めと思ったぞ」

「妹の成長を見守るっていうのも兄の役目だ」

「……もう少し過保護でもいいだろ」

「お前が守ってくれるさ」

「当てにすんな」

巧は苦笑しながら湯につかった。

「……ここにあるんだね。バルディッシュ」

【Yes sir.】

「フェイト。もう済んだかい？」

「うん。終わったよ、アルフ」

フェイトもジュエルシードを求めて温泉街へと来ていた。  
バルディッシュがフェイトの問いに答え、アルフが地上から木の上  
に立っているフェイトに問いかけた。

「ねえねえ、温泉に入ってもいい？」

「はあ……いいよ」

「やった〜」

フェイトは苦笑いしながらアルフを見る。

「じゃあ、夜にまた、ここで。私も興味あるから」

「ハイハイ。じゃね」

「うん」

フェイトは軽くめまいを覚えて、頭を押さえる。

「ふう、最近疲れているんだろうな……」

（でも、ジュエルシードを集め終わるまでは、止まらない）

そのままフェイトはどこかへ消えた。

「はあ、いいわね、こういう休日は」  
「ああ、そうだな」

士郎と桃子は池の周りを散歩していた。

「巧君も馴染めているみたいだし」  
「…そうだな」  
（どうか、このまま平和でいたいな…）

ちなみに、散歩している間、ずっと手をつないでいたのはこの夫婦の仲の良さを物語っているだろう。

散歩している二人を見た旅行客は「ああ、新婚旅行か」と勘違いしながら見ていたという。全く、高町の夫婦は何かズルでもしているのではないかと疑いたくなるくらいに若々しい。

士郎と桃子が散歩しているのと同時刻。

「はい、お茶どうぞ」  
「ありがとう」

「ん」

男組は既に温泉は上がっていた。まだまだ女組は長くかかりそうだが、ノエルは違う。

「ノエル、今日は仕事じゃないんだからのんびりしたっていいんだぞ」

「はい、それはもちろん。のんびりさせてもらいますよ!」

ノエルに休息が必要なのか甚だ疑問だが、本人がそう言っているのだからのんびりするのだろう。ちなみにオートバジンは高町家でお留守番である。もし出てくる事があればそれこそ近所の不思議に入る。

バジンの救援が期待できない巧はファイズギア一式と、もしものためのファイズブラスターを持ってきている。まだファイズとしての姿はすずか以外には見せていないため、個人的に持ってきた。

ちなみに、この荷物も先の巧対アリサの喧嘩の原因にも一役買っているのだが、それはまた別の話だ。

「ん?」

「巧、どうした?」

「巧さん?」

巧は不意に顔を上げて、あたりを見回した。

「気のせいかな」

(今、誰かの悲鳴が聞こえた気が…)

またまた同時刻、女子はと言うと…

「さて、ユーノ。洗うわよ」

「きゅう」

アリサは右手でユーノの首を掴み、左手をワキワキと動かした。

「キューーーーーー！！！」

美人、美少女にもみくちやにされながらも体を洗われていたフレットがいたとかいなかったとか。

端から見れば「おいユーノ、代われ」と言いたくなるかもしれないが、彼はフレット。人間よりもかなり小さい生命体。

恐怖心も大きいだろう。

「ん、気のせいだな」

巧はあながち間違っているとは言えない判断をして立ち上がった。こうしてユーノは見捨てられたのである。

「お、どこに行くんだ？」

「暇だからな、少し歩いてくる」

巧は歩き出して、止まった。

「鬱陶しいな」

胸にかけていたネックレス。ゆと描かれたそれを浴衣の中にしま  
うとその部屋を出た。

「旅館に猫か……？」

部屋の外にいた二匹の猫は猛ダッシュで走り去って行った。

「転ぶぞ？」

巧はそう呟くと外へ向かった。

外は草木の生い茂っている所だった。池があつて、川が流れてい  
る。巧は川原で仰向けになって横になった。まだまだ小学生なのに  
その姿は様になっている。浴衣が汚れるのを気にせずに空を仰いだ。

「起きなさい！ 探したわよ」

「……あ？」

巧が寝転がって暫くすると、聞きなれた声がした。

「なんだ？」

「今から卓球するの」

巧を起こしたアリサの後ろには茶髪と青髪が見えた巧は面倒臭えと言って再び瞼を閉じた。

「たぁーくぅーみいー！」

「にゃ！？ アリサちゃん！？」

「暴力は駄目だって」

拳を握り締めて、アリサは今にも襲いかかるうとしていた。

「ったく、俺なんかにつき合っていないで他のヤツらとつるんどけよ」

巧は立ち上がって、その場を後にした。  
後には三人が残る。

「やっぱり、駄目なのかな……」

「うーん」

残された三人は腕を組んで考え込んだ。

「アイツ、友達もないし」

「そう、だよな。私もお兄ちゃん達もたっくんに積極的に話しかけられないし」

「どこか人を避けてるような気がするの」

巧には友達がない。いや、出来ないと言った方が正しいだろうか。オルフェノクであるため、いつ自分が他人を傷つけてしまうのかという恐怖。それを抱きながら過ごした十数年。それが大きいのだろう。ファイズとして闘うようになってから幾分解消されたが、彼の心の壁はまだ完全に消えてはいない。

更に、巧は本来なら二十代である。開きのある年齢、それもあつて会話がきちんと成り立つ訳でもない。たいした趣味や特技を持つ訳でもない巧が孤立するのも当然だ。

……いや、ギターは特技だ。でも、それを知っているのは学校の音楽の教師だけだ。なぜなら弾く時は人目のつかない所で弾くからである。

「アリサちゃん、巧君のこと心配なんだね」

「ふんっ、親友の家族だから心配してるのよ！」

「意外と世話焼きたがるから」

「もう、なのは！ そんなのじゃないって！」

アリサは顔を赤くしながら二人に怒鳴った。

「卓球面白かったねー」

「すずか強かったー」

「そう言うアリサちゃんも」

卓球を終えた三人は廊下を歩いていた。

「ハ―イ！ おチビちゃんたち！」

不意に三人は赤い髪の女に呼び止められる。

「ふんふん、君か。うちの子をアレしてくれちゃってるのは？」

三人は訳も分からずただ戸惑うだけだ。女はなのはをじっと見つめる。

「あんま賢そうでも強そうでもないし、ただのガキンチョに見えるんだけどな？」

「あ……あう」

凄いいわれようである。流石にアリサが動いた。

「この子あなたを知らないようですが、どちら様ですか？」

流石は大企業のご令嬢。相手が大人でも物おじせず自分の言いたい事を言う。

「――あはははは！ ごめんごめん。人違いだったかな？ 知ってる子によく似ていたからさ」

「あ、なんだ。そうだったんですか……」

「あはは。……可愛いフェレットだねえ」

そう言って女はユーノに触れる。

「よしよし」

「（今のところは挨拶だけね。忠告しとくよ？ 子どもはいいこにしてお家で遊んでなさいね。おイタが過ぎるとガブツ……っといくわよ？）」

「え？」

なのはは訳も分からなかった。初対面の相手にかまれた後に念話まで使われて話しかけられたのである。

「お前、こいつらが迷惑してんだろ」

「誰だっ！」

「お前こそおイタが過ぎるとがぶっ……っといかれるぞ？ アルフ」

急に女は後ろから話しかけられ、振り向くとそこには巧がいた。

「アンタあの時の」

「さあな。ほら、さっさといけ。本当にガブツといかたくなければな」

「さ、さ〜て。もうひとつ風呂いってこよ〜っと。……それじゃね〜」

いきなり現れた巧に三人も驚いている。そして、相手の名前を知っていた事も。

「あんた、あの女の知り合い？」

「さてね。あんまり無防備だとまた絡まれるぞ。じゃな」

そう言っ、巧はなのは達が来た道を歩いて行った。その近くの

茂みがかすかに揺れたのはだれ一人として気付かなかった。

「やっぱりたつくんって……」

「巧って」

「うん」

三人とも、声が重なった。

『ツンデレだよね』

t - Open your eyes · for the next  
Φ · s ! · -

## 第五話 ピカピカの正体【改訂中】

「四人とももう寝ちゃった？」

「巧君以外は」

「んー、やっぱりね」

夜、子供はもう寝る時間。桃子とファリンは話していた。

先ほどまでノエルが本を読み聞かせており、それが終わった後になのは達は寝ていた。だが、巧は違う。

巧は川に向かって走り出していた。昼の時から何か変な気がしていたのだ。遠くで轟音が響いた。

「何がどうなっているの？ あなた！」

「ここは何かおかしい！ ここは恭也に任せるから俺は巧君を追ってくる！」

士郎は巧が駆けだした直後に外に出た。危険を察知したからだ。

「待ってくれ。父さん、母さん」

「どうしてだ。恭也」

「理由は言えないけど……頼む！ 追わないでくれ！」

恭也は士郎の前で頭を下げて頼み込んだ。それを見て、士郎は恭也に詰め寄る。

士郎の顔は最早一刻の猶予もないといった風にかんりの形相であったが、恭也はそれに臆することなく対峙する。

「これは巧達の問題だ。だから、干渉しないでくれ。それに父さんがまたいなくなったりしたら……」

「私達からお願いします」

忍、ノエル、ファリンも外に出てきた。

夜の一族としての第六感が告げたのであろう。……まあ、同じ夜の一族でもすずかは深い眠りに入っているようで異変には気付いていない様子であったが。

「巧君はもう『こつち』の人間です。……いえ、既にです」

「そんなことは分かっている！ 出会ったときから！」

士郎は腰に付けている二振りの木刀を持って、恭也を睨んだ。

「……巧君にも平和が必要だ。あの子がどのような人生を俺たちと会合うまでに歩んでいたのかは知らない。けど、戦場にいた事のあるような独特の雰囲気を持っていた。だからもし、戦いに関わっていたのなら二度と関わらせたくは無い」

「そんなのは俺だっけわかってる！ 俺だっけこの平和を守りたいでも、それとこれとは違う！ 巧には今は関わっちゃ駄目なんだよ！ ……俺たちが決められるような問題じゃないんだ」

「なら、巧君の何を知っていると言っただい？」

「父さんよりも多くだ！」

恭也も同じようなものを腰から抜く。今まさに人知を超えた戦いが始まるうとしていた。

「ここか。変身！」

【Complete】

巧はウルフルフェノク疾走態から人間に戻り、ファイズへと変身した。巧がたどり着いた場所には既にフェイトとアルフがいた。

「うっは。すごいね、こりゃ」

「それどころじゃねえだろ」

ジュエルシードは大きな光を放ち、今にも爆発しそうである。

「っ！ アンタ」

「今から壊すからどいてろ」

そう巧は言うど、ファイズポインターを右足にセットし、ミッシェンメモリーを挿入しようとした。

だが、それを聞いたアルフが大声を上げる。

「破壊するですってえ！？ こんの……こっちの事情も知らないで

！」

「はあ？ 俺にとってはお前はただの他人だ。別にどうだっていいんだよ」

「大丈夫……私が封印するから。乾巧さん。バルディッシュ、起きて」

【yes, sir】

そう言うと同時にフェイトの手にはバルディッシュが握られた。先ほどまでとは違い、強い風が吹き抜けてフェイトのマントが強くなるため。そのまま彼女は両手でバルディッシュを掴み、封印の体勢に入った。

「そっぴゃ、アంత。アタシの念話を聞けたわね」

「念話って何なんだよ」

「あら？ 知らなかったの？ ……そう言えば、前と格好が違っし、バリアジャケットを脱いだ時はフェイトと同じ年ぐらいじゃない」

【Sealing form・Set up.】

フェイトに雷が降り注ぎ、周囲に更に暴風が吹き荒れる。巧は思わず声を上げてしまったが、周囲に落ちてきているはずの雷は一切彼らの付近にこない。

安全だと判断した巧は会話を続ける。

「違う、これはファイズだ」

「ファイズう？ なにそれ？」

「お前が目的を俺に教えたなら教えてやるよ」

バルディッシュから光の羽が生えた。準備が出来たようだった。

「アルフ、封印するよ。サポートして」

「へいへい！」

そしてフェイトがジュエルシードを封印するとともに強い光が発生した。

「あれは!？」

走るのを止めて、空を見上げる。

「二つ目……」

目の前にいるフェイトは手に入れたジュエルシードを手を持っている。

なのはとユーノはその姿を見て、思わず立ち止まってしまった。

「あ……」

「来たか、なのは」

「なんで私の名前を!？」

巧がファイズとは知らないのはが驚くのも無理はないだろう。昼間の様子からして知り合いだと思っていたアルフはふと疑問に思っ  
て念話を繋げる。

「（アンタ、あの子に戦ってる事は）」

「ああ、教えていない」

ふうん、と納得したような納得していないような声を上げる。

そして、アルフはなのはの方を向いた。

少々わざとらしいほどに呆れた顔、声を作って話しかけた。

「あー……ら、あらあら。子供はいい子でって言わなかったかな？」

「それを、ジュエルシードをどうするつもりだ！」

「なら俺からも質問だ。お前はなのはをどうするつもりなんだ？」

アルフが何かを言おうとしたのとほぼ同時に、巧はなのは達に向かってそう言いつつ一歩踏み出す。

前々から思っていたことだった。

「そもそもお前がなのはに会わなければなのはは危ない目に合う事もなかった」

なのはが魔法に出会った最初の日、どこからどうみてもなのはは生き残る事が難しく見えるほど闘いに関しては無知だった。無理もない。人が争うのを見てられないような子だから。

そういうなのはを知っているからこそ、こういう戦いの場にはふさわしくないと巧は思っているのである。

「ま、あんたらがどういふ関係かは知らないけど……あたし、言っただよね？ ガブツといくよって」

アルフは暫くそのやりとりをみていたが、しびれを切らす。

アルフの体に変化し始めた。爪は鋭くのびて、体は毛におおわれる。

『オオオオオオーーーーー！』

正真正銘の狼だ。

オレンジ色の体毛。額には宝石。

「これは……」

「やっぱりあいつ……あの子の使い魔だ！」

「使い魔！？」

今まで様々な超常現象を見てきた巧であつたがその様子には驚いてしまう。なのはやユーノも同様で、驚愕していた。

「そうさ、私はフェイトに作られた魔法生命体。…先に帰つてて。

すぐに追いつくから。あんたもどいてな！」

「無茶しないでね」

フェイトがそう言い終ると同時にアルフは空高く飛びあがつてなのはに襲いかかった。なのはは動く事が出来なかったが、代わりにユーノが動いた。

ユーノは足元に魔法陣を展開、シールドを作る。アルフは攻撃しようとしてそのシールドに阻まれた。

「チィッ」

「なのは！ あの子をお願い！」

アルフはシールドをひっかく。

ミシミシと音を立てて浸食されていくが、サポート系の魔法が得

意なユーノである。強度は弱まるどころか強くなっていった。

それでもアルフも負けずに力を入れる。拮抗し、両者とも力を振り絞りながら押し合っていた。

「させるとでも……おもってんの!!」

「させて……見せるさっ!!」

ユーノはそのまま頭上に魔法陣を更に展開。苦しい状況の中でも更にもう一つの魔法を行使しようとしているのである。

アルフはその魔法を感知して驚く。そう、それは

「移動、魔法？　まずいつ」

「ふっ!!」

すると、光の柱を作りながらアルフとユーノは消えた。後に残されたのは巧、なのは、フェイトだけだ。既にそこは結界に覆われていた。

「……結界に、強制転移魔法。良い使い魔を持っている」

「ユーノ君は使い魔って奴じゃないよ。私の大切な友達。そして、なんでここにいるの？　ピカピカの人!」

「ピカピカっておい……」

そう言うと、巧は変身を解除した。光に包まれて現れたのが自分がよく見知っている人間ということにぽかんとしたなのはであった。その様子に巧は苦笑した。

「えっ?」

「まあいい、二人で思う存分やってくれ。フェイトにはお前を傷つけることができないからな」

「巧さん、それってどういう」  
「巧でいい。じゃあな」

そう言うのと、巧は旅館に向かって歩き出した。旅館に残っている人たちへの説明のために。

勝手に抜け出したことをどういう風にこまかそうかと考えながら巧は歩いて行った。

巧が旅館に戻ると、正座している土郎と恭也がいた。先ほどまで戦闘が勃発しそうな様子だったというのに今は二人仲良く並んでいる。

頭の上にはそれぞれたんこぶをこしらえていた。それも相当の大きさである。

で、その目の前には……

「……うふふ」

笑ってる。でも目が笑っていない全ての元凶（と予想される）桃子がいた。

「なんなんだ、一体。ぜんっぜん状況がつかめねえ」

「あ、巧君お帰りなさい。この人たちいたらいきなり木刀を持ちだして戦い始めるから反省してもらっていたの」

巧はただ、頷く事しかできなかった。背中には冷たい汗が流れて、

拳も汗ばむ。

（下手すりゃ強いオルフェノク以上の威圧感だぞ、オイ）

結局、二人への桃子からのお説教でうやむやになったのか、巧は何も言うことなく次の日を迎えた。なのはは落ち込んで帰ってきたため大方負けたんだろうと巧は推測した。

なのはが何か言いたげな表情で自分を見るのを涼しげな表情（外から見れば何時もの不機嫌顔）で流していた。

帰宅後、彼は街へと繰り出した。

「お、巧君温泉どうやった？」

「……まあまあだったな」

「そうかあ。私も行きたかったなあ。今度一緒に行こうな」

うろろろしていたらはやてに出会った。はやては買い物と言う事でその日も巧は付き合う事にした。

「……は？」

「いやあ、冗談よ冗談。じょーだん。そこまで驚かんでな」

はやての冗談に巧は過剰反応を示す。予想もしていないことを言われると人間はたまにこういう風に思考停止に陥るものだ。

「今日もありがとな」

「ああ。俺は帰るぜ」

「じゃあな」

巧は家に帰ろうとしたが、その前にあるところに向かった。

「よう。何やってんだ」

「ふえ！？ たっくん」

「どうしてここに」

向かったのはなのはとユーノが魔法の練習をしている公園。そこではなのはが飛行魔法の訓練をしていた。

「いや、お前らと関わることになりそうだし魔法についてしらねえとな。それに」

「それに……？」

巧は暫く考え言おうと思ったが止めた。この事はなのは達には関わらせたくもないし危険だからだ。オルフェノクは人間じゃ太刀打ちできない。せめて生身で恭也くらいの力が無いと厳しい。

魔法を使える人間ならばオルフェノクを倒せると一瞬でも思ったが、それはベルトの資格があるから奴らを倒せるというのと同じ。いくら彼女が天武の才能を持っていようと実践経験が無ければ命の駆け引きなんてとてもじゃないがさせられない。

「なんでもねえよ。おい、そのフェレットモドキ！ おめえにも言いたいこととききたい事がある。聞かせろ」

「……うん」

そうして、巧達は高町家に戻り、なのはの部屋に入る。慣れたもので、部屋に入ることにはあまり抵抗は無かった。

適当なところに巧が腰を下ろしたのと同時にユーノが話し始める。

「まず、魔法には一般的にミッドチルダ式とベルカ式があるんだ。

ミッド式は主に遠距離、ベルカ式は近距離戦闘に向いていると言われている」

「私のはどっちなの？」

「僕もなのはも。そしてあの子たちもミッド式だよ。それで、魔法はリンカーコアと言うのを持っていないと使えないんだ。魔法が浸透していない所…簡単に言うところこの世界の警察に似た管理局と言う組織があるんだけど、それが管理していない世界の人間の体にリンカーコアがあるのはまれ。なのはは突然変異みたいなもので持っているんだ。そして……」

「で、魔法とやらは俺にも使えんのか？」

【Of course. You have magical power too.（もちろん。貴方も魔法の力を持っています）】  
「でも、なのはは才能があつたからすぐに飛んだりできたけど、普通は出来ない事が多いんだ」

ユーノに魔法についての講義を受けた巧はひとまず質問をした。  
ただ単に、つかえれば便利だな程度に聞いたが、巧も魔法の力を持つていたらしい。レイジングハートが知らせた。

まあ、それでもどの程度の魔力量なのかまでは分からなかったが。

「で、なんでたつくんも魔法を使おうとおもつたの？」

「……最近、へんな仮面をかぶつたやつらに襲われたりしたんだよ」

その言葉を聞いたなのはは驚き、巧はすぐに返り討ちにしてやったがと言ったがなのはは驚いたままだった。

「そ、それって大変なの！」

「だから、返り討ちにしてやったって言っただろ。心配すんな。そう言えば、転移魔法もすぐに出来るものなのか？」

「違うよ。僕は補助をメインにしているけど、君の言うような瞬時に移動なんてそんなに出来ないよ。できたとすれば既に準備をして

いたということか、瞬間移動能力を持っているってことかな」

巧は考える。男はカードを使った瞬間に転移した。つまり、

「逃げ帰る事も考えていたという事か。わかった。じゃあな」

そう言っ巧はなのはの部屋を出ようとした。が、

「ちょっと待ってくれ！」

「んだよ。フレットモドキ」

ユーノに呼びとめられて巧は振り返る。

「こっちは話したんだ。君のあの姿についても教えてくれ。あと、  
念話ぐらいは使えないと」

たしかにと、巧はつぶやく。確かに口に出さないで喋れるのは便利だ。

「わかった。ちょっと待ってろ」

巧は自分の部屋にいったん入り、アタッシュケースなどを持ってくる。

「ファイズ？」

「そうだ。ファイズ。スマートブレインが作りだした最後のベルトでファイズギアによって変身する戦士だ」

巧はアタツシユケースを開けてファイズギア一式を見せる。

「着用には制限がある。お前らには使えねえ」

着用条件などは意図してほかす。

「これはカイザギア。ファイズよりも遅いがパワーがある。これも制限があつてお前らには使えねえ。で、これがデルタギア。ほかのギアと違って音声入力だ。これには着用制限は無いが、おすすめできない。人間の闘争本能に直接働きかけるから最悪理性が崩壊するな」

そう言つてデルタフォンを巧は回す。厳密に言えば、彼がそう思つているだけで条件は分かつていない。オルフェノクの因子を体にかけている人間しかデルタを使ったことがないからだ。

だが、オルフェノクである巧には何の影響も出なかったが。因子の影響が強い人間は力におぼれなかったが、それが薄かった人間は体内に力が残留し、凶暴な性格になった。

巧は三つのギアをしまう。

「そして、この二つはサイガギアとオーガギア。資格が無い奴が使うと瞬時に死ぬ」

二つのアタツシユケースは開けないままに言った。

「まあ、これらには触らない方がいいな」

そう言つと、なのはが目をキラキラさせながらギア一式を見つめていた。

「んだよ」

「それ、全部見たことないの！」

ああ、確かこいつ機械が好きだったよなと、巧は今更ながら思い出す。

彼女は本当に幼い頃から機械の扱いに長けており、大人でも使用するのに戸惑うような機械などを簡単に操作する。

「危険だから駄目だ。これらに使われているフォトンなんかは人体に有害らしいからな」

巧の言うフォトンなんかは、フォトンブラッドの事である。空気に触れた瞬間に化学反応を起こして劣化。周囲に生物が住めなくなるほどなのだ。

「……なんか残念なの」

「そして最後にこれ。ファイズブラスター。ファイズ専用の強化ツールだ」

「へー」

「こんなのであんな威力を出すのか。……こんな辺境にこんな兵器があるなんて。見た感じ質量兵器でもないし」

「まあ、それは鍵みてえなもんだけどな」

ユーノはファイズフォンを手に持ちながら呟く。ジュエルシールドは小さいながらも高密度：生物を取り込んで暴走させるような魔力を秘めている。それを魔力を使わず、それでいて質量兵器とも言えない物を使って破壊したファイズは彼にカルチャーショックを与えたようだった。

ユーノの住んでいた所は先ほど彼が言っていたが、管理局と言う

組織に管理されている。その組織では銃、ミサイル等の地球で使われている兵器のほとんどが使用禁止されている。だが、ファイズなどのフォトンブラッドは質量兵器とも何とも言えない。見ただけでは魔法とすら変わりないのだ。つまり、魔法が使えない人間でも力を得る事が出来るのだ。

（この事を管理局が知ったら……）

巧は追われる身となる。管理局自身の保身のために。

旧い結晶と無限の欲望が交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる

蘇りし優しい心を持つ起源の二匹の獣は今再び出会う

王を守りし戦士が力を解き放つ時、偽りの世界は終焉を迎える

だが、不屈の心に迷いが生れし時

今再びの災厄が訪れん

青き薔薇の灰、死者の復活が始まりを告げるだろう

神の血を受け継ぐ者の音楽が死者の国へと誘う

「何、これ？」

少女は呟いた。彼女の持つ古代ベルカの稀少技能「レアスキル預言者の著書」プロフェーティン・シュリフテン

それは未来を予言するもの。最短で半年、最長で数年先の未来を、詩文形式で書き出した預言書の作成をする能力。二つの月の魔力の影響で年一度しか作成できない。しかし、解釈の違いで大きく予言が変わる。更に、預言の中身は古代ベルカ語で難解な文章。翻訳も

難しい。

しかし、それは確実に世界の危機を知らせていた。

「死者の復活？ まさかつ」

少女はモニターを目の前に出現させて連絡を取り始めた。  
世界を救うために

果たして彼女の下した判断が正しかったのか、それはまだ分からない。ただ、唯一言えることは世界に今までにない危機が迫っている、ということだけであった。

t  
- O p e n y o u r e y e s · f o r t h e n e x  
t  
Φ · s ! ·

## 第六話 灰色の蛇【改訂中】

「まあ、なのはが不思議な事に足突っ込んでるのはまちがいなさぞーだよ」

「そうなの？」

「うん。なんか変な杖を持って変な格好してたし、突然消えたし……」

美由希はあの日、巧の後をつけていたのだ、その後、突然巧を美由希は見失ってしまった。それは巧がウルフォルフェノク疾走態になってかなりの速度で曲がり角から走りだしたせいなのだが、美由希は幸か不幸か、それを見ていなかった。

そのため、諦めて旅館に帰ろうとしたところ妙な格好をしたなのはを見つけたから、そっちを追いかけたのだ。

だが、それも広域結界の中になのはが入ったせいで見失ってしまった。遠くからなのはが誰かと話しているのは分かったけど、なのはの目の前に大きな狼がいたために近寄るとばれてしまう可能性を感じて諦めたのだ。それで遠くから見ていると、いきなりなのはが消えて驚いたのである。

「でねー。巧君が突然現れたんだ」

なのはが消えたと思い、呆然としていたら、巧がいきなり現れた。二重の意味で驚いていると、またなのはが現れた。

もう、何が何だか……という表情で美由希は桃子に説明する。

「うーん……私たちに何か出来る事は無いかしら？」

「なのはなら大丈夫じゃない？ 必要な時には助けを求めらるだろう」

し。ま、巧君に関してはおとーさんも恭ちゃんも認めてたしね」

「そう…ね」

「だから、おかーさんも待ってようよ。ね？」

「いい加減にしなさいよ！」

机に突っ伏して寝ていたらアリサが怒鳴っていた。何かと思って巧が顔を上げてみると、アリサがなのはの机に手をつけて怒っていた。

どうせただの痴話げんかだと思ってまた伏せようとしたが、アリサがこっちにも突っかってきた。

「あんたも！一緒に住んでるでしょ！？何かおかしいと思わないの。なのはつたらこの間から何話しても上の空で、おかしいと思わないの！？」

「全然。大体何も話さない相手の心を知れと言う方が無理だ。何も言わないこいつの事を理解なんてできねえよ」

「っ！あんたね！」

「んだよ。何も言わない相手の心なんてわかんねえだろうが。なんだ？お前は俺の心が読めるって言うのかよ。それが当たり前的事だったら謝る。俺にはそんな芸当逆立ちしたってできねえよ」

一気にそう言うと巧はまた机に突っ伏した。

「なのはも巧も！」

「まあまあアリサちゃん。何で怒ってるのか大体分かるけど、そんなに怒っちゃ駄目だよ」

怒ったままアリサが教室を出て行ったのをさすが追いかけて、階段で見つける。

「だってむかつくわ。だって悩んでいること見え見えじゃない！」

困っていることも見え見えじゃない！　なのに……何度聞いても私たちにはなにも教えてくれない。悩んでも迷ってもいないって嘘じゃない！」

「それは……」

「巧も！　あいつは誰とも関わろうとしないし相手の心も考えようとしてない……。信じられない！！」

すずかは暫くうつむき、アリサに言う。

自分とほとんど同じ境遇の巧。人間にしては過ぎた力を持っているからこそ分かること。

「巧君は……巧君は優しいんだよ。優しくて、誰も傷つけないから誰とも関わらないんだよ」

階段の上から乗り出してそう言うすずかをアリサは見上げる。

すずかの姉、忍もそうだった。恭也に出会うまでは誰とも関わろうとしなかったし、もっと冷たかった。それが、今のようになるようになったのは感謝している。

「それって、どういう……？」

「ごめん。……今は言えない。巧君がいつか理由を言ってくれと思うから。あと、巧君はなのはちゃんが何で悩んでいるのか知ってるよ」

アリサはかなり驚いた様子ですずかに詰め寄る。

「なら、どうしてあいつは何もしないのよ！」

「多分、信じているんだと思う」

「信じる……？」

すずかは昔の事を思い出しながらアリサに話す。

「覚えてる？ 私たちが初めて出会ったときのこと」

「あの子が、なのはがいたから、私はひとりぼっちじゃなくなったんだ」

「うん、そうだね。私もだよ」

『痛い？ でも、大事なものをとられちゃった人の心はもっともつと痛いんだよ』

なのはとアリサとすずかが出会ったころ、アリサがすずかの髪留めを取って虐めていたのをなのはが止めたのだが、それが彼女らが友達になったきっかけだった。

すずかの物を取って虐めていたアリサを見て、怒ったなのはが彼女にビンタした。

「あの時の巧君、何をしていたのか覚えてる？」

「巧が……？」

アリサが記憶をたどる。巧は……

「近くで……なのはを見守っていた？」

「うん。巧君は……きつとなのはが私たちを止めるって分かっていたんだと思う。だから、掴みあいになるまで何もしなかったんだろ  
うね」

そう、最初遠くから巧は眺めていた。しかし、ビンタされたアリサがなのはに掴みかかり、すずかが「二人とも止めて」と叫んだのだが、それでもやめない二人を見て困っているときに巧がやってきたのだ。

そして、両方の腕をひつつかんで言った。

『三人とも少し頭冷やせ。子供が喧嘩するのは見ていて面白くねえ』

そのときの事を思い出して少し二人は笑った。

「そう、だね」

「ね？ 巧君を信じよう。きっとなんとかしてくれるから」

「……うん！」

「もうタイムアウトかな？そろそろ帰らないと」

「大丈夫だよ。僕が残ってもう少し探してくから」

「ユーノ君、ひとりで平気？」

「平気。だから晩御飯とっておいてね？」

「うん」

なのはは夜、ジュエルシード探しに繰り出していた。走って家に帰っている。

不意に、見たことのあるような頭部を見つけた。

「あれ？ あれって……巧君」

急に立ち止ると、路地裏を見た。幼馴染み兼、居候の巧を見たよ  
うな気がしたからだ。

少し悩んでそっちの方に足を向けようとして、

「なんだろ……っ!？」

同時に遠くで魔法が使われたのを感じた。なのははそこでまた暫く考える。

知り合いのことより、街から危険を遠ざける方が優先順位が高い。だから

「レイジングハート、お願い！」

魔法が発動した方向に行くことにした。

「なあ、お前らがつけているのは分かってるんだ。さっさと出てこい」

「……」

巧は誰もいない路地裏の奥に入ると、声をかけた。すると仮面をつけた青い髪の男が二人現れる。

乾巧という男はかなりカンが鋭い方で、かつて警察に包囲されたときにも近くにいた誰よりも先に異変を察することが出来た。

「まったく、何の用があつて俺に付きまとうんだ」

「それはこちらの台詞だ。何の理由があつて彼女に近づく」

現れた男が敵対心を持っているのを感じて巧はアタッシュケースからファイズギアを取り出した。懐からはファイズフォンも取り出す。

「なのはの事か？」

「とぼけるな。闇の書の主の事だ」

「闇の書……？　なんだそれは」

聞き慣れない単語に巧は聞き返す。しかし、相手は聞く耳を持ってくれないようでそのまま襲いかかってきた。

「お前は私たちの計画に邪魔なんだよ！」

巧に襲いかかる仮面の男。右腕からのストレートを地面を転がって巧は避ける。

「襲われる理由は分らないが、攻撃してきた以上、理由を吐いてもらっぞ」

巧は素早く変身コード555をファイズフォンに入力。

「変身！」

【Complete】

「今度は以前のようにには行かせないぞ」

「それはこっちの台詞だ！！」

ファイズに変身した巧は右手をスナップしてから駆けだした。

「はっ！」

まず最初に体重を載せてパンチ。しかし、それは簡単に避けられてしまう。

「ふんっ！」

仮面の男の一人がカードを手にすると、それは杖になって手に収まる。

それを見たもう片方の仮面の男は驚いたように言う。

「それは未完成のはず……！」

「でも使っしかない」

現れた杖を振ると魔力の弾が出現して巧を追いつめる。

入り組んだ路地裏、派手に動けないために巧は苦戦を強いられていた。

飛んできた弾を避けきれず、巧は飛ばされる。

「ちっ……はあっ！」

「ぐっ……」

だが、すぐに立ち上がって倒れている隙に接近してきた片方にパンチを入れることができた。攻撃された方は生身、体を『く』の字に折って飛ぶ。

それでも中々にタフなようで、すぐに立ち上がってきた。流石の巧も生身相手に全力は出さないようだ。

「キリがねえな……」

挟まれながらも巧はどうするべきかを考える。  
ふと気付いた。

（っ！ 結界に入った！？）

巧には誰がそれを展開したのか分からなかったが、それによって路地裏で戦う必要がなくなる。

上を向いて一瞬考えて……

（よし、行ける）

そう心の中で呟いた巧は高く跳躍し、巨大なテレビがある建物の屋上まで飛んだ。その距離約40メートル。

「うおっ、あつぶねえ」

ギリギリでビルのはじを掴み、よじ登った。

「こんなときバジンが……よう、散歩か？」

巧が昇り終わると目の前には、オートバジンビークルモードがあった。それはヘッドライトを点滅させて答えた。

ファイズを守るためのAIが搭載されているバジンの事だ。戦闘を察知して飛んできたのだと巧は考える。

「ふーん。っ！」

「ちっ、避けられたか」

巧が気を抜いていた一瞬にまた魔力弾が飛んできた。間一髪で避ける。

「あのなあ。俺はお前らのそのうざったい喋り方が気に食わねえん

だよ。もう少し早く喋れ！」

仮面の男の喋り方に若干イライラしているようだ。

「まあいい。ここがお前の墓場となる」

「はっ、言ってる！」

巧はその場で両腕を構えた。

「これはっ！」

「フェイト！ 危ないよ！！」

『ウウ……ウガアアアアッ！』

フェイトはその日、ジュエルシードを探していた。しかし、収穫が無く帰ろうとした途端に巨大な謎の生物が出現した。

その姿は巨大な灰色の蛇。……いや、蛇のような生物だ。

「原生生物を……取り込んでいる？」

「違う。こんな生物いるわけが無い！　だって、こんなおかしな装飾の付いた蛇だなんて！　図鑑でも見た事ないよ！」

巨大な蛇はその灰色の巨体から灰を撒き散らしてフェイトとアルフを見据えた。

『……クイ』

「え？」

『カネ……モクテキデ……コロシタアイツガ……！』

蛇は尻尾を振るい、フェイトとアルフをなぎ飛ばした。

「きゃっ！」

「くっ！？」

（言葉……！？　どうして！？）

フェイトは相手が言葉を話したことを疑問に思いながらも、ジュエルシールドを手に入れるために戦闘態勢に入った。

「いこう、相手が何でもかまわない。私は手に入れるだけ」

【Get set】

一方、少し離れた地面ではユーノが滝のような汗を流していた。

（これは相当マズイ！　広域結界を使ってるけど……）

ユーノは魔法を発動させながら考えていた。すると、なのはが自分の方に走ってくる。

「ゴメンユーノ君！ 少し遅れちゃった！」

「なのは！ ……見ての通りだ」

「うん。あの子も苦戦してる」

空中にはバルディッシュを構えたフェイトがいた。だが、自身の数倍の大きさもある巨大な蛇相手に一人で叶うはずがない。なのはも一緒に勝てるかどうかだ。  
でも、となのはは続ける。

「私は、あの子とお話したいから。例え勝てそうになくても、私もやる！」

なのははレイジングハートを構えて言った。

「だから、お願い！」

【All right・My master】

なのはも飛び上がって怪物と対峙した。

（大きくて、硬い。攻撃が通じない）

フェイトは空中を飛行しながら考えていた。ジュエルシードを取り込んだ生物は巨大で、今まで戦ってきたどんな敵よりも強く感じた。

アルフも同じようかなり焦っている様子。

少し離れたところには前に敵対した相手、なのはがいるのが分かっていたがそれどころじゃない。

「くそっ！ バインドも全て通じないよ」

（どうすれば……。ここで失敗したら母さんに嫌われる。それだけは嫌なんだ）

考えるより行動、そう思ったのかフェイトは一気に片を付けようとする。

「バルディツシュ！」

【Photon lancer Full auto fire】  
「ファイア！」

フェイトのフォトンランサーが怪物に迫るが、少量の灰が出ただけで全く動きを止めるそぶりを見せない。それどころか、

「フェイト！！」

『キシヤアアアアッ！』

怪物はその巨大な尻尾でフェイトを吹き飛ばした。

「ぐっ…！？」

そのままフェイトはテレビ塔にぶつかり、体を激しく殴打。

「フェイトちゃん！！」

（白い子が…呼んでる？）

全身を強く打ち付けたフェイトはなのはの声を最後に意識を失っ

た。それと同時に体は落下を始める。

「あ……フェイトオオオオオー……ッ!!」

アルフは急いでフェイトのもとに向かおうとするが怪物がそうさせない。結局アルフもフェイトと同じように飛ばされるはめになってしまった。

アルフは遠くまで飛んでいき、別のビルに衝突する。

テレビ塔の上で戦っていた巧はその一部始終を見ていた。

「よそ見か？ 余裕だな」

「ぐっ……!!」

バジンも加勢して戦っているが空中戦ができる仮面の男たちが断然有利。巧は攻撃手段がフォンブラスターしかない。

「バジン！ 行けっ」

バジンがフェイトの救出のために巧のもとを離れるとほぼ同時に巧の体がバインドで縛られる。

「お前ら、町であんな奴が暴れていても何とも思わねえのかよ」

「……私たちの使命は闇の書の永久封印」

「闇の書の主に直接被害が無い限り別に何があっても町などどうでもいい」

「……」

巧は小さな声で呟く。

「命請いか？ 小さくて聞こえない」

「……」

「さあ、もっと大きな声で言え。聞こえない」

「意味わかんねえ！ って言ってるだろうがあああつ！」

仮面の男の一人が巧の真正面に立った瞬間にバインドブレイク。そのまま蹴り飛ばした。

蹴られた男は数回バウンドしてようやくとまる。いわゆるヤクザキックだったが相当の威力のようだ。

「さっきから意味わかんねえ事ばっか言いやがって。少しは説明をしろー！」

「何？」

「大体お前ら……っ！」

そこまで言つて、灰色の怪物の尻尾が視界の端に映る。

見境無く破壊行為をしているその怪物は、巧達のいるテレビ塔を標的にしたようだ。

【Start Up】

巧はとつさにファイズアクセルを起動する。そして、

『キシヤアアアアアアッー！！』

その間になのは達を襲っていた怪物が動き始めた。巨大な体躯で結界の中とは言え、数々の建物をなぎ倒しながら襲ってきたのだ。そんな威力の攻撃が自分たちのいる場所に来る。巧も馬鹿では無い。怪物の攻撃に何も備えていない仮面の男二人は放っておけば巻き込まれてしまう。

そう考えて加速した。

「あのまま無防備な状態で喰らってたら瓦礫に埋もれて死んでたな……二人とも、大丈夫か？」

流石に生命の危機が迫っているとあれば戦っていた相手でも救わざるをえない。

ファイズのフォトンストリームは赤から銀色に変わり、胸の装甲が開いて内部機構が見えていた。

——ファイズ、アクセルフォーム。ファイズの最速の姿。

「生きていて貰わないと困るからな」  
(情報源としてな)

心の中で言葉の続きを呟いた巧は加速された時間の中で怪物に向き合う。

今、彼が立っているのは先ほどのテレビ塔から数十メートル離れた場所。両腕には二人の男が抱えられていた。

そこにはオートバジンと助けられたフェイトもいた。

(ファイズアクセル起動から体感で5秒って所か。高速移動出来るのは残り9秒程度……?)

「一気にたたみこむ！」

持っていたミッションメモリーをポインターに付ける。この間3秒。アイドリングでも35秒しか維持できないフォームだ。どんな動きにでも無駄は許されない。

一旦加速を切って指示を出す。

「バジン。よく見張っておけ。フェイトの様子も見ておけよ」

巧は再び加速した。

## 第七話 決着と【改訂中】

「厳しい。でもやるしかないか」

巧は一気になのはの目の前まで移動し、一端高速移動を止める。

「たつくん！」

「時間が無いから短く言う。あそこ、青く光ってる所があるだろう」

灰色の怪物の腹の部分に本当にわずかだが青く光っているところがある。それは言うまでもなくジュエルシードだ。

「俺があそこまでえぐるから封印するか破壊しろ」

そう言って再び加速する。残り七秒弱。

「あ、たつく……」

なのはが何かを言いかけるが、怪物は見えない何かによって攻撃されている。それは言うまでもなく高速移動しているファイズアクセルフォームだ。なのははレイジングハートを構えなおした。

それと同時に青白い光で怪物はバインドされる。

「少年、今は手伝おう」

「君と私たちとは認識が少し違うようだ」

仮面の男二人が手にカードを持って立ちあがっていた。

残り五秒。外の世界でだが、今巧のいる加速した世界では五十秒近くある。

「……蹴りはエネルギーのほとんどを持っていくからな」

蹴り技、クリムゾンスマッシュはエネルギーを大量に喰う。その

ために出来るだけ多くの手数を稼ぐ。巧が腕を振り、蹴りをするたびに怪物の体から灰が飛び散る。だが巧の視点では徐々に徐々にしか散って行かない。

「手数を重ねるだけ視界が悪くなるな」

既に巧の視界は濃い霧の時に近くなっている。

「もうそろそろか」

巧は次々とポイントしていく。赤い円錐が大量に一点にポイントされた。

「はああああああっ!!」

まず一個。怪物に当たり暫く体を削った後、怪物の体を蹴って後ろに飛ぶ。そして地面に着地し再び助走を付けて一つの円錐に飛び込む。

【three】

「ああああああああっ!」

巧は円錐に飛び込み、蹴るという作業を繰り返す。一回で約10センチほどえくれるだろうか。

【two】

残りの円錐は少ない。ギリギリジュエルシードを露出させられるかどうかくらいだ。

【one】

そして最後の円錐に飛び込んだ。

「てやあああああああ!!」

そしてジュエルシードが露出。巧は地面へと着地する。

【Time Out・Reformation】

無機質な音声がすると同時にファイズの展開されていた胸の装甲が閉じた。

「行くよ、レイジングハート！」

【All right my master】

なのははレイジングハートを長距離砲撃モードにして構える。

「封印すべきは忌まわしき器。ジュエルシード！ ジュエルシードシリアル？？……封印！！」

【Sealing.】

レイジングハートから光が放たれ、ジュエルシードに当たった。

それと同時に怪物は崩れていき一体のオルフェノクへと姿を変える。そのオルフェノクはジュエルシードを封印したなのはの方を向くと『……ありがとう』

と言った。そして、そのオルフェノクの体から青白い炎が上がり、灰となって散っていった。

「……今のは……？」

ユーノは青白い炎を上げて崩れていった、かつてオルフェノクであつた灰を見ながら呟く。

「とりあえず、封印したし、フェイトちゃんと……っ！？」

なのはが封印したジュエルシードの所に歩き、手に取ろうとした瞬間巧がそれを奪い取った。巧は親指と人差し指でそれをつまみながらなのはの方を見る、既に変身を解いている。

「なんで」

「すまないな。でもこういうのが必要だろう。なあ、フェイト」  
「……」

既にフェイトは目覚めてバルディッシュを構え、今にも巧に襲いかかるうとしている。

「勝負だ。勝った方がこのジュエルシードを手に入れることが出来る」

巧がこう言ったのには理由がある。一つは、彼女らを戦わせている間に仮面の男たちと話す事だ。二つ目はすっとんでいったアルフの回収。そして三つ目は

「話して来いよ、なのは。言いてえことがあるんだろ？」

「——うん！」

話をつけた巧は仮面の男達の所へと歩いて行く。

そして巧はバジンに拘束されている仮面の男を見つめて問いただす。あたりは未だ結界が張られており、瓦礫の山が出来ている。

しばしばなのはとフェイトの戦いの音が聞こえるほかは、全くと言うほど無音だ。

「で、どういう事だ。いきなり俺を襲ったりして、しかもいきなり手伝ったりしてよ」

「……教えて、いいの？」

巧の言葉を聞いた片方がもう片方に向かって呟いた。

「やっぱりそうしたほうがいいかな」

もう片方も巧を見つめて、言う。

「説明をするから、私たちと共に父様の所に来てもらえないだろうか」

と。

「はあ？ 俺が行くと思ってるのか？」

巧がそう言うのも当然だ。なぜならば得体も知れない相手の居城に行くのと同じだから、何か罠があると思うのは誰だって思う。

「そこをなんとか」

「じゃあ、そっちの父様だか誰だかしらねえけど、そいつをこっちに連れてこい。というか、それが普通だろ」

巧がそう言い放つと、二人は暫く悩むようなそぶりを見せた。ようやくして二人は了承の意を巧に伝えた。

巧達が会話をしている間、なのはとフェイトは対峙していた。

「この前は自己紹介できなかったけど、私なのは！ 高町なのは。私立聖祥大付属小学校、三年生」

【Scythe form】

フェイトはいつでもなのはに攻撃できるようにしている。

（……どうしてそんなに寂しい目をしているのかな？）

なのはがそう考えているとフェイトはマントを翻して攻撃の体勢をとった。

「あっ!？」

「せえっ!」

【Flier fin】

二人の少女の戦いが始まった。二人とも残像が残るような速度で互いに衝突しあう。もし、巧がついて行こうとしたらアクセルフォームを使うしかないだろう。

まあ、使った場合は逆に置いて行くことになるが。  
幾筋もの光が交錯し、何度も衝突する。

「大丈夫？」

何度かの衝突のときにフェイトは彼女のデバイス、バルディッシュに語りかける。

【I'm still fine. Sir】（私はまだ行けます）  
「バルディッシュ…」

【Sir, as I believe, please believe me】（私があなたを信じているように、あなたも私を信じて下さい）

「——うん。だから、早く帰るよ」

【Yes, sir】

一瞬、なのはが背後を取られたように見えたが、

【Flash Move】

逆に背後をとって砲撃を発射する態勢になる。

【Divine Shooter】

デイバインシューターを発射するが、それをフェイトは無抵抗で受けるような少女では無い。瞬時に神がかった反応で防御する。

【D e f e n s e r】

巧の放置したジュエルシールドは、先ほどオルフェノクが青い炎を上げて灰になった場所の丁度真上に浮いている。フェイトはそれをさっさと手に入れて帰りがっている。だから素人のなのは相手に容赦ない攻撃を加えている……が、中々攻撃は通らない。

なのはの攻撃魔法とフェイトの防御魔法がぶつかり、少し距離が開いた。

「フェイトちゃん！」

「っ！」

誰も邪魔しない結界内に声が響く。

「話合うだけじゃ、言葉だけじゃなにも変わらないって言うてたけど、  
だけど話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ！  
それでぶつかり合ったり競い合うことになるのはそれで仕方ないのかもしれないけど、  
だけど、なにも知らないでぶつかり合うのは、私、いやだ！」

なのはは大きな声で、フェイトに伝わるように声を張り上げる。

「私がジュエルシールドを集めるのはそれがユーノ君の探し物だから、  
ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君がそれを元通りに集めないといけないから。わたしはそのお手伝いで——」

だけど、となのはは続ける。フェイトは無表情のままなのはを見つめ続ける。

「だけど、お手伝いをする事になったのは偶然だったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めてる。自分の暮らしている町や自分の周りの人達に危険が降りかかったらいやだから。これが……わたしの理由……！」

なのはは自分の思いを伝えた。

「……私は」

「フェイト！ 答えなくていい……！」

「アルフ！ 無事だったの？」

狼の状態のアルフは右足を引きずりながらフェイトの下に歩いてきた。先ほど飛ばされた影響か、体の所々から血が流れている。

「優しくしてくれる人の中で、ぬくぬくと甘ったれて暮らしているようなガキンチョなんかににも教えなくてもいい！ 私達の最優先事項は、ジュエルシードの捕獲だよ！」

アルフがフェイトにそう言うと同時にフェイトはバルディッシュを構える。

「なのは……！」

「大丈夫……！」

ジュエルシードが二人の少女の思い……魔力に反応して輝き始める。それを見たフェイトは全力でジュエルシードへと向かった。なのはもそれを追う。

二人は風圧にも負けずに全力で下降する。それを巧と仮面の男二人は見ていた。

「いつ来るんだ？」

「……こちらの用意が出来たら連絡する」

「その通信端末に私たちの連絡先を入れておいてくれ」

そう言われて巧はファイズフォンに二人に言われた連絡先を入力する。戦闘中でもメルアド、電話番号交換。これがスマートブレイクオリテイ。

「ではな」

「……また会おう」

二人は転移して消え去った。

「で、どっちが勝った？」

ガシッ！ と音を立てて二人のデバイスが衝突した。それを見ていたユーノとアルフは暫く時間が止まったように感じた。

ピシピシピシ……と音を立て、デバイスにヒビが走る。そして、ジュエルシールドが暴走を始めた。

当然、ジュエルシールドを挟むようにしてデバイスを衝突させているのはとフェイトにもその衝撃は伝わる。

「きゃああああっ！！」

「くっ……うううっ！！」

「……くん」

「久遠？」

八束神社、そこで巫女をしている少女のペット、というより家族の狐の久遠が不安そうな顔で空を見上げた。

「なにか、あつてる」

久遠は体から電気をバチバチと鳴らしながら呟く。

「——君たちは中々勘がいいね。まあ、前回も」

不意に一人と一匹は声のした方向を見る。そこには一人の青年がいた。

「っ！！」

「いや、違う違う！ 何もしないから！」

久遠が青年を威嚇するとその青年は慌てたように目の前で手を振った。その顔は暗くてよく見えないが優しい顔立ちだった。

「俺が言いたいののは一つだけ……君たちは、幸せか？」

その言葉の直後に強い風が吹き、木々が揺れた。

「……！？」

「うわっ……あれっ！？」

風が吹き終えると青年は消え去ってしまっていた。

「今の……なんだっただろ」

## 第八話 共感？【改訂中】

「大丈夫？もどつて、バルディッシュ」

【Yes, sir】

フェイトはバルディッシュを待機状態に戻し、手にはめた。そして、巨大な魔力を放出したジュエルシードをの方を見る。

既に仮面の男二人は、その父親呼びに一端転移して消えた。二人の少女を見る。見た所、経験の差か、フェイトが素早くジュエルシードの元へと向かっているが、なのははレイジングハートを待機状態にしてもいない。

「フェイト！」

フェイトは跳ぶ。低空飛行で。だが、先ほどビルに叩きつけられた影響か、微妙にふらついている。アルフも立っているのがやつの状態だ。

そして、フェイトが光るジュエルシードを掴んだ。それと同時に、掴んだ手から光が漏れだす。

「止まれ、止まれ……止まれ……止まれ……！」

だが、通常のフェイトでも難しい、デバイスを使用しない封印。満身創痍の彼女では無理だ。グローブは所々裂け、中から血が流れ出す。

「ちっ！」

【Complete】

巧は素早く変身、フェイトの元へと駆け寄った。

「今のお前では無理だ！手をどかせ！」

「駄目っ！ 持って帰らないと……」

「早く！」

巧は強引に手を掴み、ジュエルシールドから手を放させた。そして、

「くっ……！！」

両手で掴む。

「直接接触ってムリなら、俺の手の上からなら封印出来る筈だ！」

「そしたら巧が」

「早くしろ！ 本当に壊さないといけなくなる前に！」

本当は巧は壊したかった。だが、どうしても持って帰りたいと言うフェイトの姿を見て、一見無茶な行動に出たのだ。

「おおおおおおおお！！」

今にも弾けそうな力を強引に巧は抑え込む。フェイトはその手上から重ねた。

「止まれ……止まれ……止まれ……！！」

巧とフェイトの足元にフェイトの黄色い魔法陣が展開される。そして、

【Error】

ファイズギアへの負荷が限界値を超え、巧の変身が解除され元の姿に戻る。だが、ジュエルシールドの封印はできた。

「よか……った」

「フェイト……！」

封印が終わると同時にフェイトは気を失い、倒れる。それを巧はしっかりと支えた。

「……アルフ、家まで案内しろ。乗せていく。頼んだぞ、バジン」  
オートバジンはバトルモードで巧に近付き、フェイトを抱き上げ

た。アルフはそれを見て掴みかかろうとするが、そんな彼女もバジンはつまみあげる。

「え、え、ちよっと！ アンタ！」

「重いだろぅが大人二人より軽い。頼む」

巧はバジンに掴まり、バジンは海鳴の夜空を飛んだ。

「たつくん！！」

「ワリイ！ 明日には帰る！！」

巧はなのはに叫んだ。

その日の九時十五分。ユーノはなのはの自室でひびの入ったレイジングハートをハンカチの上に乗せて見つめていた。

「レイジングハートはかなりの出力に耐えうるデバイスなのに。：

…それを一撃で、ここまで破損させるなんて」

（あの子となのはの魔力の衝突？ いや、あれじゃ説明できない。

あれはやっぱり、ジュエルシードの……）

そこまで彼が思うのと同時に部屋のドアが開いた。入ってきたのはもちろんなのはだ。

「ユーノ君、レイジングハート、大丈夫？」

「うん、かなり破損は大きいけど、きつと大丈夫。今、自動修復機能をフル稼働させているから明日には回復すると思う」

「……うん」

「なのはは大丈夫？」

ユーノはレイジングハートから目を開さないで聞く。

「うん、レイジングハートが守ってくれたから。ごめんね、レイジングハート」

そうなのはが言うと同時に、またドアが開いた。

「なのは、巧は？」

「たつくんは……用事があるから少し出かけるって」

入ってきたのは恭也だった。家中を探していたようだ。

「そうか。……俺がフォローするのかよ」

「え、お兄ちゃん何か言った？」

「い、いや。何も無いよ。じゃ。ユーノで遊ぶのも程々にしとけよ」  
恭也は笑いながら部屋を出て言った。

同時刻、空を飛び、フェイトのマンションの屋上に三人の人影が見えた。

「さて、お前らの家はどこだ？」

「い、いや、なんでアンタまでついてくるのさ？」

アルフがそう言うと、巧は目を細める。

「……虐待、か？」

アルフはその言葉を聞くと目を見開いた。

「な、なんで!？」

「やっぱりか。いや、さっきマントの中に隠れている腕の所々に青

あざの跡……そして、手首付近には縛られた後が見えた」

そう、巧はフェイトの体中に付けられた傷が見えていたのだ。それを見た彼は虐待と判断。母親に会おうと考えたのだ。

「じゃあ、行くか」

巧はフェイトを抱き上げて言う。アルフはその姿を見て、疑問に思った。そして、聞いた。

「アンタ、手慣れてない？」

巧はそれに対し、どこか遠くを見ながら小さく言った。

「今までどれだけの職に就いてきたと思ってるんだ」

と。アルフはその姿から何だか哀愁を感じ、何も言う事が出来なかった。

乾巧、彼はかつて全国を旅してまわるフリーターだった。今まで就いた職種は数知れず。職についてもすぐにクビになり、これまでに五百以上の仕事を経験した。そんな彼に、介助なんて朝飯前なのだ。「あと、提案があるんだが……」

「……っ。ここは」

「起きたか」

「っー!!」

マンションのフェイトの家。彼女は眠っていたが、巧は傍ですっ

と看病していたのだろう。外はもう白み始めている。

「どうし……」

「フェイト〜！」

「アルフ。大丈夫？」

「うん！ こいつが包帯とか巻いてくれたんだ」

フェイトが自分の手を見ると包帯が巻かれていた。ほかにも腕、足などにも巻かれていた。アルフは狼の状態でいる。それは昨晚アルフがそっちの方が回復が早いといていたからそうなのだろう。

「……ありがとう」

「それと、ほら」

巧はフェイトの手にジュエルシードを乗せる。

「なのはに勝つただろ？ 約束通りだ」

そして、フェイトが何かを言いかけたとともに、ファイズフォンが鳴った。

「……ああ、そうか」

巧はそこまで言つと、ちらつとフェイトの方を見る。

「わかった。今、俺は取り込み中だから後でそっちにかける。じゃあな！」

巧はポケットの中にファイズフォンを仕舞うと、フェイトの手を見る。

「……出血は止まったな」

「今のは？」

「ああ。今のは別に問題は無い」

それより、と巧は続ける。

「昨日確認したが、ジャンクフードしかねえじゃねえか。体によく

ねえぞ。ほら」

差し出したのは、お粥。勿論、冷ましてある。それには理由があるが、まあ大方分かるだろう。巧がここまでフェイトに献身的に尽くしている理由でもあるのだが。

「改めて、乾巧だ。よろしく！」

さわやかな笑顔でフェイトに握手を求めた。そう、その理由はい先ほど前に遡る……と言っても、大した話ではない。

「まあ、病人の食べ物と言ったら、お粥だな」

台所に立ち、巧はアルフに米の在処を尋ねる。すると

「無い」

「……は？」

「米なんて、ない」

なんと、フェイトはインスタント食品で済ませていたのである。それを聞いて、巧は言った。

「本当にフェイトのことを思うんなら、ちゃんとした食事くらい食わせろ」

そういうと、彼は外に飛び出して行ったという。それを、アルフは呆然と見送ったとか。

で、帰ってきた巧の手には

「ま、無いよりかはマシだろ」

米、梅干しがあった。それは、事情を巧に聞かされた忍に貰った

物で、そのうち金にして返すという約束だ。子供相手に何ふっかけてんのかは甚だぎもんだが。

「そうだ。フェイトは熱いのは大丈夫か？」

「……普通、そんなこと聞く人っていないよ」

「いいから教える」

これが、猫舌である巧の（数少ない表に出る）気遣いである。そのほかにもいろいろと気を回せるが、露骨に出るために周囲からバレバレだ。

「熱いのは苦手だね」

そうアルフが言った瞬間、巧の目が光った。（ようにアルフは思えた）

「よし、俺はフェイトを手伝おう！」

さわやかな笑みと共に、彼は寝ているフェイトを見ると嬉々として台所に向かっていった。それを、アルフは何が何だかわからないといったような表情で見送った。

「ということがあってね」

しばらくして、巧は電話が鳴ったのと共に外に出て行った。その後、アルフはフェイトに事情を説明。

「少し、怖そうだけど結構優しいね」

「ただ、得体は知れないけど」

アルフの動物的な感は、精神的につながっているフェイトにも伝

わってきている。でも、

「あいつ、本当にフェイトのこと心配していた。信用はできる」  
そういうことには人間以上に鋭い。動物は、自分に対する敵意などに鋭いものだ。

「アルフがそう言うなら」

「……うん」

「まだ、体調が戻らないからお昼過ぎに報告に行こう。アルフ」  
その後、フェイトは再び眠り、アルフは一人で食器を洗い始める。

（あの男なら、あの女からフェイトを守ってくれる）

アルフはフェイトを見ながら思った。

そして、その話題となっている巧はフェイトのマンションの屋上にいた。

「父様だ」

仮面の男が一人の老けた男を紹介する。

「ありがとう。ロツテ、アリア。元の姿に戻ってくれ」

「っ！ でも！」

「いい。信用されなければならぬからな。あの計画のためにも」

「……はい」

老けた男がそう言うと、仮面の男二人は光に包まれた。

「……は？」

現れた姿に、巧は驚く。なぜなら

「女！？」

そう、二人とも女であったからである。しかも、猫耳、尻尾付き。

「おい、おまえにそういう趣味があったのか？ 娘に男装、ましてやコスプレ」

「そこから説明させてくれ。頼む。その質量兵器で私を狙わないでくれ」

オートバジンバトルモードが男に狙いを定めていた。それを見た巧は一瞬の硬直の後、自らの真後ろにいたバジンを蹴り飛ばす。

「俺も軌道上にいるだろ！」

と言いながら。主人を守ることに對して盲目だなど、思ってしまった元・仮面の男二人であった。

「で、お前の名前は？」

「ギル・グレアム時空管理局提督だ。こっちは娘のリーゼアリア、リーゼロッテ。私の補佐をしてくれている。魔法に秀でているのがアリア。格闘に秀でているのがロッテだ」

「時空管理局だと？ …… なんだ、それ」

巧は聞いたことのない単語に顔をしかめる。

「次元世界をまとめて管理し、統治する」

「あと、各世界の文化管理と災害救助が主な任務。ほかにもあるけど、大筋はこんな感じかな」

アリア、ロッテが巧に教えた。

その説明を聞いてあの、表向きは優良企業で、裏では巧のように死んだ後蘇生したオルフェノク、または、オルフェノクによって使徒再生されてなったオルフェノクを管理していた企業を思い出す。

人間に害を及ぼさないオルフェノク……それは優先的に抹殺されていて、強い力を持てば幹部になれる。そういう所だ。

「で、そういうお偉いさんが、時空管理局なんてしらねえ世界になんて来たんだよ」

「ここは第97管理外世界。私の故郷であり、本来は全く私たちが干渉しなくていいはずの場所だった」

「管理外だろ。干渉しなければいいじゃん」

だが、とグレアムは続ける。

「そうは行かなくなっちゃったのだよ」

「それは、あのジュエルシードに関係していることなのか？」

「全く違う。……いや、少しはあるかもしれないが」

周囲の魔力の変化で不意に起動するとかなんやらかグレアムは  
つぶやくが、巧には全く意味がわからない。

「だが、君にはもしかすると深く関係することかもしれない」

そう言われて、自分と深い関係にある人たちを思い浮かべる。

高町家、月村家、バニングス家……どれも怪しい所ばかりだ。

（高町家の剣術？ 月村の血族？ バニングスの金？）

「この子だ」

グレアムの目の前の画面に映し出された顔を見たとき、巧は自分の  
想像が外れたことを知り、また驚愕した。

「はやて!？」

「どうだ。フェイト。体調は？」

「大丈夫だけど、巧こそ。元気ないよ」

昼下がり、巧はフェイトの家に戻ってきていた。

「いや、気にするな。なんでもねえ」

巧はそう言うのとフェイトの座っているソファに、人一つ分スペースを空けて座った。

「（アルフ）」

「（どうしたんだい。フェイト）」

ソファに座ったと同時に何かを考え始めた巧を横目でチラチラ見ながらフェイトはアルフに念話で話しかける。

「（巧、様子がおかしいよ）」

「（確かに）」

「（どうすればいいかな?）」

フェイトとアルフは目を合わせて考える。

「（……今からあの女に土産を買いに行こうとしてたよね）」

「（うん）」

「（一緒に行けば、巧も吹っ切れるんじゃない?）」

（フェイトも、だけど）

アルフは心の中で続きを言いながらフェイトを見つめた。

## 第九話 紅と金の二人【改訂中】

フェイトは巧の方を向いた。

「母さんにお土産買うから手伝ってくれない？」

「はあ、土産……」

「うん。母さんに持っていこうと思うんだけど、どういつのがいいのかわからなくて」

巧は自分の方向を見ているフェイトに聞き返す。

「今日、母さんに報告をしにいくから、そのときに渡そうと」

「……そうか」

巧は何かを考えているようだった。そして、フェイトを真正面に見据える。

「なあ、お前の名前は『アリシア・テストロッサ』じゃなくて、『フェイト・テストロッサ』だよな

？」

「え……何をいきなり。私はフェイトだよ」

キョトンとしてフェイトは答える。どうしてかを彼女が尋ねようとすると同時に、話は終わりだと

言うように巧は

「いい店を知ってる。早く行こうぜ」  
と言った。

「本当？」

「ああ」

巧は自信満々に答える。

「じゃ、行こうか」

「うわ……人が、人が多い」

「おい、フェイト。はぐれるな」

「あ、ちょ、巧……!?」

見事に都会の雑踏に紛れ、子供の体ではあらがえない人の流れに押される。巧の言っていたいい店

というのは、何を隠そう、喫茶翠屋だ。本当にケーキやシュークリームが美味しいというのもあるが

、あともう一つ理由がある。

「ちつ、これを持つてると邪魔になるな」

彼の左手。そこにはアタッシュケースが握られている。中身は勿論、ファイズギアだ。

「うっ……人が多い」

「はぁ……おい、こういう人混みって初めてか？」

「うん」

異世界出身って言うっても田舎なのか？ と巧は思いながら聞いた。

「……バスがよかったか？」

そう思うが、今日は休日。人混みは自分にも、彼女にはかなりのストレスだと思ってとりやめたの

を思い出す。

「あ、ちよつと。巧〜!？」

少し考え事をして、目を離れた隙にフェイトは人混みに流されていった。

「あ、おい! ……しまった」

「(助けて……)」

念話まで使われて救助要請。結局、再び合流するのに十分ほどかかった。

「全く。手のかかるやつだ」

「えっ」

「ほら、行くぞ」

巧はフェイトのその小さな手を握り、引っ張っていく。母親に虐待されているであろうフェイトを

思うと、自分の方が幸せだったのではないかとも思えてきた。母子家庭ながらも自分には帰りを待つ

母親がいた。だが、フェイトは違う。あれが事実であるのなら。同じ母親がいるという状況でも、愛

情を知らないフェイトを笑わせてやりたいと、巧は思った。

ちなみに、そう考えているときの巧はいつもの不機嫌そうな顔ではなく、少し微笑んでいた。それ

を見たフェイトは何が楽しいんだろうと思っていたというのを巧は知らない。

「し、死ぬかと思った」

「それはこっちの台詞だ。ほら」

「あ、ありがとう」

しばらくして、ようやく遠見市と海鳴市の境目くらいに来了。その公園で一時小休憩。巧はフェ

イトに缶ジュースを渡した。

（こりゃ、帰りは魔法で飛んだ方がよさそうだな）

巧はそう思いながら、バジンを呼び出すコードをアタッシュケースに付属していた説明書みたいな

もので確認した。

「あと10分くらいだな」

「わかった」

しばらく歩き、喫茶翠屋に到着。幸い、というか予想通りなのは美由希の剣術の練習を見学して

いるために出会うことは無かった。

「ここだ。俺はしばらく寄るところがあるから、選んどけ」

「うん」

巧はそのまま高町家に帰宅。アタッシュケースを自室に起き、鍵をかけ、近くにあったあともう一

つのアタッシュケースを持つ。

「……今の体でサイガ、オーガ。ブラスターに耐えられるかわからな

いからな」

鍵を差し込み、南京錠を解除。周りに巻いていた鎖を取って中身を確認する。

（異常なし）

中に入っていた物を取り出し、チェックを済ませて中にしまう。今度は鍵をかけずに、ファイズギ

アの入っているアタッシユケースに鎖を巻き、鍵をかけた。

そしてあともう一つ。トランクボックス型トランスジェネレーター、ファイズブラスターを取り出す。

す。

（本来はファイズが使って、最大の力を得る。でも、相手は魔導師だ。アクセルの時間制限が切れる

デメリットよりは、攻撃の多様性がないデメリットの方がまだマシンだな）

巧はそれを持って、車庫に置いておいた。実は、昨晚のアルフとの取引で巧はフェイトの母親の所

に連れて行って貰うことになっている。そのときにバジンに持ってこさせようと思ったのだ。

「ただいま……？」

巧はアタッシユケースを片手に翠屋に入る。

「あ、巧」

「おおー、どこ行ってたんだい？」

すると、恭也と土郎がやってきた。

「いや、こいつの家に泊まってた」

『は…？』

後からやってきた桃子と士郎は硬直する。恭也は夜中に電話で話を聞いていたため、驚かなかった

が。むしろ、どうフォローするかを考えている。

「フェイト、決まったか？」

「……まだ。お勧めある？」

「えーと、桃子さん。シュークリームを八個お願いします」

巧はレジにたつてる桃子にそう言うが、

「最近の子はここまで進んでるの？」

「性の乱れ……か？ いや、早すぎるぞ……」

「……おい」

士郎と若者の性の乱れについて熱心に話し込んでおり、全く聞かえていない様子だった。

「恭也、頼んだ」

「え、この子と一晩……」

「お前と忍のことは言っていない」

「何！？ 何故バレた……って、へ？」

「いいから！！」

一応、恭也が止めに入り、話は終わったが、

「何故こうなった」

巧は生温かい目をした桃子、士郎を見据え、そう呟いた。

「えっと、ははっ。ごめん、俺じゃ誤解が解けなかった。あはは…

…」

このくそ馬鹿恭也が！ と心の中で巧は叫んだという。

「ははっ。一応、俺は巧君の保護者だから君は俺をパパってグホッ！？」

士郎がそうほざいたと同時に桃子の肘打ちが体の中心の線に入る。人間の体の中心には急所が多い

。そのため……士郎は悶絶した。

「お、俺が死んでも第三、第四の高町士郎が……御神流を継ぐ……ガクッ」

「自分で効果音つけんなよ……」

「と、父さ………ん！！父さん……俺が、俺が御神流を継ぐよ」

おふざけが好きなのも…遺伝らしい。そもそも、すでに士郎は引退しているのだが。さらに言つと

、恭也はすでに継いでいる。

「第二の高町士郎はどこなんだよ」

「俺の……目の前にいるじゃないか」

士郎は、桃子を見上げながら言った。彼は墓穴を掘った。

「ていつ」

「ぎゃああああああつ！？」

……高町士郎に、合掌。

後に巧は語ったという。

「まだ真理の方がマシに思えた」

と。その後、士郎に心の中で手を合わせ、さらに呟いたとか。  
「強く…強く生きてくれ……っ！」

「高町桃子です！ よろしくね！」

先ほどまでの残虐さをどこへ吹く風といったように年を感じさせない笑みで桃子がそう言うと同時に

にフェイトは驚き、念話で巧に聞く。

「（高町って……）」

「（そうだ。なのはの親だ。まあ、あいつは今はいないから安心しろ）」

「（……うん）」

巧は桃子からシュークリームの入った箱を受け取ると、それを持って外に出ようとする。

「巧君！」

「夜には帰る」

呼び止めた士郎に短く返し、フェイトと共に外へ出た。

「……本当に来るの？」

「ああ、友達の母親には挨拶しねえとな」

妙に友達を強調する巧。おそらく、同じ猫舌だからだろうが。まあ、それはさておき。

「次元転移、次元座標876C44193312D69……」

「……長いな」

三人と、バジンの足下に巨大な金色の魔方陣が広がる。

「開け、誘いの扉、時の庭園。テストロッサの主のもとへ」

光が三人を包み、天へと伸びていったのと同時刻、とある船の中。巧達の言う、船とは全く違いかかなりの近未来的装備をもつそのブリッジに一人の女性がやってきた。

「皆、どう？ 今回の旅は順調？」

「はい。現在第三船速にて航行中です。目標次元には今からおよそ160ペクサ後に到着予定です」

「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが……」

……

その説明を聞きながら、その緑色の髪を持った女性は日本茶をカップに入れて持ってきた少女を迎

える。

「失礼します、リンディ艦長」

リンディと呼ばれたその女性はカップを受け取り、答える。

「ありがとね、エイミィ」

彼女は時空管理局提督、『アースラ』艦長。リンディ・ハラオウン。

「ま、いざとなったら……力を使っても止めるわ。ね、クロノ？」

「大丈夫。わかってますよ艦長。僕は、そのためにいるんですから」

クロノと呼ばれた黒い服を着た少年。彼は一枚のカードを手に、そう答えた。彼は執務官、クロノ

・ハラオウン。リンディの息子だ。

高次元空間内にある、時空庭園。一人の女性は悩んでいた。

（なんなの……この少年）

自分の娘に似た人形、フェイトが連れてきた少年。いつものように自分のために人形を傷つけよう

としたのにできない。

（このままじゃ、あの人形に）

そう思った時、その少年、乾巧は口を開いた。

「プレシア・テストロッサ。話がある。二人で話せないか？」

「……私もちょうどそう思っていたところだわ。来なさい」

プレシアはそう言っつて玉座から立ち上がる。それを後ろから付いていこうとした巧にアルフは制止

をかける。

「駄目だつて！ アンタも、何かされちゃう！」

「大丈夫だ。気にすんな。俺は、俺の言いたいことを言っつてくるだけだ」

「でも！」

「フェイトと待つておけ。いいな？」

巧は答えは聞いていないと言いたげに顔をしかめて言うと、プレシアを追っていった。

「あなた、あの人形に何を求めてるの？」

モニターでフェイトがどのように動いているのかを監視していたプレシアにとって、未知の力を持

つ巧は脅威だった。

ファイズ、それは彼女、いや、時空管理局にとっても脅威だ。

魔力ランク的にフェイトに負ける巧。それが、変な道具を使うことにより自身の魔力ランクとほぼ

同等になる。これがプレシアにとってどれだけ危険だろうか。

「別に。じゃ、俺からも質問だ。お前はフェイトを人形と呼んだ。お前とフェイトはどういう関係だ

？」

「あの子は私にとっての便利な道具に過ぎないわ」

鼻で笑いながらプレシアは答える。

「なら……お前の娘で、死んだアリシア・テストロッサと瓜二つな理由は？」

「な！？ ……どうしてそれを」

杖を握る手が震える。何故、知り合ったばかりの彼がアリシアのことを知っているのか、プレシア

は震えながら言う。

「アリシアのことを知って……何が目的？」

今にも消し去りたい衝動に駆られながらプレシアは聞く。

「まあ、情報はいくらでも入る。お前ほどの優秀な人間のことならなおさら、な」

「質問に答えなさい」

「まあ、俺は悲しそうなフェイトに笑ってほしただけだ」  
力強く言う巧をプレシアは睨む。

「『唯一の娘、アリシア・テストロッサを失った大魔導師プレシアは行方不明となった』…これが、

お前についての最後の記録だ」

「……」

「写真も見た。アリシアとフェイトはほとんど同じ…」

「黙りなさい！」

魔法を放つ。巧はそれを転がって避けた。

「あいつを……あいつを殺せ！」

プレシアは様々な形をした魔力で動く機械人形に指示をする。

「くっ、変身！」

【Standing by Complete】

懐から取り出した音声入力型のデルタフォン。それをあらかじめ付けていたベルトのデルタムーバ

ーに接続。すると、アクセルフォームの銀色のそれと同等の出力を持つ白いフォトンストリームが流

れ、デルタへと巧の姿を変える。

「殺せ、殺せ、殺せええええ！」

「くっそ！」

デルタムーバを手にとって音声を入力する。

「Fire」

【Burst Mode】

「はっ！」

光弾を発射させて人形を破壊。そして巧は待っているフェイト達のもとへと帰って行った。

「……くそっ！」

プレシアはその場で杖を投げ捨て、叫んだ。

「ふわああああ……ん、あれは巧君やないか」

図書館、そこではやてはいつものようにパソコンを見ている巧を見つけた。

「巧君、ひさしぶりや」

「ん、ああ。はやてか」

「なんや、エッチなサイトでも見てたんか？」

「違う」

巧はインターネットを見ていた。

「ん、と、心理学？」

「ああ、ちよっとな」

巧はパソコンから立ってはやてを見下ろす。

「にしても、久しぶりだな」

「あはは、そうやね」

巧はファイズフォンを開いて時間を見た。

「おっと、人を待たせてるから。じゃ」

「あ、ほな、またな」

巧は図書館を出て、フェイトの家へと向かった。

t  
φ · s ! ·  
- O p e n y o u r e y e s · f o r t h e n e x

## 第十話 身分証明【改訂中】

「バルディッシュ、どう？」

【Recovery complete】

「そう、頑張ったね。偉いよ」

フェイトは右手の手甲にはめたバルディッシュを見つめながら言う。後ろでアルフが耳を揺らした。

「感じるね…アタシにも分かる」

「巧がただだけど…もうすぐ発動する」

海鳴市のビルの上、フェイトは空を見上げた。

それとほぼ同時刻、なのはは下校してバスを降り、ユーノと遭遇した。ユーノから渡された待機状態のレイジングハートはひびも入っておらず、完治していた。

「レイジングハート。治ったんだね…よかったあ」

【Condition green】

「また、一緒に頑張ってくれる？」

【All right, my master】

なのははレイジングハートを胸に押し当てて呟く。

「ありがとう……」

巧は帰宅、使用したデルタギアを元の場所に戻しておいた。

「前、一度使ったときも思ったけど……使いづれえな」

前、使ったとき。それは、自分がオルフェノクだと周囲の人間にばれて逃げ隠れていたときに窮地に陥っていた本来の装着者である三原という青年達を救ったときだ。

（……デルタギアが無くなって、どうなっているんだろうか）  
巧は想像する。

（生き残った共存派が人間を守ってくれているだろ）

オルフェノクに未来はない。王が死んだ今、あの世界のオルフェノクは絶滅するだろうと考えている。

「やっぱり俺にはこれが一番使いやすいな」

ファイズギアを手にとつて、巧は歩き出した。そして、外に止めてあったオートバジンバトルモードに掴まり、フェイトの所へと向かった。そして、向かっている途中で光が空へと伸びていった。

「発動か、フェイト」

「ん、そうだね」

海鳴の臨海公園の木が一本。巨大になっていくのが見える。

「どうせなのはも来てるだろうから、俺は地上から行く」

「うん」

巧はどのみち空中で戦闘が出来ない。ファイズブラスターを使えばいいのだが、負担が大きいし、下手すれば死ぬ可能性もある。スーツにフォトンブラッドが流れ込むそれは、相当の負担なのだ。カイザでも適合しなければ死ぬというのに、これはなおさらだ。まあ、

王に破壊されたあとに修復されたカイザはそんなことは無くなったが。

子供の体になって不便だ…と、巧は思った。

「封時結界！ 展開！」

遠くでユーノが結界を展開しているのが見えた。

「バルディッシュ。フォトンランサー」

【Photon lancer.】

複数の光が巨大な木の怪物に襲いかかるが、バリアみたいなもので防がれる。

「生意気にもバリア張ってやがるな」

「そうみたいねえ……」

「今までのより、強いね。……それに、あの子もいる」  
フェイトがそう言うと共になのはが振り向く。

「たつくん！ どうしてフェイトちゃんと!？」

「それよりフェレットモドキ！ 逃げろ！」

巧が怒鳴ると共に、ユーノは草むらへと逃げていく。木の怪物は根っこを巨大に成長させた。

【Flier fin.】

なのはが避けると共に、巧は後方に身を投げる。

「バジン！」

ガシツという音と共に手にはあるものが手渡される。

「さっきは使わなかったが、いくぞ！」

それを組み立てて、木に向ける。

「バルディッシュ、アークセイバー。……行くよ」

【Arc saber.】

バルディッシュに光の刃が形成される。

【Shooting mode.】

「行くよ、レイジングハート！」

フェイトはバルディッシュを振りかぶり、木へと光刃を飛ばす。それは根っこを切り裂いていき、本体にぶつかった。

「撃ち抜いて！ デイバイン！」

【Buster.】

巧は右足を踏ん張って、それを撃つ。

「はあああつ！」

余りにも大きな威力に、地面がえぐれながら、赤い弾が木へと向かっていった。

「本気で、厳しい……」

ただのファイズでファイズブラスターをぶつ放した巧はふらついた。

なのはの上からの砲撃で木は地面にめり込み、ファイズブラスターの弾で、怪物は腹部を貫かれた。フェイトはそれを見ながらバルディッシュを持っていない左手で軽く印を結ぶ。

「貫け轟雷！」

【Thunder smasher.】

発生した魔方阵にバルディッシュを打ち付けて光線を放つ。

怪物は断末魔の叫びを上げて消滅。あとにはジュエルシードだけが残った。

【Sealing mode・Set up・  
Sealing form・Set up・】

レイジングハートとバルディッシュがそれぞれ封印する体勢に入る。

「ジュエルシード、シリアル?!」  
「封印!」

なのはとフェイトの二人が魔力を解放した。あたりに光が満ち、二人の少女は空中で対峙する。

「……ジュエルシードには、あまり衝撃を与えたら駄目みたいだ」  
「うん。タベみたいになったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも、かわいそうだもんね」

一度フェイトは軽くバルディッシュを持ち上げ、構えなおす。

「だけど、譲れないから」

【Device form・】

「私は…フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど」

【Device mode・】

なのはは続ける。

「私が勝つたら…ただの甘ったれた子じゃないって分かってもらえたら、お話、聞いてくれる?」

そう言って、二人が動き始め、それぞれのデバイスをうちつけ合おうとする。

そのとき、バジンがピピピと警報音を鳴らした。

「どうした？」

バシュという音と共にと光があふれ、青い魔法陣が現れる。そして、レイジングハートは出てきた手に掴まれ、バルディッシュは杖に阻まれた。

「ストップだ！！　ここでの戦闘は危険すぎる」

「何だ、あいつ……？」

巧は出てきた全身が黒く統一された少年を地上から見上げる。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。さて、事情を聞かせてもらおうか」

現れた少年、クロノは身分証と思われる物を見せる。なのはとフエイトは地上に降るされ、バインドをかけられた。

「くっ……」

「無駄な抵抗はよしてくれ」

フエイトが両手、両足にかけられたバインドを壊そうとするが、壊れる気配がない。だが、

「フエイト！　撤退するよ！」

狼ではなく、人型になっていたアルフは発生させた魔力弾をクロノに向けて発射した。かなりの数がクロノに迫り、クロノはバリアを張る。もし、なのはにバインドをしていなければ迎撃しただろうが、そうも行かなかった。

雨のように断続的な魔力弾が発射される中、フエイトにかけられていたバインドは消失した。これを好機と見たのか、フエイトは走り出す。

「っ！ フェイト！」

だが、撤退するためではなく、ジュエルシードを手に入れるために。しかし、

「行かせない！」

それを撤退と見たクロノはいくつもの魔力弾を発射する。それは走り出していたフェイトに直撃し、彼女はそのまま倒れる。

「なっ！？」

ユーノは突然起きたこの事態について行けていない。

「あっ……フェイト！」

アルフはフェイトに駆け寄り、その体を抱き上げる。

だが、クロノは彼のデバイス、S2U、正式名称を『Song To You』というそれをフェイトとアルフに向けたまま、告げた。

「武器を捨てて、両手を頭の後ろで組むんだ。抵抗は無意味だ」

杖の先端に彼の魔力色である水色の光が集まった。

「くっ、このおおお！！」

アルフはその警告を無視。クロノに掴み掛かろうとするが、

「何！？」

アルフはバインドで動けなくなった。なのは達にかかっているそれよりも強固な、体全体をリングで拘束するような物で動けなくされてしまった。

「もし、これで僕に攻撃が当たっていたらそれこそ公務執行妨害で逮捕だ。その子と一緒に」

実際、クロノはそこまで事を荒げたくはなかった。なぜなら、近くにジュエルシード。爆発寸前な爆弾があるのと同じような物なの

だ。だが、導火線が見えない分、たちが悪い。

それに、

「局は何時だつて人材不足なんだ。ただでさえ忙しい。だから、こんな『子供の喧嘩』に油を売っている暇はない」

彼が『子供の喧嘩』と称したのは、このまま何の抵抗も無しに事情聴取を済ませる事が出来たなら、両方とも無罪。警告程度で済むという理由でだ。

ロストログアを巡つての喧嘩というのも揉み消して、後は自分たちでそれを回収すればいい。そうすれば二人の少女は何事も無く元の生活に戻る。

と彼はそう思っていたのだが、

「子供の喧嘩だと？」

その場にいたもう一人の人物。巧は『子供の喧嘩』という単語に激しい怒りを覚えていた。

「っ！」

クロノは巧の方を向き、バインドをかける。だが、『ファイズ』にはそんなバインドも無意味だ。大の大人が時間をかければ壊せる程度の物。ファイズが壊せないわけがない。

巧はオートバジンのハンドルであるファイズエッジをミッションメモリーを挿入して引き抜く。フォトンブラッドの赤い刀身が生成される。

「僕のバインドを壊すとは。まあ、いい。君も大人しく投降してくれないかな？」

「はあ？ やだね。事情を知らないお前が勝手に入ってくるな」

ファイズフォンを開き、ENTERキーを押す。

【Exceed Charge】

フォトンストリームを経由してフォトンブラッドがファイズエッジに注入された。構える巧を見て、クロノは魔力弾を巧にも放つ。しかし、

「はあっ!!」

ファイズエッジが振られると、赤いエネルギー波が魔力弾を蹴散らしながらクロノに襲いかかる。

「なっ!？」

来るであろう衝撃にクロノは目を閉じた。しかし、

「なんなんだ…これ」

彼は赤いエネルギー波で拘束されただけであつた。

クロノは知らないことだろうが、ファイズエッジを使用した必殺技、スパークルカットは攻撃する前に相手を拘束するエネルギー波を放つ。それは、魔導師の使用するバインドとほとんど同じだ。

巧は、拘束した後には斬りつける……事はせず、フェイトとアルフに向かって叫んだ。

「さっさと逃げろ!」

それを聞いた二人は少々面食らったようであつたが、素直に跳び去って、転移した。

「どういふつもりだ!!」

クロノは拘束されながら巧に叫ぶ。

「別に。友達が知らない奴に攻撃されたから、が理由だな」

ファイズフォンを抜き取り、変身を解除しながら巧はクロノに言

い放つ。

「そもそも、時空管理局が本当に正義の組織かどうかもわからねえし。なにせ、俺らはそっち、ミッドチルダだとかの住民じゃないわけだし」

巧はポケットにファイズフォンをしまい、ある小型機械を取り出した。

「時空管理局特別囑託魔導師、乾巧だ」  
「なっ!?!」

クロノは現れたホログラフを見て驚く。先ほど、彼が見せた物とほとんど同じだったからだ。

「にゃ!?!」  
「嘘!?!」

なのはとユーノも驚いてそれを見る。

「艦長!」

クロノは自分の母親を呼び出す。すぐにモニターが開かれ、リンデイの顔が現れた。

『……クロノ、これは本物だね。後見人は少なくとも提督クラス。詳細は秘匿、ね』

「ああ。色々と事情があつてな。あと」  
画像が切り替わり、新しい画面が映る。

「特殊ストレージデバイス、ファイズギア?」

「そう。半分ロストログアっぱいって話だからな。所持許可を取った」

映っているのはファイズギア一式。その他にも所持しているとの旨の文であつた。

彼は何も言っていないが、後見人はグレアム提督である。ジュエルシードに関わる限り、戦闘が絶えないだろうとの判断。局員にし

て、更にファイズギアの使用も許可された。もつとも、そういう措置を取ったのにはとある理由からだ。

「別に、俺は喧嘩の立会人ってわけじゃねえ。ただ、ジュエルシートを回収しに来ただけだ」

彼の発言の裏には『もう関わるな』という真意がある。理由はブレシアがジュエルシートを集めている理由を推測したのと、フェイトに対する彼女の仕打ちである。

ここで、管理局に手を出されたら面倒になる。そう判断したが故の、この発言だった。だが、

『そこら辺の事情も含めてこちらに来てくれないかしら？ 私はリンディ・ハラオウン提督。アースラの艦長です』

「……」

そう簡単には行かないようだ。

## 十一・一話 アースラにて（前書き）

色んな意味で、最後の方に戦闘。

こんな時期にこの小説を見て貰えるとはあまり思っていないんですが…。  
息抜きにでもどうぞ。

今回は急いなので荒削りです。

## 十一・一話 アースラにて

「ああ、君。バリアジャケットを解除してくれ」

「あ、はい」

アースラ内部。そこに案内された巧達は長い廊下を歩いていた。

なのははバリアジャケットを解除し、もとの小学校の制服に戻った。

「それと、君も。元の姿じゃないだろう？」

「…あ、そういえば！」

クロノに言われてユーノは驚いたような声を出す。そして、光に包まれて、フェレットだったその体は…

「…はい？」

「ふえ、え、え、ええええ！？」

「ふう。二人には、この姿は久しぶりだったっけ」

ユーノは少年の姿になると、二人をみやる。なぜ、ユーノが変身してフェレットになっていたのか。それは、魔力の適合不良という現象が原因だ。慣れない異世界で魔力を使いすぎると、乗り物酔いみたいなものになるとのことだ。

「そうか、そうか。なるほどな」

「え、と…巧？」

巧はなにやら納得したような声を出した。そして、

「ちよつと耳を貸せ。フェレットモドキ君」

「は…？」

ユーノはそのまま巧に引きずられて、物陰に連れて行かれた。それを、なのはとクロノはぼーっと見送る。

物陰に彼を引きずり込んだ巧は小声でユーノに質問した。

「女湯、堪能したか？」

「え？ …… あ、ああムグウ」

大きな声を上げかけたユーノの口を巧は塞ぐ。

「暫くは黙っというてやるよ」

「え？」

そして、巧はニコツと笑ってユーノに告げた。

「貸し、一つな」

ユーノは何故か、背筋が凍った気がしたという。

「…とりあえず、こちらを優先して貰っても良いか？」

「あ、はい！」

クロノがついにしびれを切らして三人に言った。そして、突き当たりにある扉の前に四人は立つ。すると、扉が開いて、光が差し込んだ。

扉の向こうにあったのは…室内なのに咲き誇る桜と、古い日本庭園。日本文化を馬鹿にしているのかと聞きたくなるほど、船の内部と見ただけで分かるような壁に合っていない。

余談だが、桜はわざわざ空調設備を使ってまで散らしてある。掃除する人間のことを一切考えていないと、なのはは思った。

更に、しいてある畳の上に座っていたのは緑色の髪の女性、リンディ・ハラウンであった。ミスマッチにも程がある。

思わず、巧となのはは顔を見合わせてしまった。

だが、この空間には意味がある。現地の人の生活空間に似せることによって話しやすい空気を臨時につくろうという試みによって作られたのだ。…が、少々時代錯誤が起っている。

（…どこから突っ込めばいいんだ？）

（わからない）

アイコンタクトで意思疎通。その間僅か、0・1秒にも満たない。  
「どうぞ」

女性が四人に声をかける。

「は、はい」

案内され、巧、なのは、ユーノは座る。

そして、出されたのは緑茶と、羊羹。言うまでもなく、緑茶は熱々である。

「……」

「にや、にやはは……」

巧が顔を顰めているのを、なのはは横目でチラッと見て、苦笑いすることしか出来なかった。

「なるほど。あのロストロギア、ジュエルシードを発掘したのはあなただったんですね」

「…はい」

なのはは聞き慣れない単語があつたのか、リンディに聞く。

「ロストロギア？」

「んー、遺失世界の遺産、って言っても分からないわね。次元空間の中にはいくつもの世界がある。っていうのは知ってるわね？」

次元世界には、良くない形で進化しすぎてしまう世界がある。進化しすぎた技術や科学が自分たちの世界を滅ぼしてしまつて、その後に取り残された、危険な遺産。それがロストロギアだ。

「そう、私たち管理局や保護組織が正しく管理していなければならぬ品物」

リンディはそう言うと、砂糖が入れてある容器から角砂糖を一つ

取ると、緑茶に入れる。巧となのはは『うげ…』と声を上げた。  
「あなたが探しているジュエルシード…。あれは次元干渉型の  
エネルギー結晶体。流し込まれた魔力を媒体として次元真を引き起  
こすことのある危険物」

クロノは巧の背後で腕を組みながらさらに続ける。

「君があの子とぶつかった際の振動と爆発…それが、次元震だよ。  
たった一つのジュエルシードでもあれだけの威力があるんだ。複数  
個集まって動かしたときの威力は計り知れない」

リンディはその説明を聞きながら緑茶にミルクを注ぐ。それを見  
て、巧となのはは『うげげ…』と声を上げた。

「次元断層が起れば、世界の一つや二つ。簡単に消滅してしまうわ。  
そんな事態は防がなきゃ…」

リンディは砂糖、ミルク入り緑茶を煽ると、三人を見据えて言う。

「だから、これよりジュエルシードの回収は私たちが担当します」

「え？」

なのはは思わず声を上げた。

「ああ、それがいい。厄介ことはこっちから願い下げだ」

巧はそう言うと、緑茶を冷やす作業に戻る。

それにクロノは頷き、まだ納得していないなのはとユーノに言い  
放つ。

「…君たちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻るといい」  
「でも！」

「そうです。もとは僕の不手際だったのですから。…だから！」  
なおも食い下がる二人を見て、リンディはため息をつきながら言  
った。

「まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一

晩、二人で話し合ってそれから改めてお話をしましょと。」

「あなたは、どうします？」

「決まってる。俺は自分のなすべき事をするだけだ」

顔を上げて巧はリンディを睨む。

「…君は、犯罪者を味方した」

「あいつはまだ犯罪者とは決まっていけない」

後ろのクロノに振り向くことなく答える。いきなり鋭い言葉が部屋に行き交い始め、なのはとユーノはついて行けないでいた。

「そもそも、事情も聞かないでいきなり背後から襲うって言うのはどうなんだ？」

「あれ以上の戦闘行為は確実に被害を出した」

クロノは若干イライラした様子で話す。

「はあ？ 魔法があるだろ、ま・ほ・う。変な空間作り出すの。あれやれば周囲に被害は無かったはずだ」

「ジュエルシールドが近くに」

「それなら戦闘を止めるよりも先に回収すればよかったじゃねえか」

クロノは返答に詰まる。先にジュエルシールドを確保していれば、危険は減ったし、その間に二人は戦闘を続ける。そうすれば、二人とも拘束することが出来たのだ。

「あと、お前らのやりかたは嫌いだ。なにせ」

巧はクロノを指さす。

「こいつは武装を解除していない」

「っ！？」

クロノは『しまった！』といったような顔になる。

「何を怯えてるんだ？ 俺たちは丸腰だ」

「……」

巧は立ち上がって、全員を見回す。

「俺はなり行きで局員になったが……。あまりこの組織に信用はしていないねえ」

そして、巧は転送ポートへと向かっていった。

## 十一・一話 アースラにて（後書き）

戦闘というか、口論でした。さて、次はフェイトサイドからお話が進んでいきます。

「まだ感想返していなかったのかよ！ この人殺し！」

Q 巧が囑託魔導師かぁ・・・フェイトたちは知ってるんですかね？

A フェイト達はまだ知ってませんね。知ったらどうなるのでしょうか…。

時系列的に知らせる時間がなさそうな気がしますね。

だからこの質問コーナーのタイトルがおかしいぞ…！

### 《報告》

Arcadia様にて、この小説を・txtで一話を20KB目安にして加筆、修正して纏めたものを投稿しております。

所詮、チラ裏↑

チキンとでも何とでも呼ぶがいい。

まあ、今は鯖が落ちていて見れませんが。

（3/13）鯖復活したようです

地震、凄かったですね。関係のない地域に住んでいるので分かりませんが、相当らしいです。姉も巻き込まれましたし…。

皆さんも頑張ってください。

## 十一・二話 傷ついた体で（前書き）

書いていたら消えた。ショック…。

直前まで保存していたやつから復旧しましたが、モチベーションの  
下がり具合のせいで遅くなりました。すみません

## 十一・2話 傷ついた体で

「駄目だよ。管理局まで出てきたんじゃ、もうどうにもならないよ……」

フェイトの隠れ家……。とあるマンションの一室のベッドにフェイトは倒れ込んでいた。クロノに負わされたダメージはかなり深いようだ。

「大丈夫……だよ」

「大丈夫じゃないよ！　ここだって、いつまでバレずにいられるか……。あの鬼ババ、あんたの母さんだってフェイトに酷いことばつかる！　あんな奴のために、もうこれ以上……！」

アルフは何があってもフェイトの事を優先する。だから、フェイトの事だけを心配した。

「母さんのこと……悪く言わないで」

フェイト自分の母親……プレシア・テストロッサに酷い仕打ち。虐待をされているというのに、どういふときでもプレシアを庇う。どうしてなのか、アルフには全く分からなかった。

虐待がエスカレートしたのはリニスという、プレシアの使い魔が消えてからだ。それまで、ストッパーとしていつでも制止をかけていたリニスが、契約終了した事でいなくなって、扱いが酷くなっていった。そんな様子を間近で見てきたからこそ、アルフはプレシアを憎んでいる。

「言うよ！　だって私、フェイトが心配だ……！　フェイトは、私のご主人様で、私にとっては世界でだれより一番大切な子なんだよ」  
泣きそうになりながらも、懸命に……フェイトの心に届くように叫ぶ。

「群れから捨てられた私を拾ってくれて…使い魔にしてくれて…ずっと優しくしてくれた！ そんな優しいフェイトが泣くのも悲しむのも…私、嫌なんだよ！！」

それでも、フェイトの意志は変わらなかった。

「ごめんね、アルフ。だけど、それでも…私は母さんの願いを、叶えてあげたい」

机の上に置かれたバルディッシュが、優しく輝いた。

『だから、僕もなのはもそちらに協力させていただきたいと』

アースラ。そのモニターにフェレットユーノの顔がアップで映されている。彼はなのはの自室からレイジングハートに話しかけて、通信しているみたいだ。

「協力ねえ…」

民間人に極力関わらせたくないクロノは、眉間に皺を寄せながらユーノの提案を聞く。

『僕はともかく、なのはの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思います。ジュエルシードの回収、あの子達への牽制。そちらとしては、便利に使えるはずですが…』

ユーノがやっているのは、なのはの能力…資質の高さを『道具』として、アースラに売り込む行為だ。道具なら、切り捨てられる。

なのはとユーノ、その二人は自らすんで、そのような道具になるうとしていた。道具になることで、事件に関わり続けることが出来るなら…。それが、なのはの願いだ。

「うん。考えてますね…。まあ、いいでしょ」

二人の思惑通り、リンディは了承した。

「か…母さ…艦長…！」

クロノは当然のごとくやめるように言うが、

「手伝って貰いましょう。切り札は温存したいもの。ね、クロノ執務官？」

「…は、はい」

母親に…勝てるわけがなかった。何時の世の中だってそんなものだ。母親は強い。

『条件は二つよ。両名とも身柄を一時、時空管理局の預かりとすること。それから指示を必ず守ること。よくって？』

「分かりました」

なのはの部屋、ユーノは一息ついた。計画が成功し、安堵する。

そのままなのはに念話を繋げる。

「（なのは、決まったよ）」

「（ん。ありがとう、ユーノ君）」

なのはは台所で母、桃子と共に洗い物をしている。巧と交代でやっているため、彼は自分の部屋に戻っている。

「さて…。じゃ、桃子、なのは。お父さん達はちょっと、裏山へ出かけてくるからな」

「うん。今夜も練習？」

桃子は少し手を止めて、夫の顔を見る。これだから娘、息子、居候にいつまでも新婚みたいな夫婦って言われるのだ。普通なら『そう、行つてらっしゃい』ですませるようなものだ。

「ああ」

「気をつけてね！ お父さん、お兄ちゃん」

「うん！ さて、行くかあ」

士郎の声に恭也は元気よく答える。

「久しぶりだからなあ。ビシビシ行くぞ！」

「あ、まってまって。私も見学！」

出発しようとしたところに、少々間延びした声を出しながら美由希が走って追いかけていく。

「来るなら早くしろー」

「うん。ちよつとまってー」

彼女のその声をするのとはほぼ同時に、何かと何かがぶつかったようなガスツ…という音がする。

「…っ！！ ああゝ！！」

大方美由希が何かに足をぶつけたのであろう。いつも起きる光景のため、なのはと桃子はいつものように顔を見合わせて笑った。

だが、なのはは知らない。…明日は我が身という言葉を。

激しく運動音痴なのは。美由希は少々天然が入っているだけなので、大切なところではボ力をやらない。しかし、なのはは違う。だが、これは魔法が主体の物語。彼女の運動音痴が起こした数々の奇跡はそのうち語られる…かもしれない。

「美由希、相変わらずだなあ…」

士郎の声が玄関で響いた。

「さ、これでおしまい…っ」と

「うん」

洗い物が終わり、なのはと桃子は向き合う。

「さて、それじゃ、大事なお話ってなあに？」

「うん…」

なのはが桃子に話したのは、ユーノに出会ってからのこと。魔法のことやユーノの正体のことは言えなかったが、言える限りのこと。それから、そのために家を少し空けないといけないこと。

桃子は、直感で分かった。なのはが何かを隠しながら話していると言ったことを。だが、そこを追求するようなことはしない。なのはが何かに関わっているというのは前々から分かっていた事なのだ。

「もしかしたら、危ないかもしれないことなんだけど…。大切な友達と一緒に始めた事。最後まで、やり通したいの。心配、かけちゃうかもしれないんだけど…」

そう言うつと、桃子は顔を両手で覆って話し始める。

「それはもう、いつだって心配よ！ お母さんはお母さんだから。

なのはの事がすごく心配」

「…」

だけどね、と言って桃子は顔を上げてなのはをしつかりと見つめる。

「なのはがどっちにするかまだ迷ってるなら、『危ないことは駄目よ！』って言うと思うけど、もう決めちゃってるんでしょ？ 友達と始めたこと。最後までちゃんとやり通すって。なのはが会ったその女の子と、もう一度話してみたいって」

「うん」

しばらくの間を置いて、なのはは頷きながら答える。桃子はその様子を満足したような顔で見た。

「じゃあ、行つてらっしゃい。後悔しないように。お父さんとお兄ちゃんは、お母さんがちゃんと説得しといてあげる」

「うん。ありがと。お母さん！」

後戻りはもう出来ない。自分で決めた道、自分が本当にやりたいことをやるために。

なのははそう思いながらユーノと、レイジングハートと共に夜の海鳴を駆けていった。

「……結局そうだったか」

巧は、窓から彼女が走っていくのを見つめて、ため息をついた。ポケットに入れていた小型端末を操作し、とある人物を呼び出した。

## 十一・二話 傷ついた体で（後書き）

と言うことで、アニメ版では四分の三程度。劇場版では半分程度終わったくらいの所です。

気付いたら30万PV超えてました。ありがとうございます。作者としては感想が増えるのが嬉しいです。本当に。

感想で初めて矛盾点に気付くこともあるから、読んで下さる方がいて小説って言うのはできるんだなあと実感。

これからもよろしく願いします。

そして、今月の絶望的な更新頻度のために月別では下から2番目にアクセス数が少なかった…orz

でも、やめるつもりはありませんので！

## 十二・一話 殴り込み

「というわけで、本日0時をもって本艦全クルーの任務はロストロギア、ジュエルシードの搜索と回収に変更されます」

リンディがアースラの会議室で今後の方針についての話をしている。

「また、本件においては特例として問題のロストロギアの発見者であり結界魔導師でもあるこちら」

「はい、ユーノ・スクライアです」

ユーノは無駄に胸を張って立ち上がった。端から見れば滑稽である。とか言っではいけない。子供というのはそういうものである。

「それから、彼の協力者である現地の魔導師さん」

「た、高町なのはです」

なのはも立ち上がり、控えめに挨拶をする。

「以上の2名が臨時局員の扱いで事態にあたってください」

「よろしくお願いします」

「よろしく願いしますー！」

二人が頭を下げる。ふと、なのはは視線を感じてクロノの方を見る。なのはが笑いかけるとクロノは顔を真っ赤にして顔ごと視線をそらした。

ユーノはその様子をジト目で見ていた。やきもちでも焼いているのだろうか。

さて、クロノが真っ赤になった顔のことをエイミイにからかわれているその頃。乾巧もまた、恭也に色々と話をしていた。

山から帰ってきて、なのはが暫く家を空けることになったと聞い

た士郎はその場に崩れ落ち、『な、なのはが不良になった…』と呟いたとか。

桃子が巧を含めた事情説明が終わると、恭也は巧の部屋に何か知っているのではないのかと思って入ったのである。

巧も恭也に話しておきたいことがあったから都合が良いと言つことになり、キッチンから紅茶とお菓子をお借りして今に至る。

冷たい紅茶を啜り、巧は口を開いた。

「俺も少しここから出る」

「なのはと同じ事でかい？」

「うーん、近いようで遠い。まあ、アイツに少しは関係することだな」

巧はそういつとクッキーに手を伸ばす。喫茶店を営む家にある紅茶、クッキーがしっかりした物であると言つことは言つまでもないだろう。

新製品の毒味は一家総出で行っているほどだから、当然と言えば当然だが。

「巧。お前、最近悩んでないか？」

「……分かるか？」

「勿論だ。何年一緒に住んでいると思つてる」

恭也もクッキーに手を伸ばしながら巧を見据える。ここ数日の巧は本当に悩んでいた。

「この件と……」

「いや、別件でだ」

まあ、気にするなと言つて巧は立ち上がる。

「俺もなのはを追いかけてくる。絶対に二人で帰ってくるから安心して待っていてくれ」

「ああ、妹を頼んだ」

その晩、巧は高町家から姿を消した。

「プレシア・テストロッサ」

「またお前か……！」

時の庭園。……その玉座のような所に2人の人間が対峙している。  
「フェイトの事を娘だと思えないのか？」

玉座に座っていない方の人間……乾巧は玉座に座っているプレシアに問いかける。

「愚問よ。あんな役立たずな人形を娘だと思う？　あの出来損ないが！」

一瞬で巧の周囲に大量の魔力弾が現れる。その一つ一つに雷が宿っていた。

「消えなさい！！　ファイア……！」

その全てが一気に巧に襲いかかった。棒立ちの巧は瞬く間に煙の中に消えていく。

「はあっ、はあっ、はあっ………」

魔力を一気に消費したプレシアがよろめく。手に持っていた杖は地面に落ちて乾いた音を立てた。

これだけの集中砲火を『殺傷設定』で至近距離で放てば誰も生き

ていられない。そう思っていたプレシアだったが、煙が晴れる。

「お前にとっては偽物だろうよ」

「なっ!？」

巧は所々服が焦げてはいるが、全くと言って良いほど無傷だった。

実は、魔法が発動して、光でプレシアから自分の姿が確認できなくなったタイミングでウルフォルフェノクへと変化。

その独特の瞬発力と身の軽さをもってほとんどを避けきつたのである。

ウルフォルフェノクは時速で約300キロ走る。自分の最高速度で周囲を認識できない動物はまずいない。それに見合った動体視力がある。

通常時よりも何倍も強化されたそれで全ての弾丸を補足しきつたのだ。

だが、プレシアはそんなことを知るよしもない。

「だが、俺にとってフェイトはフェイトだ。本物なんだよ」

「う、るさい」

椅子を杖代わりにして体重を預けながらプレシアはようやく立ち上がった。

「あんたみたいな子供に何が分かるというの!？」

「なら大人のお前は子供の何が分かる!！」

プレシアが叫び、巧が叫び返す。

「俺はアリシアとお前と同じ母子家庭だったんだ」

プレシアは地面に落ちた杖を拾うためにかがもつとするが、体かと思うように動かないみたいだ。

「母親が一人で俺を育てて、仕事が遅くなって飯を一人で食わないといけないこともあった」

「…っ！」

プレシアは満ち足りていた頃を思い出す。それほどに、巧の話は彼女の昔と類似しているのだ。

「一人は寂しくて、母親を待って…。それで寝てしまったこともあった」

「……」

プレシアの動きが完全に止まった。いや、動けなくなった。何もかもが気持ち悪いくらいに一致していて。

「お前、こういう仕打ちをフェイトにしてアリシアがどう思うのか考えたのか？」

「…っ！」

「俺はお前がどうしてジュエルシードを集めているのかは分からない。でも、フェイトはアリシアの妹と言っても過言でもねえんだよ。親に妹が虐待されているのを見て、普通はどう思う！！」

巧はプレシアにそう叫んだ。

プレシアは大きく目を見開く。

（妹…。アリシアの、妹？）

彼女は頭のどこかにひっかかりを感じた。

だが、それを頭から追いやって巧をにらみつける。

「フェイトはアリシアじゃない。記録上ではフェイト・テストロッサなんて少女はどこにもいなかった。おそらくお前が娘に瓜二つな彼女を拾って死んだアリシアのように育てたんだろ？」

「……」

プレシアは目の前の少年が自分のどこまでを知っていてどこからを知らないのか測りかねていた。

（でも、プロジェクトF・A・T・Eの事は知っていない。それよりも）

「あなた、それよりもどうやってここに来たの？ 転送魔法なんて使えないあなたがどうしてここに？」

「んなことはどうだっていいんだよ」

チツ…と心の中でプレシアは舌打ちをした。

「まあいいわ。前は逃がしたけど…」

プレシアの周囲に雷を発生させながらいくつもの魔方阵が現れる。

「私たちの邪魔をするなら、消えなさい！！」

「っ！？」

一気に爆発した魔力によって巧は吹き飛ばされる。

「ごほっ、ごほっ…」

唇が切れて少々血がにじみ出てくるのを巧はぬぐった。

（これはやばい。この狭さだったらでかいの1発でやられる！）

巧がそんなことを考えているのと同時にプレシアも焦っていた。

（体調が良くないわ…。今で消し去る予定だったけど狙いがずれた…）

手に持った杖を頼りに彼女は立っているが、足は震え、体に力はいほとんど入っていない。

対する巧は先ほどの衝撃であればが数本折れている。…が、本人は気付いていない。

オルフェノクであっても生身なら怪我するし、血も流れるのだ。

（あと1発…。あと1発で全てが…）

「くっ…はあああっ！！」

残った力を振り絞ってプレシアは先ほどの数倍の魔方阵を出現さ

せる。

（当たらないのなら、増やせばいい！！）

巧はその魔方陣を見ながらどうするべきか必死に考えていた。

（ファイズとかには防御とかそういう機能がない。どうすればいい、どうすれば……！）

どう考えても魔法というものはオルフェノクの攻撃と同等か、それ以上である。

ファイズのスペックで耐えきれるかどうかさえ怪しい。

既に変身しながらもどうやって耐えしのぐのかを考えていた。  
だが、

（アクセルでもよれない……。ここまでか）

何も考えつかなかった。

「あああああああああああああああ！！」

プレシアは叫びながら魔法を放とうとし、巧は本能的な動作で頭部を庇うように右腕を上げた。

## 十二・一話 殴り込み（後書き）

今回は過去の回想…になるかもです。

今回、かなり編集に編集を重ねたんで色々当初の予定と変わってきています。

が、物語自体に支障はないと思うのでおそらく、大丈夫なはずですが…。

また、今後の展開は賛否両論あるかもしれませんがそのまま貫いていきたいと思っています。

…こんな展開なのはの二次創作。読んだことがない。

まあ、ほぼ構想段階ですが。

## 十二・二話 回想（前書き）

色々物語が広がってきました…。

今回はプレシアさんの視点が混ざります。

基本、視点は巧が重要人物だけに絞ろうと思っています。

その他はその現場を見ている人が解説しているような感じで

## 十二・2話 回想

巧はいつまで経っても来ない衝撃に不審に思っただけで閉じていた目を開ける。

そこには…

「なっ!？」

地面に血だまりを作っただけで倒れているプレシアがいた。

巧は走って駆け寄って体を見渡す。

外傷がないか確認した後、体にゆすった。

「おい! プレシア!！」

返事がないために一応呼吸を確認する。

(呼吸はしている…)

「くっそ…。おい! グレアム!！」

巧はポケットの中に入れていた小型端末に叫んだ。

『どうしたのかね?』

「見てわかんねえのかよ!」

『……分かった。すぐに手配しよう』

巧とプレシアの足下に魔方陣が現れた。

『アリシア。誕生日のプレゼント、何か欲しいものある?』

暖かな日差しが降り注ぐ丘で、私は娘と共に食事をしている。

娘…アリシアにはいつも悲しい思いをさせてきたから少しぐらい

のわがままなら聞いてあげようと思っている。

今日もアリシアのわがままに付き合っぴてピクニックに来ているのだ。

『んゝとねえゝ』

アリシアがしばし考える。

『あ、わたし妹が欲しい!』

えっ!?

『だって妹がいたらお留守番も寂しくないしママのお手伝いもいっぱいできるよ!』

アリシアの妹…。夫と別れた今では出来ないこと。…でも、妹がいい! ママ、約束!』

小指を差し出された。

そう、いつか落ち着いたら再婚するのもいいかもしれないな…

『分かった。ママ、約束したよ』

『えへへ! わーい! やったあ!』

無邪気に笑う娘を見ながら私は微笑んだ。

ああ、そうだ。あのひっかかり…

『必ず妹をあげるからね』

『あのねゝ、わたしは妹を大切にするから、ママも大切にしてくださってね!』

『当然よ。だって娘だもの』

そうね…。忙しい日々のせいでいつしか忘れてしまった約束…。

私はいつのまにか果たしていたのか…。

目を開けると、そこは知らない天井だった。

使い魔のリニスがいなくなっただけからは汚くなる一方だった私の寝室と違い、清潔なシーツに天井。

「ここは…？」

先ほどまで乾巧という少年と戦っていたはず。

「目覚めましたね、プレシア女史」

「丸1日目が覚めなかったようですが…」

いきなり聞こえてきた声の方向を見ると猫耳、尻尾で瓜二つな顔の少女…使い魔が2人いた。

体を動かそうとするが

「すみません。父様の命令で拘束させてもらっています」

「病人に失礼だとは思いましたが…」

「ホント、失礼ね」

何重にもバインドされていた。2人は申し訳ありませんと言って頭を下げた。

「で、ここは…」

「しー！ 静かに」

私の質問を1人が遮る。

「彼、巧君が起きちゃうので」

もう一人が指さした方向にはベッドの上で熟睡している乾巧がいた。

「ここは私たちの父様」

「グレアム提督の息のかかった病院です」

提督…？ なら

「管理局ね」

「ええ」

「そうです」

管理局に掴まってしまった、という事よりも先に見ていた夢のことを考える。

（私は、これからどうすれば…？）

私はいつも気付くのが遅すぎる。

「事情によつては——あなたを解放できます」

「なんですつて？」

「巧君が言っていました。何か事情があるんだろう…つて。まあ、私たちが彼に脅されたというのもありますかね」

解放…。もし解放されたとして私はどうする。

フエイトを娘だと言つて両腕を広げて抱きしめる？

それともアルハザードを目指す？

アルハザードは存在する。それはあの男によつて証明されたものと同じ。

「まず質問するわ。私の詳細情報を調べてあの少年に渡したのは…貴女たちね？」

『ええ』

二人とも同時に答えた。…なるほど、そういうことだったのね。ならば

「F計画のことも？」

「はい」

「おおよその事は」

ホント、局は厄介だね。よくそこまで調べたものね…。

「もういいでしょう。もうそこまで調べられたというのであれば私が何を求めているのか分かっているはずよ」

「いいえ」

「何を…は分かりましたが、どうしてもかは分かりません」

猫姉妹が表情を変えずに答える。どうして、か…。

このもやもやとした思いは…何なのだろう。

どちらを選ぶにせよ、私には残された時間が少ないのだ。

なのは達がアースラに移って十日目。それまでに目立った動きはないが、巧達が通っている学校でちょっとした騒ぎがあったというのは言うまでもないだろう。

翠屋は通常営業なのに…子供が2人、家の事情で家を空ける。

そんな異常事態に驚かないはずがなかった。

…月村すずかを除いては。

彼女は彼女の姉の恋人である恭也から巧についてだけある程度の事情を聞かされており、巧については何の心配もしていなかった。だが、なのはがどうして家を空けているのかについてはかなりの心配をしている。

そんな心配を知るわけもなく、なのははアースラのベッドで横になっていた。

（残ったジュエルシードは六つ）

アースラサイドが見つけたのを先に奪われてしまっていたりして、残りのジュエルシードは六つとなった。

「これまでに私たちの手に入れたジュエルシードは三つ…。フェイトちゃん達が手に入れたのは二つだから」

「あと六個、か」

なのははかなり心に空洞を感じていた。

（たつくん、どうしてるかな…）

幼い頃から一緒にいた巧。いるのが当然だからいないと余計に寂しくなる。

（アリサちゃんやすずかちゃんも）

それでも、となのはは閉じていた目を開いて強く思う。

（私は…フェイトちゃんとお話したい！）

## 十二・二話 回想（後書き）

もうそろそろクライマックスです。  
のんびりまったりと執筆していきます。

これ、書くのに相当頭捻ります。  
同じような展開をしている作品がありましたら誰か教えて下さい。  
参考までにどういう心理描写なのかを見てみたいです。

あ、それと。リアルが忙しすぎて全く時間が取れません。  
次は少し遅れるかもです。

生存確認（？）はこちらにて↑

<http://twitter.com/hanezukei>

一応小説更新報告用の垢。今のところφ・sだけ。

…誰も来ないから寂しい↑

十三・一話 扉を開き、そして…（前書き）

クロノ君は結構正論だと思うが、事情を知っている側から見ると…

うん。うんって感じ

十三・一話 扉を開き、そして…

（ジュエルシードは多分この海の中…）

「正確な位置は掴めないから、海に魔力流を撃ち込んで強制的に発動させて捕まえる…」

アルフは曇天の空の下、少々波のある海の十数メートル上空で、<sup>エイト</sup>主人様が巨大な魔方阵を展開しているのを見守っている。

「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ。いま導きのもと降りきたれ」

（でも、フェイト！）

「バルエル・ザルエル・ブラウゼル。撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス……」

フェイトは詠唱を終えて魔力を撃ち込む体勢に入る。

そこらへんに大量にあつた金色の魔力球にはまるで目のような模様が浮かび上がって雷を海に降らせる。

「はあああつ！！」

かけ声と共に魔力が撃ち込まれる。暫くして海から光がたち上つて、巨大な渦となる。

水の竜巻にも見えるそれはとても巨大で、気を抜くと飛ばされそうなほどに風も吹いていた。

「はああ、見つけた！ 残り…六つ…！」

（こんだけの魔力を撃ち込んで、更に全てを封印して…。こんなの、フェイトの魔力でも絶対に限界を超えた！）

フェイトは魔方阵の上で膝をつくが、すぐに立ち上がる。

「アルフ、空間結界とサポートをお願い」

「ああ、任せといて！」

だから、とアルフは心の中で続ける。

「行くよ、バルディッシュ。頑張ろう！」

【Yes , Sir .】

（何が起きようが誰が来ようが……アタシが絶対守ってやる！）

フェイトが飛び、攻撃してくる水から身を守り、隙があれば攻撃を仕掛ける。

巧はそれを病室からモニターで見っていた。

「……」

つい先ほどまで近くのベッドで寝ていたプレシアはもういない。どういふ話が三人で行われたのか知らないが、解放したところを見ると安全と判断したのであろう。でも、それならなぜ

「何故コイツらはまだジュエルシードを求めているんだ？」

意味が分からんと頭を振る。身体に巻かれた包帯からは微妙に血が滲んでいる。

先ほど取り替えたばかりなのだが、何かの破片が傷を付けていた

ようで中々完全に止血できていない。

「今からなら間に合うし、飛行も一応できるようにはなったが…」

空中で飛びながら戦う魔導師に飛べない巧はサポート出来ないどころか、ただの足手まとい。

飛行出来る程度の魔力は持っている巧だがデバイスを持っていないために補助ももらえず、初心者であるために燃費も悪い。

「…くっ」

起き上がろうとしたが胸が痛む。

戦闘していたときには興奮していたのか、全く痛みを感じていなかった。しかし、今になって激しく痛んだ。

ちょうど同じ頃、時の庭園…。

そこにはいつものように豪華な椅子に座っているプレシアと、横に立っている二人の使い魔がいた。

「…私たちがやろうとしていることに比べれば、あなたのやろうとしていることはそこまで酷くはない」

「でも…。私たちが言えたことではないですが、それでは彼女が…！」

リーゼロッテとリーゼアリアがプレシアにそう言うが、彼女は答える。

「どのみち結果は同じよ。それなら少しでも生きながらえて、アリ

シアとまたあんな日常を暮らせる可能性が少しでも。ほんの少しでもあるならそっちを目指すわ」

フェイトとアルフが戦闘しているのを三人は見つめる。

プレシアは病院でいくらかの治療を受けた恩恵か、先ほど巧と戦っていたときよりは顔色が良い。

いや、それだけではないのだろうが…。

「それでも！」

「黙りなさい！」

大きな声を上げかけたアリアにプレシアは声を荒げる。

「これで終わりなのだから」

「…」

「プレシア女史…」

目を伏せた二人の表情は暗く、それと正反対にプレシアの顔は安らいでいた。

それはアルハザードに向かう事への希望に満ちた顔か、それとも…

フェイトがジュエルシードを強制的に発動させた直後、アースラサイドは慌ただしかった。

『エマージェンシー！ 搜索行きの海上にて大型の魔力反応を感知！』

赤い緊急アラートが艦内の所々に表示されたのを見たなのはたちはブリッジへと向かった。お茶をしていたのに途中で中断させられて残念だとなのはとユーノの二人は思いながらだったが。

なのははユーノの故郷の話や発掘の話。そして、彼の将来の夢である考古学者について聞いて聞いていた。

ブリッジに着き、戦闘しているフェイトを二人は見る。  
フェイトは疲弊し、アルフも同様であった。

「なんとも無茶する子ね…」

「フェイトちゃん！ あの…私…急いで現場に！」

なのはは現場に向かおうとするがクロノが冷静に止める。

「その必要は無い。放っておけばあの子は自滅する。自滅しなかったら力を使い果たしたところで叩く」

「でも！」

それでもクロノが言っていることは正論だ。感情を一切無視して考えれば誰もが同じように考えるだろう。

管理局が求めるのは平和。それゆえに、危険分子は即刻排除。間違いなくフェイトができていたのは危険行為で犯罪であった。彼らの考え方は正しい。

「捕獲の準備を」

「了解」

【Scythe Form.】

画面の中でフェイトが攻撃するが、飛ばされる

『ああっ!』

『フェイト…フェイト!!』

アルフは水に囚われて身動きが取れなくなる。

「残酷に見えるかもしれないけど、これが最善」  
「でも…」

なのははしぶった。まだ年端もいかない子供に大人の世界、考え方が分かるわけでもない。

…逆も言えることだが。

幼い故に、なのはは純真だった。

命令を守らなければならぬ。でも、フェイトと話したい、はやく現場に向かいたい。

どちらかを選ばなければならなかった。

（なのは…行つて…）

（ユーノ君？）

ユーノがなのはに念話で声をかけたのは暫くしてからである。

（僕がゲートを開くから、行つてあの子を）

（でもユーノ君）

（行つて）

命令無視をすることになる。悩みに悩んだ末、なのはは

（…うん！）

ユーノと目を合わせて頷き、ゲートの中に入る。

命令を無視し、フェイトとアルフの元へ向かおうと決心する。

「君は！」

クロノが声を上げたと共にユーノがなのはを庇うかのように両腕を広げてクロノの方を向く。

「え！」

「ごめんなさい、高町なのは…指示を無視して、勝手な行動をとります！」

「あの子の結界内へ、転送！！」

リンディも声を上げるが、ユーノが転送をする。  
複雑な形の印を結び、ゲートが開かれて……

t  
- O p e n   y o u r   e y e s   .   f o r   t h e   n e x  
t   p h a s e !   -

十三・一話 扉を開き、そして…（後書き）

巧はまだ動けません。

いや、流石に生身の人間があれ食らって無傷はないかと。

オルフェノクと言ったって、人間態なら強度は人間と同じですし。血とかも出てたし。

次は殆ど原作そのままな気が…。

巧が動かないと仕方ありませんね。

それでは、また



「嫌な空だわ」

作業していた手を休めて空を見上げる。曇っていて、自分の何か  
が警告を発していた。

月村忍は手に持っていたボルトだとかを全て机の上に置き、伸び  
をする。

「  
…」

見るのは机の上に置いてある透明な箱の中に入っている数本の試  
験管。

箱はかなり冷えていて、中の温度は0度近い。彼女はそのうちの  
一本を取りだした。

「オルフェノク、か…」

何故か知らないけど、その単語に聞き覚えがあった。だが、生憎  
と恭也とすずかは違ったらしい。一人で頭を捻る。

今やっていることや、悩んでいること全て、友人のためと、自身  
の知的欲求を満たすための行為。

「名前の由来でも分かればいいのかもしれないけれど…」

そう呟いたのと同時に扉がノックされる。入ってきたのはノエル  
だ。

「お茶をお持ちいたしました」

「うん、ありがとう」

「…その試験管」

「うん、彼の血よ」

巧の血。彼が言うに、オルフェノクとは人間が進化した存在。ならば、遺伝子的に何か決定的な違いでもあるのかもしれないと考えている。

「色々と確証を持ってから取り出した方がいいかと」  
「ええ、そうね」

試験管を再びもとの箱に戻す。  
そう言えば、と忍はノエルに声をかける。先ほど疑問に思ったことを聞いてみるのだ。

「はい」

「オルフェノク。…聞き覚えがあるのだけど、どう？」  
「……」

ノエルが暫く考え込む。彼女の自動人形としての記憶を頼ったのである。

「想像ですが、ギリシア神話に登場するOrpheusと旧約聖書に登場するEnochから取られた造語、かと」

「オルペウス、エノク…」

それなら確かに聞いたことがあると頷いてノエルに謝辞を述べる。それに何時ものように答えてからノエルは部屋を後にした。その後、椅子に座って二つの言葉について思い出そうとする。

「オルペウス、エノク…」

さんざん考えて思い出そうとした挙句…  
インターネット

文明の利器を使って調べようと、パソコンの電源を入れた。

なのはが空から降りてきたのを見たアルフはフェイトの邪魔をしに來たと判断。自身を拘束していた水の渦から抜け出して攻撃を仕掛ける。

「があああああ！ フェイトの邪魔を……するなあああ！！」

だが、その拳はユーノによって阻まれる。

「違う！ 僕たちは君たちと戦いに來たんじゃない…！」

「ユーノ君！？」

『ばかな…！ 何をやっているんだ君達は！？』

「ごめんなさい、命令無視はあとでちゃんと謝ります！ だけど…ほっとけないの！」

アースラからクロノの通信が入る。怒っているようではあったが、そこまでではない。

先ほどはああは言ったものの、フェイトが傷つくのは見たくなかったのだろっ。

「まずはジュエルシード止めないと…。放って置いたら融合して、手の付けられない状態になるかもしれない！ 止めるんだ…。二人のサポートを…！」

ユーノはアルフに説得をしようとしていた。

「フェイトちゃん！ 手伝って、ジュエルシードを止めよう」

目の前の白い子がどうして手伝おうとしてくれるのかは分からなかった。

フェイトは流れてくる魔力を感じながら思う。

【Divide energy】

【Charging】

【Charging completed！】

バルディッシュの刃には先ほどまで点滅していたような弱々しい光ではなく、とても強い光が灯った。

「二人できつちり半分こ。ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる……だから今の内。二人でせーので一気に封印！」

【Shooting mode.】

なのはのレイジングハートが形を変えて長距離射撃の体勢に入る。なのははその時、やっとわかった。フェイトに伝えたいこと、フェイトと話したいことが。

やはり思い浮かぶのは幼かった頃の自分。

親に隠れて泣いて、親の前で騎乗に振る舞い、親に隠れて泣いて……。その繰り返しだった。

勿論、巧と出会う前のことであるために彼はそのことを知らない。

【Sealing form set up.】

「バルディッシュ?」

自分の命令も無しに勝手に形を変えたバルディッシュを戸惑いながら見つめる。

フェイトは返事のない寡黙な愛機バルディッシュが何を思っただのかを考える。

「デインバスターフルパワー! 一発で封印、いけるよね!？」

【Of course, master. (当然です)】

掛け声にレイジングハートが答える。

それを聞いてなのはは強く頷いた。

それを横目で見たフェイトは自分の魔方陣…金色に輝き、雷を纏うそれを展開した。

なのはがレイジングハートを強く握り、振る。それと同時に強い

衝撃波が辺りに走った。

「せえええええのっ!!」

なのはが声を上げる。

「サンダアアアアアアアアア……!!」

「デイベイイイイイイイン……!!」

それぞれのデバイスを構えて、発射体勢。

「レイジイイイイイイイツ!!」

「バスタアアアアアアアアツ!!」

フェイトはバルディッシュを魔方阵に打ち付けるように。  
なのはは帯状の魔方阵の中を通しながら。

砲撃はそのまま、全てのジュエルシードに当たった。

『すごい……。六個一発で完全封印!』

『こんな…デタラメな…』

『でもすごいわ』

アースラでもエイミィ、クロノ、リンディが驚いてその光景を見ていた。

結局全てのジュエルシードは封印完了。海はもとの穏やかな姿を取り戻した。



十三・二話 封印、力を合わせて（後書き）

原作通りになりすぎた。

仕方がない。巧がないのだから。飛ばしたくてもここ飛ばしちゃうたら後々意味分からなくなるし…。

うん、うんって感じです。

それでは、また

#### 十四・1話 足りない……

なのははフェイトの目の前まで飛行して止まる。

フェイトは驚いたように目を見開いた。

「フェイトちゃんに言いたいこと、やっとまとまったんだ」

なのはは先ほどの戦闘中、頭に思い浮かんだことを口にする。

「私はフェイトちゃんと色んな話を話し合って、伝えたい。……友達に……なりたいんだ」  
「え？」

フェイトは再び驚いて固まってしまった。

そして、何かを答えようとするが、突然入ってきた通信によってそれは叶わなかった。

『次元干渉？ 別次元から本艦及び戦闘空域に高次魔力来ます！

あ、あと六秒！？』

『なっ……！？』

そして、アースラとフェイトに巨大な雷が落ちた。

「指示や命令を守るのは集団を守るためのルールです。勝手な判断や行動があなたたちだけでなく、周囲の人たちも危険に巻き込んだかもしれないということ。それはわかりますね？」

「はい」

戦艦アースラ。そこでなのはとユーノの二人はリンディに叱られていた。

長い会議用の机を挟んでお説教されている。

「本来なら厳重に処するところですが…。融合暴走の危険性があつたということも鑑みて、今回は特別に不問とします」

リンディのその言葉になのはとユーノが下を向いていた顔を上げて明るい表情になった。だが、それを見たリンディは釘を刺す。

「が、二度目はありませんよ？」

「はい…」

「すみませんでした」

ふう、とため息をついてリンディはクロノを呼び出す。彼は壁に背中を預けて、閉じていた目をつひらいた。

「犯人について何か心当たりが？」

「はい…。エイミィ、モニターに」

「はいはい」

クロノの指示と共にエイミィがモニターに様々な画像を浮かべ始める。

そして、全ての画像が表示され、その一番上には…

「あら…」

彼らと同じミッドチルダ出身の魔導師、プレシア・テストロッサが映されていた。

彼らの知らないことだが、今のプレシアとは違って優しげな表情をしている。服装も露出があるものではなく、普通の白衣。

「フェイトちゃん、『母さん』って…」

なのはは雷がフェイトに落ちた瞬間のことを思い出す。フェイトは雷に打たれながらも母親に謝罪をしていた。

雷が収まったとほぼ同時にアルフが封印されたジュエルシードを手に入れようと接近するも、待機していたクロノに阻止されて半分以上か手に入らなかった。そして、クロノの手にあるジュエルシードを見た瞬間、アルフは魔力を海にぶつけて視界を遮った。

クロノが動けないうちにアルフはフェイトを抱えてその場から逃走してしまった。

なのはの知らないことであるが、アースラにも妨害用の雷が落ちており、センサーなどの計器類が一時的に誤作動を起こしてしまった。そのために後を追うことが出来なかったということもあった。

「プレシアは民間エネルギー企業で開発主任として勤務。でも、事故を起こして退職してますね。裁判記録が残ってます…」

エイミィはどのような裁判であったのかを詳しく説明したが、なのはとユーノにはあまり分からなかったようだ。

話が終わってブリッジまでの廊下。そこで二人の前を歩いていたリンディがふいに振り返る。

「プレシア女史もフェイトちゃんもあれだけの魔力を放出した直後ではそうそう動きはとれないでしょう。あなたたちも一休みしていた方がいいわね」

「あ、でも」

「ご家族とお友達に元気な顔を見せてあげなさい」

「はい」

「……………」

プレシアは地面に横たわっているフェイトを見つめっていると、部屋の外からアルフが入ってきた。

アルフがフェイトの所にたどり着く間にプレシアは別の部屋に移動していた。

「フェイト！ フェイトお……」

フェイトの体についている痛々しい傷跡を見つめると、決心したような目でプレシアが入っていった部屋の方向を見つめた。

アルフはゆっくりと立ち上がると腕に抱えていたフェイトをゆっくりと地面に寝かせる。

「アタシが、アタシがもうなんにもしなくていいようにするから……だから……」

そして、プレシアの入っていった部屋への扉を開いた。

扉を開けるとそこにあつたのはがれきの山だった。彼女は知らないことであるが、そこでたった数日前に巧とプレシアの戦闘があった場所であった。だが、そんなことをお構いなしにアルフはプレシアに向かって歩き出す。

途中にあつた障害物の瓦礫を力任せに破壊して、一直線に突き進んでいった。

彼女の目の前には頭上にいままで集めたジュエルシード全てを浮かべているプレシアがいた。

「……なにかしら？」

プレシアはアルフに背を向けて、懷に全てのジュエルシードを仕舞う。対するアルフは何も答えずに一步一步進んでいった。彼女の全身の毛は怒りで逆立っている。

プレシアのいる部屋……というより、空間は空中に浮かんでいて陸続きではなかった。

アルフはそれを見るや、狼のような俊敏な動きで次々と空中に浮いている台を乗り継いでいってプレシアに殴りかかった。

「うをおおおおおおおおお！」

「……」

だが、プレシアは紫色の壁を作り出してそれを防いってしまった。もちろん、アルフに背を向けたままで。

衝撃を緩和するためにアルフはとんぼを切って数個後ろの台まで後退する。

アルフは体勢を整え直すと、再び咆吼を上げながら突進していった。

「うわあああああ！！」

だが、それも壁に阻まれる。が、しかしアルフはその壁の微妙な隙間に両手をつ突っ込んで引き裂こうとし始めた。

「う……があー!!」

そして、壁は完全に引き裂かれた。

アルフはプレシアに掴み掛かって叫ぶ。

「アンタは母親で、フェイトは娘なんじゃないのかよ!! あんなに頑張ってる子に、一生懸命な子に……」

アルフは右腕を振り上げる。

「どうしてあん……」

「……っ!」

右手を振り上げた瞬間にプレシアはアルフの腹部、そこに左手を持って行った。そこから強大な魔力が吹き出してアルフは受け身も取ることが出来ずに吹き飛んでいった。

詠唱も何も無しに、純粹な魔力の奔流だけで吹き飛ばすのは流石、大魔導師である。

アルフは巨大な柱にぶつかって呼吸困難に陥った。柱には罅が入り、どれだけの衝撃だったのかがよく分かるようになっていた。

プレシアはゆっくりと飛行してアルフの目の前に着陸する。そして、手に持っている杖を突きつけた。

「っ!」

「邪魔よ、消えなさい」

杖の先端の宝玉に紫色の魔力が集まる。それをアルフはただ見ていたわけではなく、とっさに足下に魔方阵を展開した。

そして、轟音と共にアルフがいたところは……木っ端微塵になっ  
ていた。

プレシアはそれを見ること無しに、先ほどのフェイトがいる部屋  
へ戻っていった。

「フェイト、あなたの持ってきたジュエルシード九つ。これじゃ足  
りないの。……手に入れてきて、お母さんのために」

十四・一話 足りない……（後書き）

遅れました。ごめんなさい。

GWだろって？

……GWだからこそですよ。

展開が遅い……。大丈夫、もうすぐ終わるから

十四・二話 一時帰宅（前書き）

もう、ただ書きにくい。

どうしてたっくんは怪我なんてしちゃったんだろう……？

## 十四・2話 一時帰宅

「……とまあ、これがプレシア女史の計画」

「ハア！？　こんなんが計画って言えんの……っ！？」

「ほらほら巧君。けが人なんだから落ち着いて」

「こんなの睡つけときゃ治る」

巧が思わず体を起こそうとするが、顔を顰めて途中で止まった。  
とある病院の一室、乾巧は猫姉妹にいいようにされていた。

……つまり、そういうこと。

「うんうん。無愛想な顔も良いけど照れた表情もいいわね」

「いいから離せ！！」

ベッドの上で動けない巧に対しリーゼアリアとリーゼロッテの二人は様々ないたずらを仕掛けていた。ちなみに、巧はいま抱きしめられている。

滅多に見せない戸惑った表情を見せており、二人は満足していた。

……巧はイラついていたが。

「で、どうする？」

「私たちはこの件に関しては干渉しないし」

巧は暫く考えて、口を開いた。

「……………回復魔法って無いのか？」

「あることにはあるけど……………」

「その怪我だと完全には治らないし、一時的に痛みを止めるだけよ」

巧はそれを聞いてそれで十分だと答えた。

「ふええええええええ！？」

「なのは、落ち着いて」

「お兄ちゃん達が落ち着きすぎなんだってば！！」

たつくんも外に出ているらしい。一旦家に帰ってきて不審に思ったからお兄ちゃんに聞いたたら「出かけた」って……。昨日の夜、遅くに帰ってきたから気付かなかったんだと思うけど。朝ご飯の時に降りてこないから不思議に思ってた聞いたたら……。

私が思考停止しているとお姉ちゃんが呟いた。

「あれ、私はてつきり二人でどこかに出かけてるとばかり思ってたんだけど……」

とりあえず、一時帰宅の一日はこんな感じで始まった。

頭を整理しながら学校に徒歩で向かった。最近バスが故障したせいだってお母さんから聞いたけど……。そのせいで、すずかちゃん、アリサちゃんに会うのは学校になった。

「なのはちゃん！」

「すずかちゃん！」

「よかったあ、元気で」

何にも知らないすずかちゃん嬉しそうな顔で話しかけてきた。  
反対にアリサちゃんはいつものようにツンデレたけど……。あれ？違和感を感じるのはどうしてなの……？

あ、いつもたつくんがいるからアリサちゃんがそう見えないだけか。にやははは……

「な・の・は？ 今何かとおおおおおおっても変なこと考えていたでしょ？」

「にやにや！？」

アリサちゃんが心を読んだ！？  
もしかして私がない間に進化しちゃったの？

「こんのおおおおおお！！」

脳内で色々と考えていた私にアリサちゃんの唸り声……地獄の鎌が開くかのような恐ろしい声は聞こえなかった。

この数秒後、私はこめかみに激痛が走ることになる。

「人がせつかく心配してあげていたのいうのに！！」

「ご、ごめんなさいなの……！！」

なのはのこめかみからアリサの鉄拳が離された。なのははそのまま地面にうずくまる。想像して欲しい。同い年の同姓の友人に思いつきりこれをされることを……。

なのはは暫く悶絶した。

「で、巧はどうしたわけ？」

なのはが復活したのを見たアリサが発した第一声はこれである。すずかは少し事情を知っているためか、気まずそうに目をそらした。と、いうのも巧が時の庭園に乗り込む前に月村家に電話をしていたからである。

オルフェノクは沢山人間の中に潜んでいる。

だが、巧の生前（という表現が正しいかどうか分からないが）のようにスマートブレインみたいなオルフェノクを纏める組織みたいなものが存在しない。そのために覚醒したオルフェノクは各々自由に行動をしている。

大半は自分の力に気付くことなく日常を過ごしているが、ふとしたキツカケ（主に感情の大きな揺れ）に際して気付いてしまう。

自らの力に気付いた人間は……その力に怯えて封印するか、その力で自由気ままに人を殺すか、のどちらかに分かれる。

大半は前者を選ぶ。だが……ごく少数、後者を選ぶ人間も存在する。

そのために巧がこの世界、第97管理外世界「地球」を離れると  
いうのは危険なのだ。

通常の銃弾が効かないために、オルフェノクを倒せるのはオルフェノクか、ベルトの力を扱える人間だけだ。

異常は異常を呼ぶ……この海鳴という人外の生物が大量に存在する異質な土地にオルフェノクが引き寄せられるのも当然である。だから、いざというときに巧がいなければ危険だ。

……まあ、恭也だとか美由希だとか忍だとかノエルだとかのそのたもろもろ。人間よりも超越した人種がいるのでそこまでの心配はいらないのだけれど。

それに、オルフェノクが人を襲っているのをたまたま見てそれを救おうとするオルフェノクもごく少数いることも事実だ。そうで無ければ全世界でオルフェノクによる被害がかなり問題視されるはずであるから明白である。

「うーん、私にもわからないの」

「そっか。それはそうと、大きな犬を拾ったのよ」

アリサは二人に言う。すずかは「最近よく動物を拾っているね」と思ったりもしている。

というより、まず拾う機会すら普通なら無い。

「へー、どんな？」

「見たことのない犬種で、オレンジ色の毛並みで、額に宝石？みたいなのがついててね、おっきいの」

「……っ!？」

「なのはちゃん、どうしたの？」

放課後、なのは達三人はアリサの家、というか屋敷に向かった。

「拾ったのはこの子」

「（やっぱり、アルフさん）」

置いてあった檻の中にいたのは……アルフだった。

アルフはフェイトを止めるために一時的に管理局に味方すること  
となった。

そして……

十四・二話 一時帰宅（後書き）

あと少しだ……

それまでの我慢。

五月中にはたつくくんが戻ってくる……はず

十五・一話 全てはまだ始まつてもいない（前書き）

作者は名前を変えました。

## 十五・一話 全てはまだ始まってもない

管理局が用意した戦闘用フィールド、そこになのはは立っていた。

「ここなら、いいよね……」

思いを告げるために。

「出てきて！ フェイトちゃん！！」

だから、

「始めよう……私たちの全てはまだ始まってもない。だから、本当の自分始めるために始めよう！」

最初はただの初心者だった。経験も浅く、小さい頃からリニスにアルフと一緒に教えて貰っていた私よりも全然強くない。

それなのに、才能？

前、ジュエルシードを封印したときに一緒に戦った。

もう、あの子は本気を出さないと勝てない……

「バルディツシュ！」

【Photon Lancer】

フォトンランサーは射程：B、威力：B、弾速：A＋  
相手のシューターは射程：A、攻撃力：B、操作性能：A＋……  
いや、Sってところかな？

彼女は多方面からの誘導弾と一撃必殺の砲撃の2種類を使う。早さが無い分、威力が大きい。

高い火力と固い装甲。効果的な戦略を練って攻撃してくるはずだ。

「ランサーセット！」

【Get set】

だからこっちは早さで対抗する。

相手の100の体力を1ずつ削る。力と耐久力があってもこっちの動きについてこれなければ……意味がない。

魔法を使い始めてからの時間が長い私でも一切油断しない。一瞬でも動きを止めずに翻弄する。

一撃を食らう前にジャブで確実に仕留めていく！

「ファイア！」

「シュート！」

【Divine Shooter】

あの子のシューターに全て撃ち落とされる。

でも、それは計算の内。フォトンランサーは連発できる。

「ファイア！！！」

「っ！」

私たちは今、お互い全てのジュエルシードをかけて戦っている。  
合計20……。一つは破壊されたという話だから母さんに謝るし  
かない。何があったって私お母さんの味方だから。

この戦闘は畏かもしれないということは分かっている。

どう勝負が決っても結果は同じ。

私が勝ったにしても、目の前の彼女が私の帰還先の追跡準備のた  
めの時間稼ぎとなる。

だったら、勝つ以外に道はない。

「ふっ！」

罅迫り合いになってそのまま押し込む。

通常なら私が押されるかもしれないけど、上空から重力落下も含  
めた攻撃のため、先ほどのフォトンランサーで体勢が崩れた彼女は  
持ち直せない。

「きゃああああっ！」

そのまま飛んでいった。すぐさま追撃の準備に入る！

やっぱりフェイトちゃんは強い。

海に叩きつけられちゃったけどまた飛ぶ。ギリギリの低空飛行で  
衝撃波のために水がしぶきを上げる。

追いかけてきたから距離を取ろうとするけどすぐに追いつかれた。

【Photon Lancer】

「ファイア！」

四発セットされる。

ここで当たるのはマズいから急上昇。

三発はそのまま目の前にあったビルに直撃。残りの一発が私に付いてきたけど、曲がりきれずにこれもビルに当たって爆発した。

今度は私がフェイトちゃんを追いかける番。レイジングハート！

【Divine Shooter】

早い。でも、戦いを望んでいるからか速度がそこまでじゃない。おそらくカウンターを入れるんだろ。……でも、させない！

「シュートッ！」

同時にセットしたのは7発。でも、時間差で次々に撃ち出していく。

1、2、3と追尾していくけど当たらない。

【Scythe Form】

4、5、6はサイスフォームになったバルディッシュによって蹴散らされた。でも、一瞬動きが止まる。

ここで一発いくよ！

「七発目！ シュートッ！！」

シューターを回避しながら飛ぶフェイトちゃん。

でも、Uターンしてこっちにきた！

「っ！」

ギリギリ防御が間に合う。こっちが力が入らない無理な仰向けの体勢に対して、フェイトちゃんは力に入る前傾姿勢。

破られる……！？

「レイジングハート！」

でも、さっきのシューターをこっちに向ける。

「くっ……はあっ！！」

「きやあああっ！！」

押し切られた！？

そのままフェイトちゃんは海に向かって砲撃。一旦距離を取ってビルの屋上に降りた。そこで黒い煙のせいで姿が見えなくなる。でもフェイトちゃんの砲撃でこっちから見えないように、あっちからも見えない筈！

【All right muster！】

レイジングハートもやろうとしていることを分かったみたい。

【Shooting Mode・Divine Buster！】  
「バスタアアアアアアアッ！！」

煙も巻き込んでそのままフェイトちゃんのところへ飛んでいく。不意を突かれた彼女は無理な体勢で避けることになった。

【She is more advanced than you  
(彼女は貴女よりも経験が豊富です)】

—— You won't beat her easily.  
(簡単には勝てません)

それは分かってる。でも、知恵と戦術は練っている。切り札だつて用意してきた。

だからあとは、『負けない』って気持ちで向かっていくだけでしょ？

十五・一話 全てはまだ始まってもない（後書き）

この広いフィールドで戦闘したためになのはにアドバンテージがある。

遠くに離れて砲撃チャージ中に攻撃されるのを防ぎやすい点でも。

無印に比べ、A・Sは空中戦が少ない印象。

……言いたいこと、分かりますよね？

たっくん……

アクセス数を見てみた所、去年の年末から下がりっぱなし。お気に入りも増えない。

ついにボロが出始めたか……！！

十五・2話    P h o t o n   L a n c e r    P h a l a n x    S h i f t !

「辛い目に遭わせてしまったけれど……」

瓦礫の山の中でプレシアは呟く。右手には写真。

「あなたは今でも世界中の誰よりも大切な私の宝物……」

そして、目の前のモニターを見る。フェイトが魔方陣を展開してなのは対峙していた。

「あなたも……もう、いいのよ。フェイト。もうすぐ、終わらせるから」

プレシアは咳き込んで吐血する。それでも、口から血が流れてもモニターを見続ける。

「あなた達にはずっと寂しい思いばかりさせてきた……でも」

——これで、全てが始まり、全てが終わるのだから。

「もう少し、待ってて……。最期に、お母さんらしいことをやってみせるから」

戦いはほぼ互角だった。

互いが自分の良いところを出し、中々決まり手が入らない。

2人の愛機、レイジングハートとバルディッシュは主人の力を最大限発揮できるようにサポートしている。

よくなのはと励まし合うレイジングハートと違い、寡黙なバルデ  
イッシュ。だが、彼も心の中で熱い思いを秘めていた。フェイトも、  
そんな彼を分かっているのか何も言わない。  
良く合ったコンビである。

レイジングハートは経験が少ない彼女の主人、なのはをいかにし  
て勝たせるのか。それをずっと共に考えてきた。戦闘中でも悪い点  
を指摘し、改善していこうとする。なのはもそんな彼女の気持ちに  
答えようともしっかりと力を出す。  
こちらも息が合っている。

だが、

「アリ……シア……？」

フェイトの調子がおかしい。

何故かなのはのシールドを貫こうとしているときに呆然としてし  
まった。

なのははそれを見て驚くも、とっさに判断し鎗状に変形していた  
バルデイッシュを受け流す。

そのままの勢いでフェイトは遠くに飛んで行ってしまったが、体  
制を整えた。

「そんなのは……どうだっていい」

彼女は不意に何故か昔のことを思い返していた。

その中で、母親が自分を呼んでいる。……読んでいるはずなのに

『フェイト』と呼ばない。

だが、その疑念を振り払う。  
早く帰って確かめればいいのだ。

「あの子に勝って、母さんのところへ帰るんだ!!」

この戦闘の中で一番大きい魔方陣を展開する。

フォトンランサーの発展版の魔法、『フォトンランサー・フランクスシフト』。今現在彼女が使用できる魔法の中で一番の威力とを持っている。

フェイトはランサーをセットしながらなのはをバインドする。なのはは動けなくなった。

「っ!?!? ……!!」

そして……

【Photon Lancer Phalanx Shift!】

バルディッシュがトリガーセーフティの解除となる魔法名読み上げを行って、現れていたスフィアが更に光り輝く。放電を始め、今にも発射できる用意が出来た。

作られたスフィアは38。秒間7発の高速連射により、単一の対象めがけて4秒で計1064発の射撃をたたき込む。

並の魔導師であれば太刀打ちできない。一流でも怪しいくらいだ。

「一撃必倒、フォトンランサー・フランクスシフト! ファイア  
!!」

そして、雷の槍が無防備なのはに降り注ぐ。  
例え防御されたとしても、魔力を根こそぎ奪っていく。そのこと

を考えれば後先考えずに全力で撃ち込むことが出来た。フェイトは全ての力を振り絞って表中をなのは一つに絞っていく。

次々に当たっていく攻撃に、なのはは見えなくなっていくたがそれでも一ヶ所に攻撃を集め続ける。

そして最後に全てのスフィアを手元に集めて巨大な槍とする。その大きさはフェイトの十数倍も……

「スパーク、エンド!!」

それをなのはに向かって投げた。なのはに衝突したと同時に光が収束。爆発が起った。

雷の暴風が吹き荒れ、辺り一面が黒こげとなった。どう考えてもこのありさまをみてなのはが無事でいられるとは誰も思わない。

フェイトは勝利を確信した。

だが、煙が晴れてそこにいたのは……

「な、なんとか耐えきったあゝ」

「なっ!? ど、どうして……」

そこにいたのは防護服もボロボロで、満身創痍なのはだった。フェイトは考える。何故なのはが落ちていないのか。

防御をしたのであれば、これだけの高出力の攻撃を受けきって魔力がほとんど空っぽのはず。そうだったら私に勝てるわけがない、と。

そんなことを考えていないわけがない。なのはも、レイジングハートも優秀なのに。

次の攻撃を考えれば防御に魔力を使おうとせず、結果として落ちることになると予想していたのだが、外れた。

「初めっから、このつもりだったんだよ」

【Can you move master?（動けますか、マスター？）】

「もちろん！ いけるよ、レイジングハート」

フェイトは大魔法を行使した影響で息が上がり、また魔力も殆ど残っていなかった。

だが、なのはと同じである。なのはは残った魔力を振り絞ってフェイトをバインドした。

「くっ……！？」

「デイベイイイイン、バスタアアアアアアアアッ！！」

デイベインバスターをなのはは放つ。

（あの子だって、もう限界のはず……）

フェイトはそう考えて左手で防御する。

当然、魔力が殆ど残っていなかったなのはの砲撃はすぐに止んだ。しかし、フェイトのマントは海に落ちていく。

なのはは自分から意識がそれている間に空中高く飛び上がった。

十五・二話    P h o t o n   L a n c e r   P h a l a n x   S h i f t ! (後

戦闘は映画版をベースに色々アレンジ

能力説明等は小説、漫画より。英文は一応短期留学はできる(とテストの結果が出たことのある)程度の作者が偶に

……TV版に触れてねえ

十六・一話    S t a r l i g h t    B r e a k e r ! (前書き)

お待ちかねのあのひと合流。

テンションが上がってきた――――！！

## 十六 - 1 話    S t a r l i g h t    B r e a k e r !

レイジングハートはシーリングモードで、なのはの利き手である左手に握られている。

『魔力が殆ど空』のなのはの目の前に巨大な魔力球ができあがっていく。それは何故か？

彼女は自身の魔力を使っていない。ほんの少しの魔力で、ここまで大きな魔法を行使なんて出来るわけがない。

だが、それは違う。

先ほどフェイトは巨大な魔力をなのはに打ち込み、なのははそれを防御した。

防がれた攻撃魔法。それは消え去るわけじゃない。

空中に魔力素として散らばったのだ。なのははそれを、自身の魔法に組み込むだけ……

結果として、本来の魔力光が桃色であるはずが、なのはの目の前にある巨大な光は金色も混じっていた。

「今度は私の番だよ！」

「なっ！」

その声と、明るい桃色の光によってフェイトは上を見る。右手と両足はバインドされたままだ。

【S t a r l i g h t    B r e a k e r !】

「使い切れずにバラ撒いちゃった魔力を、フェイトちゃんの魔力と一緒に自分の所に集める！」

巨大な帯状の魔方陣が桃色の球の周囲に現れる。最早フェイトからは太陽と同じか、それ以上の大きさにしか見えていない。

「収束、砲撃……？」

なのはがレイジングハートを振ると同時に帯の魔方陣が回転を始める。それと同時に球はどんどん大きくなっていく。周囲から流星のように一ヶ所に魔力が集まっていく！

「受けてみて！ コレが私の全力全開っ！！」

フェイトが黙って見ているはずもなく、防御用の魔方陣をいくつも展開した。

「スターライトオオオオオ……ブレイカアアアアアアアアアアアッ！！」

先ほどの牽制のデイベインバスターなんか目じゃない程の魔力の奔流がフェイトに迫っていく。名前の通り、本当に星を破壊できそうな勢いで次々にフェイトの魔方陣を壊していく。

フェイトの真上から放たれるその砲撃。遠くから見ればまるで十字架のようであった。

まだ制御が甘いせいか、次々にビルに砲撃が直撃していく。

……ちなみに、既にフェイトは桃色の砲撃のせいで吹き飛ばされている。

あたりはまさに世紀末。核戦争が起きたかのような様相をみせており、海に直撃した砲撃のため津波が起きていた。

だが、ここは無人空間。何も被害は無い。

「はあはあはあ……」

ガシユンと音を立ててレイジングハートの排気口から熱せられた空気が放出される。

そして、気を失っているフェイトが海に落ちていくのを見つけ、回収に向かう。戦いを見ていたアースラの人間はほとんど啞然としていた。

なのははフェイトを回収した後にさきほど戦闘が行われた空間、そこにあつたビルの残骸の上へ移動した。

フェイトが目を見ましたのを見て、なのはが聞く。

「ごめんね、大丈夫？」

いや、大丈夫じゃねえだろとアースラの人間が心の中で突っ込んだのはさておき、フェイトはそこに横たわり、なのはは心配そうに座つてのぞき込んでいる。

「動ける……？」

それを聞いてフェイトは空へ飛んだ。

「（もういい。あなたはもういいわ、フェイト）」

その声が聞こえたから……

『高次魔力確認！ 魔力波長、はプレシア・テストロッサ！ 戦闘空域に次元跳躍攻撃……。なのはちゃん！ ユーノ君！』

「かあ……さん……？」

「あっ！」

フェイトは急に暗くなり、紫色の雷が鳴り出した空を見上げる。なのはエイミーからの指示を聞いて、行動をしようとしたが、遅かった。

すでに真上には巨大な魔力の固まりが出来上がっており、フェイトをねらっていたのだ。

「フェイトちゃん!!」

すぐさま飛び上がってなのはフェイトの元へ向かう。だが……  
あともう少しで手が届くというところで

【Time Out】

「ったく。なにやってんだあのクソババア！」

【Reformation】

「た……つくん」

「巧？」

先ほどまでいた場所に、いつのまにか戻っていた。

だが、機械的な腕に抱えられて。

開いていた装甲が閉じ、銀色に光っていた危険信号であるシルバーストリームは通常のファイズの赤色に戻った。

「まっ、間に合ったか」

「魔力発射次元特定！ 空間座標確認！」

「転送座標セット！」

全ての準備が整ったのを見てリンディが指示を出す。

「突入部隊、転送ポートから出動！ 任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です」

次々にレイジングハートに似た杖を持った男女が転送ホールとへ入っていく。そして、そこが光るとそこにいた人間は全て消え去ってしまった。

『Intruders detected. Many intruders now in garden. (転送反応。庭園内に侵入者多数) 』

「まだ、終われないの……。あの子との約束を、叶えなくちゃ」

プレシアは咳き込み、吐血しながらも『客人』を迎え入れる準備をするために、その部屋を後にした。

先ほどの雷撃によってなのはとフェイトが取り出していたジュエルシードを回収し、それはすべて懐の中にある。

「一個足りないのは少し心配だけど……」

プレシアは決意を込めた目で歩く。

「やってみせるわ」



## 十六 - 1 話    S t a r l i g h t    B r e a k e r ! (後書き)

補足説明。

本編では語る予定がないので（外伝でそのうち出しますが。多分）

ファイズを書くに当たって一番厄介なのはアクセルフォームだ。だってあいつ、空中からの自由落下でも加速しちゃってるから。しかも地面に着地する寸前には減速しているし……。更にファイズアクセルに触れた描写もないし……。

詳しい設定はそのうち出す予定ですが、今のところ

ファイズアクセルフォームは装着者だけ時間が加速している

というように考えておいて下さい。ファイズを知らない人は（いないと思うけど）

知っている人は華麗にスルーして下さい。あのおかしさは知っているでしょうし（笑）

……厄介だわあ。この子。好きなフォームなのにね。

十六・二話 フェイト・テストロッサという少女（前書き）

お気に入り登録300人達成しました。ありがとうございます。  
これから無印編完結に向けて頑張って行きますよ！

## 十六・2話 フェイト・テストロッサという少女

「プレシア・テストロッサ！ 時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します！」

時の庭園内部、プレシアは武装局員に詰め寄られていた。彼らはプレシアが座っている椅子の横の扉を開けて、内部を見渡す。そして、そのまま長い廊下を走り出した。

「な、なんだこれは……」

局員達は、それを見つけた。

容器の中にまるで、眠っているかのような少女がいることを。その少女はフェイトと全くと言って良いほど同じ容姿だった。しかし、その少女の方がやや幼く見える。

「私のアリシアに……近寄らないで！」

プレシアは近寄ってきていた局員の頭を掴んで飛ばす。彼らがひるんだ隙に大魔法を行使する準備、そして発射した。

庭園内に紫色の雷が落ちる。その雷のせいで局員は全滅して地面に倒れた。

「アリ……シア……」

『一個足りないジュエルシードではたどり着けるかどうかは分からないけど……』

「何いってんだよお前は……！」

『あら、お久しぶりね。乾巧君？』

フェイトにはプレシアが何を言っているのかが分からなかった。何を終わりにするのか……だが、嫌な予感はしていた。

アースラのブリッジ。そこには先ほど変身を解いた巧、なのは、ユーノ。そして手錠をかけられて白い服を着ているフェイトがいる。フェイトの横にはなのはが付き添い、巧はその後ろでユーノと一緒に突っ立っている。

「あんたはフェイトの母親だろ！」

『っ！ う、うるさい！』

巧の声を聞いたプレシアは一瞬ともと、怒気のこもった表情をする。

『もう疲れたのよ……だから、もう終わりにする』

「あんたのやろうとしていることは無謀だ！ 計画だなんて言えるわけがねえんだよ！」

『そんなことは分かってる！！ だから終わりにするのよ。この子を亡くしてから時間も、この子の身代わりの人形を娘扱いするの  
も』

巧はその言葉を聞いて顔を顰めた。

『聞いていて？ フェイト……あなたのことよ』

フェイトは俯いていた顔を上げてモニターを見る。  
そこにはアリシアと呼ばれた少女が入った容器に抱きついている  
プレシアの姿があった。

『せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ……。役立たずでちっとも使えない、私のお人形』

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘アリシア・テストロッサを亡くしてるの。安全管理不良で起きた魔動炉の暴走事故……。アリシアはそれに巻き込まれて……」

エイミイがどういう事なのか分かっていないフェイトにそう説明する。

まだ10にもなっていない少女にこのようなことを理解させるのは酷なことだが、仕方がない。

「その後、プレシアは行っていた研究は使い魔を超えた人造生命の生成。そして、死者蘇生の技術」

「記憶模写型特殊クローン技術、『プロジェクトF・A・T・E』」

クロノがそう言うと、フェイトは息をのんだ。

どういふ事情なのかを全て知っている巧はモニターのプレシアをにらみつける。

『そうよ、その通り。でも、失ったものの代わりとしてはならなかった……。作り物の命は所詮作り物……』

アリシアはもつと優しく笑った。ワガママも言っただけ、言うことをとてもよく聞いた。アリシアはいつでも優しくかった……。

プレシアの口からこのような言葉が紡がれる度にフェイトは上げていた顔を地面に落としていく。

そして、プレシアは叫んだ。

『フェイト……あなたは私の娘じゃない。ただの失敗作……。だから、あなたはもういらないわ。どこへなりと消えなさい!』

もう、フェイトの心はボロボロだった。

これ以上何かを言われると、駄目になってしまふ。そう察知した巧はプレシアに言い返そうとして、一瞬考えて叫ぶ。

「フェイトは! ……いや、おい! 通信をやめろ!」

その叫び声を聞いてエイミィはフェイトの様子にハッと気付く。  
「さっさとしろ!」

今、立っている彼女はかすかに震えている。

母親と思っていた女性から告げられた自分の真実、自分に向けられた感情、それによって彼女の心に生まれたのは悲しみなんかじゃなく、絶望。

その様子をみたプレシアは口元を歪ませて更に……

『いいこと教えてあげるわフェイト……。貴方を作り出してからずっとね、わたしはあなたが……大嫌いだったのよ!』

そう言った。

フェイトは壊れた。

十六・二話 フェイト・テストロッサという少女（後書き）

無印編はあともう少しですね。

久々にアクセス解析してみたら昔よりPVが伸び悩んだ。

ま、docomoの解析精度を向上させたって話をツイッターで見かけた記憶があるから気にしない。うん。

ユニークから考えると一回の更新で1000人くらい見てもらいたい。

なにそれ怖い。……ボロが出ないように頑張らねば。

## 十七・一話 庭園へ……

「ちょ、大変！ 見て下さい！ 屋敷内に魔力反応多数！」

「魔力反応…… いずれもAクラス！」

「総数60、80…… まだ増えます！」

フェイトが崩れ落ち、手に持っていたバルディッシュも壊れた。内部の状況をずっとモニターしていた局員が伝える情報にリンデイは驚愕する。

「プレシア・テストロッサ！ 一体何をするつもり！？」

『私たちは旅立つの……。永遠の都、アルハザードへ！ この力で旅立って、取り戻すのよ！ 全てを！』

モニターの中のプレシアは懷から持っていた20のジュエルシードを取り出す。

それらは全てプレシアの周囲を光り輝きながら回り始めた。アリスアの入っていた容器は固定具から解放され、今はプレシアの横に浮いている。

「うっ、次元震です！」

「振動防御！」

「ジュエルシード20個発動！ 更に強くなります！」

「振動係数拡大！ このままだと次元断層が！」

（次元断層ですって……！？）

振動を続けるアースラでは全員が近くにある何かに掴まって耐えている。

巧達も例外ではなく、立っているのもやっとなようだ。

（忘却の都、アルハザード……禁断の秘術が眠る土地。その秘術でなくした命を呼び戻そうとでも……？）

リンディはそれを考えて、苦しそうな表情をした。

「次元震、震度徐々に上昇中！」

「庭園の駆動路が異常稼働！ 駆動路を暴走させて足りない出力を補おうとしている……！？」

武装局員は全滅。今、この事件を解決するだけの力を持っている人間は少ない。

リンディは出し惜しみをしないで、全力でこの事件を止めようと考えた。そして、ブリッジにいた優秀な子供達に声をかける。その場において、なおかつ事件を解決できそうなのは彼らしかいないからだった。

「これを止めるためにはあなた達にしかできないわ……。協力、頼めるかしら？」

彼女の声に真っ先に反応したのは意外にも意外、巧だった。フェイトから手を離して立ち上がり、リンディの方を向く。

「当然だ」

「わ、私も！」

「僕も！」

彼につられてなのはとユーノも声を上げた。

「……決まりね。クロノ、先導をお願い。私もすぐに向かうわ」

「了解、艦長」

「フェイトさんは……アルフさん」

「……わかった」

（アリシアの体はまだきれいなまま残っている……）

プレシアは庭園に入り込んできた無礼な『客人』がアースラに回収されるのを確認し、心の中で呟く。当然、その場には彼女とアリシアの死体だけがあった。

（ただ命が抜け落ちてるだけ……。アリシアの命を取り戻すための方法、それを探さないといけない。ここからは禁忌の道）

彼女は体の周囲を回転しているジュエルシードを見ながら心の中で呟く。

ジュエルシードは本来21で完全に願いを叶えるロストロギア。20しかない今、庭園の魔力炉も利用しなければアルハザードへと至ることが出来ないと考えている。

虚数空間の先、そこにアルハザードがあると信じて。

『わたしはあなたが……大嫌いだったのよ！』

プレシアは苦笑する。

どうしてこうなってしまったのか、どこで何を間違えたのか……。安全確認をしないで行われた実験、その賠償は多額の金だった。

だが、アリシアは帰ってこない。

「……全てを失った今、私は」  
ふう、とため息をついて続けた。

「——もう何も、怖くない」

「ユーノは知っているな？ この穴には気をつける」

庭園内に転移した巧は変身し、なのは、ユーノ、クロノを強引にオートバジンに乗せて走っていた。所々崩れた地面からは底の見えない闇があった。

虚数空間。魔法が発動できない空間だ。

「飛行魔法も発動しない。落ちたら重力の底まで真っ逆さまだ」

クロノのその言葉になのはとユーノは了解、とだけ返した。

「おいクロノ」

「何だ？」

「本当にこの方法でアルハザードに行けるのか？」

クロノは暫く考えて質問してきた巧に返す。

「無いな」

「どうしてだ？」

「アルハザードがあると仮定した場合、こちらよりも技術が勝っているに違いない、つまり、あちらからこちらに帰ることが出来る筈なんだ」

「……」

「いままで数人彼女のようにアルハザードを目指して虚数空間に消えていった科学者がいた」

三人は驚いてクロノを見る。

「それで、どうなったのクロノ君？」

「……当然、誰も帰ってきていない」

つまり、プレシアのやろうとしていることは全くの無駄なことなのだ。

どう考えても自殺行為にしか見えない。

「……止めねえと」

「ああ」

そのまま走って行って少し広い場所に出た。そこには沢山の傀儡兵がいた。

四人はバジンから降りて、クロノとなのははデバイスを構える。

「二手に分かれる。なのはとユーノは上の駆動炉を」

「クロノ君は！？」

「プレシアを止めに行く！ 今道を造る！」

S2Uをクロノが振るといくつもの魔力のナイフが発生し、大量の敵の方向を向いた。

「巧、手伝ってくれるな？」

「ああ！」

【Ready】

右手に持っていたファイズエッジにミッションメモリーを挿入し、いつでも攻撃できるような態勢を取った。

「行くぞ、クロノ！」

「いつ……けえええええつ……！」

クロノがスティンガーナイフを発動させ、それが爆発する。傀儡兵がひるんだ隙になのはとユーノは駆動炉へとかけだしていった。すぐさま追おうとする傀儡兵の目の前に巧は立ちふさがる。

「行かせねえよ……俺らが相手だ！」

巧はブウンと音を立てているファイズエッジを振りかぶり、傀儡兵に襲いかかった。

十七・一話 庭園へ……（後書き）

難産だった……

所々で原作から乖離している出来事がありますね。

ちなみに、バジンに四人乗りとか自殺行為です。

彼らが飛行魔法を微妙に使っていなかったら虚数空間に落っこちて  
ます。多分。

そしてプレシア……ヲイ

十七・2話    r e b i r t h

「あの子達が心配だからアタシもちよっと手伝ってくるね。すぐ帰ってくるからね」

そう言っただけで部屋から出て行った。その部屋には瞳の輝きを失ったフェイトだけが残される。

アースラの医務室……モニターには戦闘中のなのはたちが映されていた。

（母さんは……私のことなんか一度も見てくれなかった——）  
フェイトは心の中で呟く。

（母さんが会いたかったのはアリシアで、私はただの……失敗作。私、生まれてきちゃいけなかったのかな？）

モニターの中ののははディバインシューターで敵を数体倒し、ユーノはバインドで動きを止めている。暫くして、それらを倒し終えた二人が地上に降りると、ちょうどアルフが合流したところだった。

アルフと二人は軽く話して、頷いている。

（アルフ……白い子……）

モニターに映っている自分のことを心配してくれていた二人を見る。そして、もう一人、決して顔には出さないけど自分を心配してくれていた少年の顔を思い浮かべる。

（そして巧）

最初は得体の知れない男の子だったけど、暫く触れあっていくうちに内に秘めている優しさ、熱い思いが分かってきた。

そして、フェイトを見る目は何時も優しくかった。

（みんなが見てくれたのは……私で、何度も声をかけて、名前を呼んで、助けようとしてくれてた。……何度も、何度も）

何故こんなにも名前を呼んでくれる人に気付かなかったんだろう、フェイトはそう考える。

どんなに心配されても母親を優先してきてその呼ぶ声を無視してきたことを思い返して、気付いた。

（そうか——今まで、母さんに優しくしてもらえない自分が嫌いだったんだ）

いつまでも母親に優しくされない自分が嫌い、だから優しい母親を取り戻せたら自分が好きになれるとフェイトは考えていた。

世界はフェイトとプレシア、その二人だけしかないような錯覚に囚われていたのだ。だが……

（……こんなにも私のことを見てくれた人がいたのに）

違った。フェイトの周りには彼女を心配してくれる沢山の人がい

た。  
アリシアの『偽物』として生まれたフェイトを、心配して、気にかけて、正面から向き合おうとしてくれる人たちがいた。

フェイトが作られた生命だと知ってもなお、だ。

瞳に光を取り戻したフェイトを感じたのか、部屋の片隅の机に置

いてあったバルディッシュが金色に光り始める。

「バルディッシュ。私の……私の全ては……まだ始まってもない……？」

フェイトはそう問いかけながらバルディッシュを掴んだ。バルディッシュはボロボロのままデバイスフォームになり、ギギギと斧の部分を動かす。『まだ行けます、まだやれます』と言うように。そして、一言だけ発した。

【Get Set】  
と。

「そうだよね……バルディッシュも……ずっと私のそばにいてくれたんだよね」

沢山の人を思い出してもなお、フェイトには自分のそばにいてくれる相棒がいた。

そして、小さい頃のかすかな記憶も蘇る。

自分の教育係だった山猫素体の使い魔、リニスのこと。

「お前もこのまま終わるのなんて嫌だよね……？」

【Yes Sir】

フェイトの手から魔力が送られる。

「上手くできるか分からないけど、一緒に頑張ろう」

【Recovery complete！】

瞬く間にバルディッシュは完全に修復された。先ほどまでのボロボロだった面影はなく、研ぎ澄まされた力強さを発していた。

空中からマントが現れ、そのままバリアジャケットを纏う。

「私達の全てはまだ始まってもない……だから、ほんとの自分を始めるために……たとえ母さんから嫌われてもこれから自分のことを『好きだ』って言えるように……。今までの『嫌いな』自分を、終わらせよう！」

足下に魔方陣が現れ、光があふれ出してくる。

そのまま金色の光となってフェイトは庭園へと転移した。

「くっ、キリがねえな」

「ああ……」

クロノと巧は背中合わせに敵と対峙する。いくら二人が歴戦の戦士だと言っても敵の量は半端じゃない。

オートバジンで二人乗りし、目的の所まで一直線で行こうとしていたのだが、流石に相手が多すぎてクロノが対処仕切れなくなった。仕方なく目の前にある扉を守護している敵と対峙することになったのである。

この扉の先には目的の場所があると信じて。

「一気に状況を打破出来る手段はあるか？」

「ああ、完璧な布陣を壊せばいいんだろ？」

巧は腕のファイズアクセルからアクセルメモリーを取り、ファイズフォンに装着した。

装甲が開いて中身が見える。

「十秒後に扉に攻撃だ！」

「了解！」

【Start up】

そのまま巧の姿は消え去り、目の前の大群が次々にただの塊へと変わっていく。クロノはその状況に驚きながらも、加速したのだからと認識した。

十秒までもう少し、のところでクロノは構える。

【Time out】

「今だ!!」

「撃ち抜け!!」

【ブレイズキャノン】

クロノのS2Uはその他のデバイスとは違ってそのシステム音は母親、リンディのものが使われているようで、彼女の声で魔法が発動した。ストレージデバイスが故の高速処理で一気に魔法が放たれる。

放たれたそれは周囲の傀儡兵を巻き込みながら扉を破壊した。…

…だが、

「ちっ、またかよ」

「……そうみたいだな」

更に多くの傀儡兵が待ち構えていた。

駆動炉に向かう最後の螺旋階段。傀儡兵は一体なら問題ないが、数が多いとなると流石に押される。なのはたち三人は確実に押されていた。

ユーノが四体バインドしていたが、それが力任せに引きちぎられてしまった。そのため、一体が武器を投げる。投擲された武器はそのままなのはにむかって飛んでいった。

「あつ……なのはっ！」

ユーノが叫ぶがもう遅い。飛んでいく斧がなのはに当たると思われたその時、

【Thunder Rage】  
と聞き慣れた声が響いた。それと同時に周囲に雷が落ちる。

【Get Set】  
「サンダー……レイジッ！」

雷光一閃、バルディッシュを魔方阵に突き立てたフェイトのサンダーレイジが降り注ぐ。投げつけられた武器はバインドによって止められていた。

そのままサンダーレイジによって数体の傀儡兵は次々に爆発していった。

「フェイト!？」

アルフは攻撃が放たれた方向を見て驚く。フェイトはそのまま上空からなのはたちのいる高さまで降りてきて、なのはの正面に立つ。そのまま二人とも見つめ合い、声をかけようとしたが、いきなり現れた敵によって中断される。

「大型だ、防御が固い」

装甲、大きさ共に脅威だった。フェイトはそれを感じて言った。

「うん……」

「だけど、二人でなら……」

なのははその声に驚くと、暫くしてから満面の笑みで頷いた。何度も、何度も。

「——うん！」

十七・二話    rebirth（後書き）

rebirthで辛味噌が思い浮かんだ人は重傷

予定では七月上旬辺りで第一章完結です

## 十八 - 1 話 成功作として

傀儡兵が放った砲撃、これは確実に危険な一撃だったが二人は確実に避ける。次々に放たれていく砲撃も避ける、避ける、避ける――

！  
たった九歳前後の子供とは思えない空戦技術によって、放たれていく砲撃が全て避けられていく。二人の動きを捕らえることの出来ない傀儡兵に向けて攻撃の準備に入った。

フェイトはアークセイバーを放つと見事命中し、なのはが放ったデイバインシューターも全て一ヶ所に命中し、爆発した。

二人の攻撃を受けて体勢を崩し、落ちていくかと思われたそれだが、悪あがきか、最後に巨大な一撃を放とうとする。

「――バルディッシュ！」

【Get Set！】

「レイジングハートツ！」

【Stand by Ready！】

それを見た二人とも砲撃を放つ体勢に入った。フェイトは左手に小さな魔方阵を。なのはは足下に魔方阵を出現させて踏ん張る。

フェイトが魔方阵を投げると共に、二人は叫んだ。

「サンダアアア・スマツシャアアアアアッ！！！」

「デイバイイイイン・バスタアアアアアアアッ！！！」

放たれた二人の砲撃は傀儡兵の胸部に命中する。太い砲撃を受けたそれはミシミシと音を立てる。そして、

「「せーのっ！！」」

二つの砲撃は傀儡兵を蒸発させるだけではなく、庭園の外壁を破壊しながら消えていった。ガシュツと音を立ててレイジングハート、バルディツシュが排気をした。

「あと……もう少し」

プレシアはアリシアの入った容器にしがみつinaがらそう呟く。時空庭園での出来事が影響しているのか、地球では微弱な地震があちらこちらで続いている。地震大国である日本もその例外ではなく、海鳴にいて、なおかつある程度の事情を知っている人物は不安そうに空を眺めていた。

『プレシア・テストロッサ』

不意に魔法を使って呼びかけられてプレシアは振り向く。だが、そこには当然、まだ誰もいない。声の主はリンディだった。

『終わりですよ、次元震は私が押さえています。駆動炉もじき封印。あなたのもとには執務官が向かっています』

彼女の言うとおり、駆動炉についたなのはとユーノは封印の準備に入っていた。辺りには大勢の傀儡兵がいたが、封印になのはは集中し、ユーノがそいつらを相手することになっている。

【Sealing mode】

「行くよ、デイバインシュートーフルパワー！ シュウウウウウウウウト……」

なのは封印のための戦いを始めた。  
リンディはさらに続ける。

「……あなたが目指しているアルハザード、そこはありもしない場所、ただの伝説に過ぎません！」

「いいえ、必ずある……私は知っている。アルハザードへの道は次元の狭間にある。全てが消えていく場所に輝く光……道は必ずある！」

プレシアのその答えにリンディは半ば呆れるような声を出して呼びかける。自分の思いが伝わることを信じて。また、大事にならないように。

「……ずいぶんと分の悪い賭けだわ。仮にそれがあつたとして、あなたはそこに行って、一体何をするの？ 失った時間と、犯した過ちを取り戻す？」

「そうよ。私は取り戻す……」

プレシアは即答した。

「私とアリシアの、過去と未来を！ 取り戻すの……こんなはずじやなかった、世界の全てを！！」

そう彼女が叫ぶのとはほぼ同時に瓦礫の山が青い光によって吹き飛ばされる。そして、バイクの音が響いた。現れたのは体中ボロボロのクロノと、仮面によって表情も分からない巧だった。

巧の後ろでオートバジンに乗っていたクロノは飛び降りて叫ぶ。

「世界は、いつだって、こんなはずじゃないことばかりだよ！

……ずっと昔から、いつだって、誰だって、そうなんだ!!」

「どう生きるかは個人の自由だ。けどな、他人の夢を踏みにじつて、奪ってまで自分の夢を追いかけていけねえんだよ!」

巧もクロノの後に続いて叫ぶ。そして、プレシアが何かを言い返そうとしたがフェイトとアルフが空中から現れてそのタイミングを逃してしまう。

地面に降り立ったフェイトはプレシアに向かって歩き出す。

「げほっ、げほっ……」

「母さん!」

急に咳き込み、吐血したプレシアを見たフェイトは走り出すが、プレシアの絞り出した声を聞いて止まる。

「何を、しに来たの! ……消えなさい、使えない人形のあなたに用はないわ」

「……あなたに言いたいことがあつて来ました」

フェイトはプレシアをまっすぐに見つめて言う。

「私は……確かに失敗作かもしれませんが。ごめんなさい、アリシアになれなくて……でも、私はフェイト、フェイト・テストロッサという一人の成功作です!」

フェイトはそう言い切った。心なしか、嬉しそうな表情を浮かべながら。

「みんながそう認めてくれたから。……だから、いなくなれと言うなら遠くに行きます。……だけど、産み出してもらってから今まで

ずっと、今も、母さんに笑っていて欲しい、幸せになって欲しい、そう思ってます」

フェイトのその言葉を聞いたプレシアは一瞬何か言いたげな顔になったが、すぐに表情を戻し、一言

「……くだらないわ」

そう言って杖を地面に突く。魔力が解放され、ジュエルシールド20、全てが反応を始めた。

徐々に振動が強くなっていく庭園内であったが、暫くして少しおさまってきた。不思議そうに周りを見渡す一同だったが、その声を聞いて理解した。

『駆動炉の封印、無事成功！』

駆動炉の封印によって魔力の流れが一時停止。……だが、本来21で一つの大きな力をもたらすジュエルシールドを20だけで使用している今、1を補っていた駆動炉が無くなることでどうなるのかは……想像しやすいだろう。

不安定な魔力のせいで、徐々に先ほどを上回るかのような振動が庭園内を襲っていく。

『だめです艦長！ 庭園が崩れます！！ クロノ君達も脱出して！ 崩壊まで、もう時間が無いよ！！』

デイスティンションフィールドを展開していたリンディの足下が地割れを起こし、立つてもいられなくなった。そのため、集中が切れて魔法が切れる。更に振動が強くなっていった。

「了解した。フェイト・テストロッサ……フェイト！！」

クロノが叫ぶが、フェイトには聞こえていなかった。

「私は行くわ、アリシアと一緒に」

「……母さん」

「プレシア！ お前はフェイトを見捨てる気か！？」

巧はプレシアに向かって叫ぶが、

「言ったでしょう、私はあなたが、大嫌いだって……」

そう言ったプレシアはそのまま虚数空間の中へと自らの意思で落ちていった。

「母さん！ アリシア！！」

フェイトの悲痛な叫びが響くが、虚数空間に落ちたら最後、魔法は発動しないために生きて帰ってくることは出来ない。

なのはとユーノがやってきたが、どうすることも出来ずにいた。

一緒に落ちていく愛娘の入った容器を抱きながらプレシアは落ちていく。

「アリシア……」

『あのね、わたしは妹を大切にしているから、ママも大切にしてくださいね!』

「……私は、気付くのが遅すぎた」

昔の事を思い出して、後悔する。何故、覚えていなかったのかと。何故、思い出すこともなかったのかと。

目を閉じようとしたが、まばゆい光が視界いっぱい広がった。薄目をあけて、その正体を見ようとする。

「まさか……アルハザード？」

そして、彼女は自らに近づいてくる光に包まれながら意識を失った。

## 十八・一話 成功作として（後書き）

『アリシア・テストロッサ』としては失敗作だけど、『フェイト・テストロッサ』としては最高の成功作。そう思います。

まあ、人間に失敗作だとかは無いですかね。

勘の良い人なら後の展開は分かるはず。

十八・二話 真紅の戦士と庭園の崩壊（前書き）

お気に入り315人突発（＜ワ＞）

次は333人を目指します。

……913とか（1）000までは遠い

## 十八・2話 真紅の戦士と庭園の崩壊

「クロノ君！ 何か方法はないの！？」

「無い……仕方ない、脱出する！」

プレシアが虚数空間に落下したのを見た誰もが諦めていた。……だが、一人だけ違っていた。その男はバジンに括り付けていた何かを手に持つと、そのまま虚数空間へと飛び降りてしまった。そう、その男は巧だ。

「たっくん！？」

「巧！」

「なっ……何をやってるんだ巧は！！」

彼は一人、自らの夢のために絶望しかない空間へと飛び込んでいった。

虚数空間内では魔法が使えない。そのために魔導師や騎士のほとんどはこの空間に落ちてしまえば二度と戻って来る事ができないのだ。

……そう、魔導師や騎士なら。

魔法は全てキャンセルされ、重力の底まで落ちて行ってしまう。しかし、別の力を使って飛行するらどうか？

そこまで彼が考えていたのかは定かではないが、巧は虚数空間へと飛び込んでいった。右手に彼の切り札をもって、ファイズ

重力に任せて落下していると、遠くにナニカを視認する。それと

同時に右手に持った物へ腰のファイズフォンを外し、取り付けた。

### 【Awakening】

それ、ファイズブラスターからその音声が発せられた。そして、ファイズブラスターにいつもと同じ『555』のコードを入力する。そして、『ENTER』を押した。それと同時にファイズの全身が発光する。

スーツに赤のフォトンブラッドが駆け巡って全身が赤色に、そしてフォトンストリームはフォトンブラッドが流れない黒色に変化した。

その時に発生した赤い光は虚数空間の外にいたなのはたちの目も眩ませるほどだった。

ファイズ、ブラスターフォーム。ファイズの最終形態にして巧の最後の切り札の姿……

そのまま巧はファイズブラスターに『5246』と入力し、『ENTER』を押した。このコードがプレシアと、アリシアを地上へと送り返すためのコードだ。

【Faiz Blaster Take Off】の音声とともに背中にあるPFF（フォトン・フィールド・フローター）が起動する。

「はああああああー!!」

そのままプレシアの元へと巧は飛んでいった。

「何だったんだ、今の光は……」

クロノが驚きながら虚数空間を見つめる。しかし、思考を中断させるかのようにエイミイの声が響く。

『大変だよ！ クロノ君！』

「どうした！」

『ジュエルシードの力が強すぎて……このままじゃ、近くの世界まで巻き込んでまとめて消えちゃうよ！』

「なっ……！？」

ジュエルシードは一つだけでも次元震が発生する。それが20も集まっているのだ。次元断層が起きてもおかしくはない状況。これが今の半分の数のジュエルシードなら庭園が崩壊する程度で済んだかもしれないが、そうではない。

『悪いことにアースラには質量兵器が……』

「そんなっ！？ 艦長……！」

虚数空間にジュエルシードが落ちてしまったため、対処するためには質量兵器がどうしても必要になる。しかし、エイミイはアースラにそれがないと言った。嘘であって欲しいという願いと共にクロノはリンディに聞いた。

だが……

『エイミイの言うとおり、無いわ』

質量兵器はアースラに無かった。

しかし、そんな絶望的な状況でも他の人と比べて比較的にラク  
スしている人間が一人だけいた。その少女は「大丈夫」と言った。

「巧が、巧ならできるはず」

フェイトは虚数空間を見つめ続ける。そして、それは起きた。虚  
数空間の奥に一つの紅い流星が現れる。それはもの凄い速度でぞ  
き込んでいるフェイトへと近づいていった。

それにクロノやなのは、ユーノも気付く。そして、それがハツキ  
リと見えた。紅い光に押されるかのようになっているプレシアと、  
容器があつた。その下には今まで全員見たことの無いようなヒトガ  
タだった。

だが、全員にはそれが誰かが分かつた。<sup>フェイス</sup>巧だ。

何故抱えられずに押されているような形になっているのか、それ  
はブラスターフォームのスーツの特性による。

フォトンブラッドの流れるそれは並のオルフェノクであれば消滅  
してしまうほどの力を持っている。それが人に触れたらどうなるの  
かは想像しやすい。そのために巧はプレシアに触れないようにして  
持ち運ぶ必要があつた。

「——うおおおおおっ！！」

雄叫びを上げながら巧は虚数空間からようやく脱出する。

「あれ？ たつくんって飛べたんだ」

場違いに間抜けな声なのはから漏れた。

「全員受け取れよ！」

そう言って巧は手を離れた。そして少し離れたところに着地する。

その間にユーノとアルフはチェーンバインドでその場に固定。ゆっくりと降ろしていった。

プレシアは気絶しているようで、それを見たフェイトは安心する。

だが、そんな時間はもう殆ど無い。庭園も崩壊を続けているのだ。それにジュエルシードのこともある。

『早く脱出しないとクロノ君達が!』

「分かってるエイミィ! でも、僕らがやれることを探すしかないんだ! そうでないと沢山の命が消える!」

「おいおい、どうしたんだよ」

エイミィの声に向かって叫ぶクロノに呆れたような声で巧が聞く距離を保ったまま。

「……虚数空間内にジュエルシードが落ちて、それが暴走を始めている」

「はあ? 封印すればいいだろ」

「忘れたのか? あそこで魔法は全て使えない……封印の手立てが全くないんだ」

クロノの答えを聞いて巧はしばし考える。

「巧なら……いけるよね?」

自分の方を完全に信頼したような目で見てくるフェイトに苦笑してしまう。まるでかつての旅仲間であった菊池啓太郎のように見える。

『本当に、いけるのですか!?』

『本当!?! 巧君!』

フェイトの一言を聞いて必死になって聞いてくるリンディとエイミイを見て、更に苦笑した。

そして、おもむろに動いた。コード『103』を入力して『ENTER』キーを押す。

【Blaster Mode】の音声と共に巧は手に持っていたファイズブラスターを變形させ、フォトンバスターモードへと変えた。そして、クロノに聞く。

「別に……壊せば済む話だろ？」

「……！　そうか！」

魔法に近くて、全く違うフォトンブラッド。それを使用した攻撃だったら虚数空間内でも通用するのではないのかという巧の考えだ。事実、スーツのフォトンブラッドは虚数空間内を飛んだというのにどこも異常がない。

巧は剣を持つかのように縦に構えていたそれを標的ジューエルシードのあるであろう虚数空間に向ける。幸い、そこまで遠くまで行っておらずにジューエルシードはギリギリ視認出来る場所にあった。

【Exceed Charge】

「俺は、みんなの笑顔を守る……」

そしてそのまま狙いを定める。ファイズブラスターからは力が充填される音が響く。足を踏ん張り、巧は発射した。

放たれたのは極太のレーザー光線で、まるでなのはのディバインバスターのようであった。しかし、それに秘められた危険性はスターライトブレイカーに勝るとも劣らない物である。

「俺の、ファイズの力で!!」

巧は撃ちながらもどこか違和感を感じる。おそらく子供なのはこの反動の大きいブラスターを使ったからだろうと考えて違和感を見する。

「はああああああっ!!」

放たれた紅の光はジュエルシードに向かっていき、そこで大爆発を起こした。ジュエルシードの強大な魔力とフォトンブラッドの力がぶつかり合った結果、爆発が起きたのだ。

そして、それと同時に時の庭園も限界を迎えて崩壊していった。

## 十八・二話 真紅の戦士と庭園の崩壊（後書き）

たつくんが放ったのはディケイドの時に召喚されたファイズが放ったアレです。

ちよっとスランプ気味。一週間に一度の癖にね！

BGMは「ファイズ」でも流しておいて下さい。真理が厨二台詞を放った直後のアレです。

次は……どうなるんだろ。未定です

〽今回のまとめ〽

巧がI can fly！（Hey！）しました

## 最終話 そして【改訂中】

なのはは携帯電話が鳴っているのに気付く。

「ん、ん……」

ただの目覚ましのアラームだろうと思ったが、画面を見て驚いた。着信相手を確認したなのははすぐに携帯を開き、耳を当てる。相手は時空管理局だった。

「はい！」

『あなのはさん。ごめんなさいね、朝早くに』

「いえ」

『テストロッサ一家の裁判の日程、来週から本局行きて決ったわ』  
「はい」

なのはは電話の相手……リンディのその言葉に嬉しそうに返事をした。

また、嬉しい報告は続く。

『それに、巧君も治療が終わったわ』

「えっ！？ 本当ですか！？」

巧はあの場で動けなくなってしまった。

攻撃の後、崩れ落ちるように倒れて変身が解かれてしまう。庭園の崩壊が続いている中、巧が倒れているのは非常な危険な状態だった。

倒れた巧を見たクロノはそばに飛んでいき、間一髪で救出した。

巧が倒れたのは至極簡単。強大な力を持つファイズブラスターフォーム。それを使うことによって体に反動が来たのだ。ファイズは比較的安全なギアとはいえ、カイザ、デルタなどは使用し続けることで命を削ったり、精神を狂わせることがある。サイガ、オーガは装着した瞬間に死んでしまうこともある。

そのため、比較的安全と言っても他のギア程ではないが、危険性が少なからずある。さらにブラスターフォームを使ったのだ。反動はでかい。

本人も忘れていたが、骨も折っていたのもあるのだろう。しばらく動けなかったらしい。

「それでね、その前に少しだけなんだけど……」

海鳴の海の近くの橋。そこに巧、クロノ、フェイト、アルフ、そしてプレシアが立っていた。

「なあ」

「何だ？」

話しかけられたクロノはその声の主、巧に顔を向ける。

「こいつらの裁判、そこまで酷い結果にならないみたいだな」

「うん、そりゃ……ね」

クロノは笑いながら隣を見る。そこにあったのは笑い会っているフェイトとプレシアの姿だった。

そこには確かな親子の愛情があった。

「プレシアは心神喪失によって責任能力が無かった。そして、そんな彼女に『無理矢理』従わされていたフェイトはほぼ無罪だろう。アルフもだ」

事実をかなり湾曲して裁判に臨むつもりクロノに巧は苦笑してしまう。

それと同時に、彼に少なからず好印象を抱いた。

「お固い人間だと思ってたが、以外と優しいんだな」  
「な！？ 当たり前のことをしたまでだ！！」

そして、一人の少女が走ってやってくる。なのはだ。

「たつくーん！ フェイトちゃん！！」

そう声を張り上げながら走って来たなのはをフェイトは笑顔で迎える。肩に乗っていたユーノはアルフの肩に移動した。

巧はフツ、と笑うとクロノを促す。クロノは二人に声をかけた。

「じゃ、僕たちは向こうに行ってるから」

「うん、ありがとう」

「ありがとう」

二人が礼を言うのを聞いて、二人以外は歩き出す。  
暫く歩いていると、急にプレシアが巧に声をかけた。

「あなたのおかげだわ」

「あ？」

「フェイトが、あんな風に笑ってる」

振り返ると、なのはとフェイトは笑いながら話していた。フェイトの瞳には昔のような陰はもう無い。

それを確認した巧は少し照れたように言う。

「俺じゃねえよ。あいつだ」

「ふふふ……」

「んだよ」

「優しいわね、あなたは」

巧は狼狽する。何故なら今まで無愛想な態度を貫き通してきたせいで他人に褒められることなど殆ど無かったからだ。あるときには最低とまで言われた彼にとって、この程度の褒め言葉でももらいない。

そのまま近くのベンチに全員座って事の推移を見る。

二人とも本当に嬉しそうで、泣きながら抱き合っていた。

「巧君……本当に、ありがとう」

「ホントに、ありがとう」

「……ああ」

泣きながら笑うプレシアとアルフからお礼を言われている巧は微笑を浮かべながらなのはとフェイトの二人を見る。

（夢にはまだ程遠いけど、少しずつ、世界中のみんなを笑顔にしていきたい。洗濯物が真っ白になるように）

橋の上でなのはとフェイトは名前を呼び合っていた。

——簡単だよ。友達になるの、すごく簡単！ 名前を呼んで、はじめはそれだけで良いの。

そのなのはの言葉通り、フェイトは名前を呼んだ。相手の目を見て、はつきりと。

「なのは」

「うん」

「ありがとう、なのは……今は離れてしまっけど、きっとまた会える。そうしたらまた、君の名前を呼んでもいい？」

フェイトはなのはに抱きつかれながらそう言う。

「うん！」

「会いたくなったら、きっと名前を呼ぶ。だからなのはも私を呼んで。なのはに困ったことがあったら、今度はきっと私がなのはを助けるから……」

「うん！！」

クロノが時間になったのを二人に伝える。なのははそれを聞いて頭のリボンを外した。

「フェイトちゃん、思い出に出来る物、こんな物しかないんだけど……」

「じゃあ、私も」

フェイトもリボンを取った。そして互いのリボンを交換する。

「ありがとう……なのは」  
「うん、フェイトちゃん」

リボンの交換が終わったと同時に巧が呆れたような表情でクロノに声をかけた。

「お前、空気読めないって言われるだろ？ 今、結構いい空気だったぞ」

「う、うるさい!!」

クロノが顔を真っ赤にして反論するのを見た一同は笑う。一通り笑った後、巧もフェイトの所に歩み寄った。

「良かったな」

「うん……巧」

「あ？」

「巧!!」

巧はいきなり名前を呼ばれて困惑する。だが、どうして呼ばれたのかがすぐに分かった。

「私の名前を呼んで、巧」

「……ああ、なるほど」

なのはと長い付き合いの彼はどういう事が察したようだった。おそらくなのはに言われたのだろうと見当を付けてなのはを見る。

いきなり見られたなのははキョトンとした表情になったが、すぐに笑ってフェイトの方を見る。

巧はああ、とため息をついてフェイトと向き合った。

「頑張れよ、フェイト」

何を、とは言わない。これからほぼ無罪確定とはいえ、保護観察官が付くのは決っている。リンディだけだ。

さらに、この平穩も長くないのは分かっていた。もうプレシアの余命は残り少ない。この親子の限られた時間をどのようにして使うのか……それも含めての激励の言葉だった。

「うん、巧」

こうして、一つの物語が終わった……

でも、これはプロローグに過ぎない。  
それでも、彼らは一時の平穩に戻る。  
次の戦いが始まるその時まで……

t  
φ · s ! ·  
- O p e n y o u r e y e s · f o r t h e n e x

**最終話　そして【改訂中】（後書き）**

次は第一章のあとがきかな？

眠い

## 第一章 あとがき

はい、こんにちは。

無事に【第一章 赤き閃光と桃の星光と金の雷光】が終わりました。いつの間に章に名前が付いていたのというツツコミは無しの方  
向でよろしく願います。

思えば最初の投稿が去年の十月。約八ヶ月かかりましたね。執筆  
中は403、Crush 40、JAM Project、電気式  
華憐音楽集団などで攻めてました。おかげでテンションが上がって  
上がって……

エレキギターとかのメロディが好きなのです。

まあ、たまに水樹奈々だけでプレイリスト作ってましたが。

## 閑話休題

一話一話が短くて不満に思った方も多かったと思います。そのわ  
りに週一という。面目ない。

暫く改訂作業に入りたいと思います。そして理想郷にもうpする  
のだ。

あちらは放置で一ヶ月というなにそれ怖い状態です。しっかりし  
なければ。

まあ、改訂作業と言っても大筋は変わりません。それとタイ  
トルも「『乾巧の転生物語』」の部分を変更します。おそらく「『

真っ白な洗濯物」です。ここまでの話では転生とは言えないんで指摘もされましたし。

それと同時に並行で番外編、第二章（飯）を書き進めています。番外編はSS1、その後のテストロッサ一家とかを予定。第二章（飯）はメインは巧と、あるとらハのキャラの二人で進む予定。予定では5、6話で終わる……と、予定が当てにならない作者がほざきます。完全にオリジナルですね。

文体がちよくちよく安定しない作者にイライラしたでしょうが、とりあえずここまでお付き合い頂きありがとうございました。次の更新は……いつになることが分かりません。予定では九月？遠すぎる気もする。

とりあえず、これからもよろしくお願いします。

番外編 1 - 1

「お、なのは。おはよう」

ある朝、なのはは毎朝のユーノとの早朝練習を終えて帰宅していた。

「おかえり」

「お、お兄ちゃん。お姉ちゃん。おはよう。ただいま！」

「今朝もユーノの散歩？」

「えへへ、うん」

なのははそう返事する。巧は台所から食器などを運んでいた。流石いくつものバイトをこなしてきた男。ただの子供では出来ない半プロフェッショナルな並べ方をする。

高町家の面々はそれを初めて見たときにはびっくりしたものの、今では普通の光景となっていた。

「あ、そうだ二人とも。今日の準備ちゃんとしてる？」

「え？ 今日」

「キコ？」

なのはとユーノが美由希の言葉に聞き返した。

「……ほら、バス通りの向こうにできた、新しいプールに放課後出かけるって話があっただろ？」

巧がジトーとした目でなのはを見る。高町家で一番楽しみにしてはしゃいでいた彼女が忘れていたのが気になったらしい。

そう言われたなのはは暫くポケーとした表情を見せた後、思い

出した。

「う、うん！ 大丈夫！！」

「（ん？）」

ユーノは何も分らず怪訝そうな顔をした（ようになのはには見えた）

なのはは事情の分からないユーノに念話で説明をする。

「（ユーノ君がうちにくるまえにした約束なんだ。新しくできた温水プールにみんなで行くって）」

「（うん、プール？）」

「（折角だから、ユーノ君も一緒に行こうね）」

「（うえ！？）」

あ、そうだと声を上げてなのはは恭也の方を向いた。

「お兄ちゃんも一緒だよね？」

「（え？ 僕も一緒って！？ ええ、あ、あの）」

「ああ、俺は現場の手伝いだけだな。監視員だ」

ユーノが何か慌てているが、なのはは全く聞こえていないようだった。狼狽して、まるでダンスしているように見えるフェレット（ユーノ）を見て士郎は驚いた表情をした。

彼はフェレットの正体を知らない。なのはもだが。

「（うを、え、ええ！？ なのは？）」

「なのはも、行くの初めてだよな？ 遊べる施設も色々あって、楽しいらしいよ？」

「（ねえ、なのは？ ちょっと……）」

「うん、アリサちゃんたちと一緒に、楽しみにしてたんだ！」

なのはが良い笑顔でそう言うのを見てユーノは心の中で呟いた。

（て、聞いてないね……）

哀愁漂うフェレットの後ろ姿を見た桃子が抱き上げるまで、若干一秒だった。

学校の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「さて、授業もおわり♪」

バーニングしているアリサ。暑苦しいと思ったのは巧だけの秘密だ。

「準備OK〜！」

すずかも張り切ってる。ちなみに今回のプールは半ば強制で参加が決った巧であった。彼の発言権は高町家のヒエラルキーのトップに君臨する人には無いも同然だった。哀れ。

「それじゃ、待ち合わせの場所に……」

「……しゅっぱーっ！……」

なのはの後に、三人で一斉に言う。見事にタイミングが合っていた。

巧は動きたくなさそうに机の上に突っ伏していたが

「ほら、アンタも行くのよ」

「あー？」

アリサに首根っこを掴まれて引きずられていった。

彼女は知らない、巧がウルフルフェノクであることを。狼と犬は同類である。別名犬屋敷と呼ばれる家の主である彼女に、狼な巧は叶うわけがなかった。

最早クラスの名物となっているその引きずられていく光景はごく自然でありふれたものだった。

巧の背中に哀愁が漂っているのを誰も知らない。

「午前中授業だと楽でいいわね。放課後いっぱい遊べるしさ」

そう、その日は午前中授業だったのだ。アリサのその声のすぐ後にクラクションが聞こえる。

「すずかちゃん！」

「ファリンー！」

車からファリンがやってきて、そのまま巧たちは月村家の車に乗り、プールへ向かった

プール、そこは賑わっていた。開業したばかりか凄い人気である。乾巧は着替えを済ませて恭也の隣に突っ立っていた。

「それはそうと……」

「ん？ どうしたんだい巧君」

「お前が泳がないで監視員なのは体の傷のせいだろ？」

「ま、そうだな」

恭也の体は生傷が絶えない。そのため夏でも長袖を着ているのだが、そんな彼がプールに入れるわけがない。体のことを知っている人間は殆どいない。

「あ、恭也さーん！」

二人が話しているとアリサがやってきた。

「お、アリサ、早いな。一番乗りか？」

「はい、なのはもすずかもまだ着替えてます」

（女の着替えって遅いな）

巧はデリカシーのないことを心の中で考えた。

「恭也さん……なんか監視員姿、似合いますね」

「……それって褒め言葉としてどうなんだ？」

アリサの言葉に巧は冷静に突っ込んだ。無論、その直後に頭を叩かれたが。

ブスツとした顔を巧がしているとなのはとすずかその他もやってきた。

「あ、たつくーん、アリサちゃん、お兄ちゃん」

「恭也さん、こんにちは」

「でも、ここ凄いいねえ。飛び込みプールあるし、流れるプールあるし」

美由希は嬉しそうにしていた。

「あっちにはお風呂もありましたよ」

そつのんきに彼らは話していたが、一人――否、一匹――だけそういう気分になれなかった。

（……なのはは気付いていないようだけど、この場所にはわずかな魔力の残滓がある）

ユーノは警戒を強めた。

そんなことも知らない少女達の意識は面白そうな物に向いていた。

番外編 1 - 1 (後書き)

本編よりどこかはっちゃけてる感じがする番外編

番外編 1 - 2

「あれはなんですか？あのお立ち台みたいなの」

そう、お立ち台だ。こういう物もあるプールなんて滅多にない。いや、見たこと無いと巧は頭の中で考える。

ちなみに全国を旅するフリーターであつた彼のアルバイト履歴の中にはプールの監視員もあつた。客に注意するときの態度のせいでクビになつたことが数回あつたが……。

「ああ、そのまんまだよ。希望者が歌つて踊れるステージなんだ」  
「「ええ〜！？」「」」

恭也の言葉になのは達三人は驚いたような声を上げた。

パチパチパチと拍手の音がする。お立ち台に立っていたアリサへ向けたものだつた。

「うっわー！！　すごい」

「可愛かつたあ〜」

「あはは……　ちよつと気持ちよかつたかも」

アリサは満足した様子だつた。話を聞いて真っ先に向かつていった彼女は歌を歌つたのだ。流石お嬢様、歌も踊りも完璧だつた。巧は興味なさそうにコーヒー（当然アイス）を注文して飲んでいたけ

れども。

一人でくつろいでいた彼の耳には年相応に遊ぼうとしている少女達の声は聞こえていなかったという。そして何時ものようにアリサに首根っこを掴まれたとか。

「波のプールいつてみようよ」

とアリサが巧を引きずりながら言う。俺の意見無視かよと巧は言うが、誰にも聞こえていない。不意に視界の端に恭也を捕らえたが、彼は巧に向けてさわやかな笑みでサムズアップを決めるのであった。四面楚歌である。

「うん！」

「……運動神経切れてるんじゃないかったか」

「たっくん酷い」

元気に返事したのは巧は今までの腹いせとばかりに嫌みを言うが、テンションが上がっているのはには効かなかった。

「ちゃんと準備運動しないと」

すずかのその声と共に準備運動を始める。そして不意にアリサが聞いた

「ねえ、ユーノって泳げるの？」

「キユ」

「泳げるって」

（エスパークだよ！）

巧はなのはに心の中で突っ込みを入れた。今日の彼の突っ込みの

頻度はかなり多い。

プールでは白熱の戦いが繰り広げられていた。すずか対美由希。どう考えても美由希が勝ちそうだが、それでもすずかと張っていた。御神流の奥義を究めている美由希に対抗できるすずか（小学三年生）は異常だ。一族の血も関係しているのだろうか。

結局、美由希が勝った。かなりの僅差だったが。

「ああ。残念……」

「危なかったあ」

「お姉ちゃん、すずかちゃん。お疲れ。はいタオル」

「ありがとー」

なのはが差し出したタオルを受け取る美由希とすずか。

「しかし、すずかちゃん、本当にはやいね。手足の長さもこんなに違うのに」

「あはは」

体格のさもあるのに張り合えたすずか。周囲の人間から奇異の目で見られてもおかしくはない……。のだが、彼女らは美人でありそんなことは気にもされていなかった。

「つというわけで、敗者には、罰ゲームうううう」

「えええ！？ 私、聞いてない！」

どこかの探偵所長みたいな台詞を叫んだすずか。聞いていない

ことをいきなり言われたら誰だって同じ反応をするだろう。  
そして、安心する女性が一人。

「……勝ってよかったあ」

美由希がぼそつと呟いた。

乾巧はその存在を忘れられかけている。

——そう、彼はそう思っていたのだった。

さすががお立ち台で歌を歌った後、かなりの拍手があった。

「うっわー！　すごい」

「可愛かったあ」

「あはは……確かにちよつと気持ちよかったかも」

普通であれば緊張してそれどころで無いはずなのだが、ものとも  
しないずさ。

そしてアリサが爆弾発言をする。

「じゃ、次はなのはね？」

「ふえええええ！？」

「（なのは。ファイト！！）」

その無茶ぶりをされたなのはユーノに応援される。  
そして、無茶ぶりをした。

傍観者（巧）に。

「たっくんも歌うよね？」その言葉に彼はコーヒーを吹きかけた。そしてどうしてこうなったという台詞が脳内を駆け巡る。彼は面倒なことは嫌いだ。

「なのはもすごーい！」

「にははは、ありがとう。お姉ちゃん」

美由希に褒められて笑うのは。気がつくとなのはも歌を歌い終わっていた。巧は密かに逃げ出す準備をする。

そして、アリサに捕まった。

「勘弁してくれ！」

ちなみに彼が歌ったのは昭和テイストな歌だった。歌い終わった後「灰になったぜ」と呟いていたのは誰にも聞こえてはいなかった。大層お疲れのようであった。

歌い終わって暫く落ち込んでいた巧だったが、不意に恭也の姿を見つけた。他になにもすることが無かった彼は恭也の所へと向かった。

「お、どうした？」

「いや……暇だな」

「さっきの歌、よかったぞ」

恭也のその言葉に巧は顔を顰めた。

「うるせえ。俺は歌うよりギターを弾く方が得意なんだよ」

「え？」

「あ？」

恭也は巧のその言葉に驚く。何故なら高町家にギターはない。それなのにギターを弾くのは得意だと巧は言ったのだ。

その事について何か聞こうと思ったが目的地に着いたためにやめた。

「この点検で俺の仕事は終わり」

「ふうん」

ボイラー室の扉を恭也は開く。巧は扉が開いたと同時になにやら嫌な予感がした。だがそれは気のせいだろうと思って流す。

中を点検して何も異常が無かったのを確かめた恭也は立ち去ろうとするが、部屋の隅っこになにやら青い宝石が落ちているのを見つけた。

「何だ？」

その声を聞いて別の所を見ていた巧だったが、振り返る。そしてその宝石、ジュエルシードを見た途端叫んだ。

## 番外編 1 - 2 (後書き)

執筆中小説を整理していたら書き始めたばかりのころのプロットが出てきた。穴がありすぎて全俺が泣いた。

ちなみに現在使用しているのはそれを元にしたプロット。現在無印編まで書き込んである(え

脳内プロットには第二章(仮)の大まかな流れと簡潔までの道のりがあったり無かったり。

番外編 1 - 3

「危ない！」

「っ！？」

恭也は驚いて巧の方を振り向く。

「それは本当に危ない」

「どうしてだ？」

「……なのは関わっている事件に関係している物だから」

「こ……これが？」

恭也は半信半疑で巧を見つめる。だが巧の真剣なまなざしから何かを感じ取ったのか、彼も真剣な表情になった。

そして恭也は聞く。

「どうするべきなんだ？」

「オルフェノクの力で壊せるか曖昧なところだな。……生憎と俺には強い攻撃力を持った武器はねえんだ」

巧の変身するウルフォルフェノクの武装はメリケンサックだけ。

どこかの馬みたいな巨大な剣も無い彼にはオルフェノクの状態でジュエルシードを破壊するだけの力を持っていない。それでもラッキークローバという強力なオルフェノクの集団に勧誘された事があるのはそのスピードと、それを使ったヒットアンドアウェイの戦法で相手を翻弄し、葬ることが出来るからだ。

「待ってろ」

巧はファイズギアを取りに行くために走り出した。

ファイズギア一式が入ったアタッシュケースをひつつかんでまたボイラー室に戻ろうとした彼であったが、途中で空気が変わったのを感じる。

周囲に人は見あたらず、結界に入ったのだ。

だが魔法のことをあまり知らない彼は何が起ったのは理解できなかったが、周囲に人がいない今、ファイズに変身しても大丈夫だということとは分かった。

「変身！」

【Complete】

急いでボイラー室に行くと、そこには気絶していた恭也がいた。

結界を張った張本人……ユーノは魔力を持った人間だけ入れる結界を作ったはずであったが、急いでいたために手違いで数人巻き込んでしまったようだ。その一人が恭也である。

「おい！ 起きろ！」

軽く頬を叩いていると恭也が呻きながら起きた。

「う……水が、水が水で渦巻きが生き物で襲いかかってきて水族館で……」

否、寝ぼけていた。全く、図太い神経の持ち主である。

その数秒後、ボイラー室からは悲鳴が響いたのだとかなんだとか。

「で、それが彼女の言っていたファイズか？」  
「ああ」

少々赤く腫れた額をさすりながら恭也は巧に聞く。

「成程、強化されているからデコピンが痛いはずだ」

二人は物陰から戦闘しているなのはを見る。知らない人が見ればただのストーカーだが、生憎見ている人間はいない。

なのはが戦っているのは水。それも渦を巻いて竜巻みたいに。そしてその根本辺りにはすずかやアリサその他もいた。水着が流されているようで目のやり場に二人は困っている。

「……なあ恭也」

「なんだ？」

「……まだ犯罪者にはなりたくねえよな」

「ああ……」

そう話しているうちに水着が流された組は陸……というよりプールサイドに打ち上げられた。気絶しているようでようやく巧が物陰から外に出る。

「恭也は待つてろ」

「いや、俺も」

「……なのはは隠している。このファイズの正体も俺だとは思っていないだろうから大丈夫だ」

そう言って巧は飛び出す。

水の竜巻の中に青く輝く宝石、ジュエルシードがあった。巧はそれを見ると破壊するためにファイズポインターを脛に付けた。だが、

なのはは竜巻に襲われて飛行できずに地面に衝突しようとしている。

端から見れば無防備な彼女。実際バリアジャケットにはかなりの強度があつて今彼女のいる高さ、5メートルの2、3倍程度の高さなら落ちても平気なのだが、巧はそれを知らなかった。

落ちようとしている彼女を見て巧はダッシュした。  
幸いにも寸前でキャッチする。

「え……ふええええええ！？」

落ちたと思つていたら前、夜に見たピカピカの人型にキャッチされてなのははかなり驚いていた。だがそんな暇もなく水は巧達に襲いかかる。

避けた巧は抱えていたなのはをおろしてファイズフォンを開く。  
そしてクリムゾンスマッシュを放とうとしたのだが……

「待つて！ ピカピカの人！」

その言葉に、巧はずっこけた。見事にこけた。これ以上ないくらいに。

「ピ、ピカピカって……」

「あれはとても大切な物なの。壊さないで欲しいの」

なのははレイジングハートを構えて言う。

「私が封印するから」

【Stand by ready】

その日の帰り道、すずかその他は表面上は明るく「楽しかったね」などと話していたが、全員同じ事を思っていた。

（まさか、水に水着がながされた夢をみただなんて言えない……）と。

巧はと言うと、なのはがりリカル・マジカル云々言っているうちにその場から離れて恭也と共にボイラー室にいた。もし女子の裸を見たのだと言うことがばれてしまえば社会的に抹消されるからだ。

まあ、当の裸になってしまった彼女らは夢と言うことにして忘れようとしていたのだが……ある意味でこの日は全員にとって忘れることの出来ない日になっただろう。

これは巧とフェイトが会った、ちょっと前の話。

## 番外編 1 - 3 (後書き)

おいてめえサボってんじゃねえかと言われないかビクビクしながら改訂中。実際、執筆にかかる時間はかなり少ないから否定できない私がいる。

ぬるぬると進んでいます。

ちなみに時系列？ なにそれ美味しいの状態で作り上げたのがこの番外編だったりする。これも全て乾巧って奴の(r y

そしてP Vが555 / 555突破。なんだかとっても嬉しい。

でも、期待している人には申し訳ないのですが、宣言通り九月くらいから本編再開すると思います。それ以外の更新は改訂or番外編となる予定です。

## ゝプロローグゝ（前書き）

後書き読んでください

章のタイトルで誰が出てくるのかバレてしまうというね

## くプロローグく

魔法をかけられたシンデレラは行きたかったお城の舞踏会に参加した。

魔法が解ける夜の十二時。彼女は急いだ余り、ガラスの靴を落としてしまう。

これは、とある灰かぶりの、ちょっと生意気なお姫様の物語。

かけられたのは、魔法ではなく、一種の呪いと言ってもいいかもしれない。

彼女の落としたのは、ガラスの靴ではなくて……

魔法少女リリカルなのはφ・s

第二章 とある廃ビルの灰かぶり姫

カラン、と喫茶翠屋に來客を告げる音が鳴った。  
プレシア・テストロッサ事件……PT事件が終わって少し経った  
時のことだった。

「そう言えば」

「ん？ どうしたのたつくん」

「今日、友達呼んだんだよな」

「へえ……って、友達！？」

巧がさりげなく発した言葉になのはは驚いた。それと同時に客が声を上げた。

「や、巧君」

「よお、はやて」

来たの八神はやてだった。それはまだ春風の吹く5月のことだった。

「で、あの子と高町なのはを引き合わせた……ってこと？」

「そう。友達が少なくてかわいそうだったからな」

巧はソファに深く腰掛けてリーゼアリアに答える。グラム提督のオフィス、そこで彼らは集まっていた。ロツテとアリアは同時にため息をつく。

「確かに、それもいいとは思っただけど」

「ど？ 何か問題でもあったか？」

「問題ばかりじゃない！」

バン！ と机が叩かれる。それに驚いた巧は少しのけぞった。ロツテはこの何が問題だったのかを巧に説明した。

「あの子、高町なのはは魔導師……計画の邪魔になるかもしれないのにあなたが引き合わせた」

「……ああ、そういうことか」

「あの年の子供は結構お互いの家に行くはずだわ。つまり、闇の書が目覚めて守護騎士が現れたとき、厄介なことになる」

そこまで説明したところでグラムが声を発した。

「いや、問題ない」

「父様？ どういうことですか」

アリアが不思議そうな声色で聞くが、グラムは落ち着いたままだった。巧も、ロツテも不思議そうな顔でグラムの言葉を待った。グラムは目の前にあったモニター画像を消して机から立ち上がると、三人のいるソファの前に移動して説明を始めた。

「闇の書のデュランダルによる封印。それをするためには彼女を闇の書と戦わせる必要がある」

彼は説明を続ける。曰く、闇の書の暴走が始まるとどうやってもここにいる三人の力では抑えることが出来ない。抑えることが出来なければ封印すら出来ない。そこで必要になるのは別の魔導師の存在。

なのは程の強さがあれば闇の書の相手に一時的になることができる。上手くいけば彼女からの SOS に応じてアースラがやってくる、ということだ。

彼女らに闇の書の相手をさせることでこちらの準備をすることが

できる。

「だから、八神はやてが闇の書の主と知られても大して問題ではない。子供のことだ。暴走した闇の書を倒せば元に戻るとでも言うっておけば素直に信じるだろう。そうだったら逆に知り合いの方が有利になる」

巧はそれを黙って聞いていた。  
そして、聞く。

「なあ、本当にいいのか？ この計画で」

「大丈夫だ。……どうかしたのか？」

「いや、何でも無い」

学校の帰り。アリサの家の車に乗っていた巧ほかいつもの三人だったが、さすがが急に声を上げる。

「鮫島さん、車止めて下さい！」

「え、はい」

運転手の鮫島は車を止める。それと同時にさすがが車を降りて走り出した。鮫島はさすがの後ろ姿に声をかけた。

「すずかお嬢様！ どこにいかれるのですか！？」

「猫が倒れてたの！ 少し待っていてください！！」

猫を拾ってきたすずかは先に家に帰ることになった。四人は予定変更してアリサの家に行くことからすずかの家に行くこととなった。すずかの家に着くと、ノエルが猫を抱えていつてしまった。

「あの子、弱ってたね」

「そうだね……捨てられちゃったのかな？」

「一応うちで育てようと思うんだけど」

すずかがそう言った。そして話は変わる。

「そう言えばね、新しい友達が出来たの」

「へえ、すずかちゃんも？ 私もだよ」

「なのはもなんだ。ねえねえ、どんな子？」

すずかが先にどういう子なのかを言うが、それを聞いた巧となのはが声を上げた。

「八神はやてちゃん、っていつて」

「「な、なんだってー！？」」

いきなり大声を上げた二人にビックリしたのか、周りにいた猫たちが一気に走って逃げ出した。更に悪いことに丁度ファリンがお茶を持ってていたのだ。それを見た四人は固まる。

「お茶ですよー」

「ちょ、ファリン！ 足もとー！！」

すずかの声を聞いてファリンは足元を見る。そこには大量の走っている猫がいた。

「うわ、うわわわわ!？」

目を回したファリンはその場でこけて、手に持っていたお茶を落としたかに思えた。だが、なのはとすずかによってそれは阻止された。

騒ぎを聞きつけたノエルが走って来たが、この様子を見て一言だけ言った。

「ファリン、後で来なさい」

ファリンの顔は絶望に染まった。

## ♪プロローグ♪（後書き）

現在改訂中なのですが

●11とかになっていると思います。

なっていないところは既に改訂済みの筈です。順次改訂していきます。

そしてお気に入り人数333人突破。ありがとうございます。

追記：2011/09/09

作者です。入院することになったので週に一回の投稿なんて夢のまた夢になってしまいました。

夏に引き続き待たせてしまいます。ですが、帰ってきたときに

「作者キターーーーーー！」

とでも感想に書いて貰えればそれだけで嬉しいです。

では、こんな所まで読んで下さった皆様に感謝を込めて。

――1話 使い魔の猫は狼と会おう（前書き）

久しぶりに書いたので色々とおかしなところがあると思います

## ――1話 使い魔の猫は狼と会う

「手当てが終わりましたよ」

ファリンを引きずって行った後、何もなかったかのような表情でノエルは戻って来た。

「で、大丈夫そうなの？」

「ええ。ただ空腹で衰弱していたようです」

すずかにノエルが即答する。だが、それにアリサが疑問を覚えたように質問をする。

「野良猫、なの？」

「ええ、鈴もありませんでした」

「あそこまで育っているのに空腹で衰弱するっておかしくない？ゴミもあるし、食べ物には困らないと思うんだけど」

アリサの指摘はもっともだった。

「じゃあ、飼い猫だったってことかなあ」

「なにかあつて捨てられちゃったのかな……」

なのはとすずかは悲しそうな顔をしてそう呟く。そしてすずかが顔を上げて自宅で飼うと言った。

「大丈夫なの？」

「うん。アリサちゃんの家は犬が沢山いるし、なのはちゃんの家はユ―ノ君がいる。うちで保護するよ」

だが、そうは行かなかった。

すずかがそう言うのと同時にファリンが部屋に駆け込んでくる。

「大変です！ 猫がいません！！」

一連の騒動を溜息をついて傍観していた巧は、自分呼んでくる声の方向に向けて歩き出したのだった。

「（来てください、こっちへ）」

「ったく、何なんだよ」

巧は声の方向へ歩く。すると、アルフに初めてあった場所に辿りついた。

月村邸にいたなのは達も猫探しに出ているために巧が出歩いているのに疑問を抱かない。

「（やっと見つけましたよ。乾巧……ファイズ）」

「お前、誰かの使い魔か？」

巧の目の前にいるのは猫。しかも、なのは達が血眼になって見つけようとしている猫だった。

「（使い魔ですが、中途半端に契約が解除されました。今では魔力も残っていません。契約を果たすまでは消えたくないのです）」

「ふうん。で、どうして俺の事を知っている？」

「（彼は言っていました。貴方なら力を貸してくれるかもしれない、と）」

「人の話を聞けよ」

猫は巧の言葉を無視して続ける。

「（お願いします。私、リニスをフェイトが一人前になるまで使い魔としてください！）」

「フェイトだつて!？」

巧は猫の口から（これは念話であるから口と言っているのか分からないが）出て来た最近知り合った少女の名前にとてつもなく驚いた。

「（私は、フェイトの母親のプレシアの使い魔だったのです）」  
リニスが語る。

「（プレシアとの契約は『フェイトを一人前の魔導師にすること』でした）」

「充分立派じゃねえか」

巧はそう言うが、リニスは首を振る。

「（いえ、まだ教えることがたくさんあります。そして、あるときにプレシアから一方的に契約破棄をされました）」

「使い魔は契約を履行したら消える。契約破棄されても消えるんじゃないかったのか？」

「（いえ。プレシアは正式な契約破棄をせず、口頭での破棄でした。効力があつたために私は消えるはずでした）」

リニスのはず、という発言に巧は首をかしげる。

リニスはもう立っているのもやっという状態で巧に説明を続けた。

「（しかし、最初の契約が残ったままの口頭でも破棄。術も何もされませんでした。そのために私はプレシアとまだ不完全ではありますが契約したままなのです）」

そして、不完全が故にマスターから得られる魔力がもらえずに消滅しかけていることを説明した。

「（未練は全くありませんでした。ですが、たまたま見かけたのです。この世界でフェイトが悲しそうな顔をしながら活動をしている所を）」

「それで、手助けをしてやろうと思ったと言うことか」

巧はようやく納得したようだった。だが、疑問が少し残る。

「でもどうして俺なんだ？」

リニスは少し考えてから巧に再び説明を始める。

「（この世界にフェイトがいると分かった私は死にものぐるいで魔力を持ち、それでいて私を効率的に動かせる人間を捜していました）」

「

「フェイトと契約、て事は考えなかったのか？」

「（フェイトはアルフを使役しています。これ以上の契約はいくら魔力量が多いフェイトでも無理があるのですよ。私はプレシアの作った『優秀な』使い魔ですから……まあ、フェイトがどこに住んでいるのかも分からなかったのですがどうしようもありませんでした（）」

そしてリニスはある少女を見つけた。莫大な魔力を持っている少女、つまりなのはだ。なのはに契約を持ちかけようとしたが、ある男に止められたという。

「（その人は言いました。『彼女はやめておいた方が良い。それよりもふさわしい人物がいる』と）」

「それが俺か。……いや、待てよ。どうしてそいつは俺のことを知っている？」

「（さあ？ 私もよく彼の正体がわかりませんでした。でも、高町なのはに私が近づこうとする度に彼が現れ続けました）」

「ストーリーかよ」

「（幸いあなたは私を使役するだけの魔力があります。それに、前に一度戦闘を拝見しましたが魔法をあまり使わないのでしょうか？）」  
巧は今までの戦いを振り返る。使っている魔法と言えば最近使えるようになった念話と移動できる程度の飛行だけだ。

「（私と契約すれば、使い魔の使役による魔力消費を続けることとなり、魔力量も増えますよ）」

「……」

「（そ、それでも駄目だというのなら！ なんだってやります！！）」

「おい」

興奮しだしたりニスを取り敢えず巧は落ち着かせた。

そしてPT事件でということがあったのかリニスが分かっている様子だったので伝えることにした。

「彼女もやつと乾君に会えたみたいだね」

闇の中で男は呟く。地球でない世界で彼は巨大な剣を片手に立っていた。

細身で優しそうな整った顔には微笑が浮いている。そんな彼と持っている剣は激しく不釣り合いのはずなのだが、何故か似合っていた。

「今回の戦い……俺が、人間が勝たせてもらおうよ」

「あら坊や。私達を倒せるとでも思ってるのかしら」

彼の呟きに遠くから女性の声が応える。彼はハッとしてそちらの方を向いたが、そこには女性の姿は無かった。そこにいたのは異形の怪物だった。

「あと一回よ。それで戦いは終わる」

「王が復活してお前達が勝つ……のか？」

「ええ。本当は彼は動けるのだけど、どうせなら強大な力を持たせて差し上げたいじゃない」

「くっ！」

男は悔しそうな表情を浮かべてその異形を睨む。

「うふふふ……本当は分かかってるんじゃないかしら。坊や達が勝つ方法を」

異形の言葉に彼は苦しそうな顔をした。彼の背中に忍び寄る冷気に不意に冷や汗が流れる。

「何を馬鹿な……」

「簡単なことじゃない。悲しみで世界を何度も作り変える『ナノハ・ハーヴェイ』を殺しちゃえば」

「うるさい！」

彼はその体を異形に変えて襲い掛かる。相手は予測していたように彼の剣を片手で受け止めた。

「いつでもいいわ。あなたたちがオルフェノクの世界に賛同してくれるのを……待っているわ」

そして、決着の絶対につかない戦闘が始まった。

## ――1話 使い魔の猫は狼と出会う（後書き）

頑張った

燃え尽きた

もう、ゴールしても良いよね？

相当な説明、地の文なにそれ状態

そして意外な人の参戦

正体バレバレな登場人物

意味不明な世界観

おねがいですから罵らないください。なにせほぼ二ヶ月ぶりなんです

まだ全快というわけではありませんので、不定期更新でいこうと思います

あー、これはお気に入り減るな……

――2話 大地を駆る獣は空に焦がれる（前書き）

二章の題名少しかえてみたり

それに準じてサブタイトルもかえてみた

## ――2話 大地を駆る獣は空に焦がれる

巧がリニスをペットとして飼い始めて少しが経った。

使い魔契約を済ませて巧はほぼ魔法が使えないほどに魔力が無くなってしまっただけだが、日々の負荷のためか少しずつ魔力が上昇していつにない。

同じ年のなのはよりもしっかりしている巧のことだからと言ってリニスを飼うことには何も問題が無かったのだが、少し問題が生じた。使い魔というのは主と魔力だけでなく精神的にも繋がっている。そのため巧がどういう気持ちなのかを少しだけリニスが理解できるようになってきたのだ。

リニスが使い魔ということはなのはに一瞬でバレてしまい、それ以来リニスとなのはは念話で何やら話し込むようになった。

そのためか、普段無愛想な巧の気持ちというのは知るようになってからかわれることが多くなった。恭也程ではないのだけれども。

そんな事はさておき、巧は足下のリニスと共に買い出しに出ている。

「これで終わるか。少し量が多いな」

「（巧、お疲れ様です）」

リニスは最初ご主人様と呼んでいたのだが、巧が全力で却下。口調は丁寧だが巧と呼ばせている。

「（魔力で強化してます?）」

「（してるって）」

リニスは元々フェイトを教育するために産み出された使い魔。教えることに長けている。

一回グレアムの所へ顔を出したときにグレアムが巧に魔法の使い方を教えてくれとリニスに言ったのだった。

ちなみに同じ猫と言うことでロツテ、アリアともリニスは仲が良  
い。

「（でも巧はミッド式では無いので教えるのも一苦勞です）」

「（ベルカ式って奴か。グレアムの話によると闇の書の守護騎士もベルカ式らしいな）」

「（厳密には古代ベルカ式ですけど）」

グレアムがはやてに接触した理由、それははやてが持っている闇の書が原因だった。

その闇の書というのは持ち主に強大な力を与えるというもので管理局でもかなり警戒されている代物だ。その上、一度主が死亡するなどしたり、闇の書自体が破壊されると転生して新たな主を捜してしまう。

最後に闇の書が公式に発見されたのは十一年前のことであつた。過去の主が様々な凶悪事件を発生させてしまったために一刻も早く封印しなければならぬ。それも転生させない方法で。

そして考え出されたのが闇の書に少しでも隙が出来る時間帯に主ごと永久凍結することだった……。

最悪なことに闇の書が起動してから力を蓄えるのだが、力を蓄えたら闇の書が主を乗っ取り、力が蓄える前に闇の書が暴走することもある。起動前に攻撃するのも何があるのか分からないから何も出来ない。

巧はそれに悩みながらも協力することを自ら望んだ。なぜならば心優しいはやてが闇の書に乗っ取られて人を殺すのが見過ごせなかったし、ここで暴走したはやてを止めなければ誰かが自分の代わりにはやてを殺さなくてはならなくなってしまうからだ。

巧は昔同じような場面で悩んだが、結局倒すことを決意した。それと全く同じだ。

だからこそ、巧ははやてと共にいた。少しだけの平穩。あと数ヶ月だけの命と気付いていないはやてに一生分の幸福を与えられるように……。そのためには目的に気付かれないようにはやてに近づき、守護騎士が現れても敵意を抱かれないようにする必要があった。

幸い守護騎士は主に絶対の忠誠があり、闇の書がどんなに危険であつても主が優しければ暴走するまでは主に従い続ける。はやてが自分と仲がよければもし守護騎士が自分がオルフェノクだと気付いてもはやてが攻撃を止めさせてくれるだろう、と考えている。

（最悪な奴だな、俺って）

そう考えながら巧は帰宅を急いだ。リニスはそんな巧を心配そうに見上げるのであった。

「で、アリサちゃんもアリサちゃんのお父さんも満足したんだってへえ」。一回行ってみたいわね」

高町家に巧が帰宅すると桃子となのはが話していた。

「ただいま」

「はいおかえりなさい。ご飯はもうすぐよ」  
「分かった」

巧は買い物袋を机の上に置き、自分の部屋に移動する。丁度階段で恭也とすれ違った。恭也はなのはと桃子の会話に興味を示したらしく、会話に加わった。

「どうしたんだ？」

「あ、お兄ちゃん。あのね、最近面白いお店がここらへんに出来てその料理が美味しかったってアリサちゃんが」

「へえ、名前は？」

「えっと、確か……」

巧はなのはが何か言いかけているのを意識の外で聞きながら部屋に入る。

そしてそのままベッドに座ってリニスに聞いた。

「デバイスってどれくらいで出来るんだ？」

「見立てではあと五ヶ月くらいです。闇の書の暴走までには間に合うかと思います」

「飛行はどうも苦手だな……一応飛行補助に適したデバイスなんだろう？」

巧がリニスに依頼していたのはデバイス。それもレイジングハートのような万能型ではなく特化型のデバイス。バルディッシュを作ったことのあるリニスならとグラムがベルカ式の資料を集めてそれを元に作成している。

自分専用のデバイスというのは中々手に入らない。しかも特化型はなおさらだ。

「ファイズとして戦い続けるなら攻撃に使用する必要はありませんからね。AIもそこまでいきませんし、あとはファイズの出力に耐えられるかどうか。そしてファイズアクセル、ブラスターの起動に際した形状変化。飛行補助なら簡単ですけどね……」

巧のもう一つの姿、ウルフルフェノクの影響かどうかは分からないが、巧は飛行が苦手だ。何せ、ブラスターフォームの飛行でさえ不安定でフラフラするのだ。狼は空を飛べないし。それより飛べたら怪奇現象だし。そんな巧がなのは達と戦おうとするなんて自殺行為。

それでも耐久力の問題で負けはしないのだけでも。思い出してみればアルフの飛行も結構直線的だったな、と巧は考える。

「それにファイズに合わせるのって結構難しいんですよ？ 携帯電話、カメラ、ペンライト、腕時計みたいな日常生活で使用する物をデバイスにしようとしても身につけられる物って考えつかないんですよ。ブラスターも設計者が諦めたのが最早トランクスポックスですし、ラジカセも何か知りませんが駄目な気がします」

「ラジカセのことは言わないでくれ。もう思い出したくもない」

ラジカセに何か良い思い出がないのか、巧はげんなりとした顔でそう言った。リニスもそれを感じたのか微妙な表情になった。

――2話 大地を駆る獣は空に焦がれる（後書き）

久しぶりに書いたから設定に矛盾があるかも。  
最悪すぎる

お気に入り減ったよ。わーい

そして他のライダーとのクロスがあるよ。設定的にも相似点がある  
と言ったらアギトと剣、OOOだけれどそのどれか  
出るとしてもかなり後だけだね。それでも良いつて方は感想くれた  
ら嬉しいな  
良いと言われなくても書くけど  
ヒントは文中にあるよ

## 二―1話 死を垣間見た人間の運命

微妙な空気になった巧の部屋に夕食の準備が出来たという声が聞こえる。

「……行くか」

「はい」

夕食を食べながら話していると、士郎が不意に真剣な目つきで話し始めた。

「そういえば最近行方不明事件が起きているらしい」

「行方不明？ 年齢層は」

「決ってない。小さい子供から大人までだ。男も女も」

士郎が言うにはここ最近、行方不明で搜索願が出されている件数が少しだがいつもより増えているらしい。しかし、あまり共通点は見あたらないという。

「ここ海鳴でも起きてるから気をつけて欲しい」

（行方不明…… オルフェノクか？）

オルフェノクが関与すると襲われた人間はほとんどが灰になって死んでしまったために行方不明とされてしまうことが多い。ちなみにリニスにはオルフェノクとはどういう存在かは話してはいるが、自分の正体については話してはいない。

しかし、恭也と月村家は魔法について知っているためにリニスがない時にリニスのことと、巧の秘密については黙っておくように巧は言っていた。

リニスとの契約は一時的で、もし自分より高位の魔導師が必要とすれば契約解除するつもりだったからだ。もしそこでバレたら大変なことになる可能性があった。

しかしながら、リニスとの契約は簡単に解除できないことに巧は気付いていない。プレシアとリニスとの間の契約の中途半端な破棄はいわゆるイレギュラーであり、通常契約破棄すれば使い魔は消えてしまうかもとの動物に戻る。

リニスは巧がオルフェノクだとは知らないし、忍とすずかが人外的能力を持っているとは知らないし、知る必要が無かった。ためらいなくオルフェノクを倒すためにただ、『怪物』という情報しか与えなかったし、それも管理局のオルフェノクに対する見解だった。

平和な日常にオルフェノクの影が迫っているのに気付いたのはその食卓での会話のあった、まさに次の日だった。

グレアムに緊急で呼び出された巧はグレアムの所に急いで轉移した。リニスは猫の姿ではなく人の姿で。基本他の人に見られない場所では巧に魔力的な負荷をさらにかけるために人の姿をとっている。

「何があった」

「……ロツテとアリアが攻撃されて重傷だ」

「なっ!？」

いつも部屋にいるはずの二人がいらないと思っていたら攻撃されていたのだ。それに、相手は

「相手はオルフェノク……海鳴にいるオルフェノクは彼女らが使い魔だっていうのは気付くはずがないのだが……私の判断ミスだった

か？」

「オルフェノク絡みだから俺が呼び出されたのか」

「ああ。局で個人でオルフェノクを倒せる人材はお前以外にあまりいない。せいぜい捕縛程度。しかもここは局にとって価値の無い場所だ。本来なら無視するのだが八神はやての事もある」

管理世界内外でオルフェノクによる被害は出ているものの、実はそこまでオルフェノクは強くはない。数十人のバインドでようやく捕まえることが出来るオルフェノクが始めに表舞台に出てきたのがオルフェノクに対する管理局の警戒心が高まる原因だった。

約六十年前の出来事だったらしいのだが、ちょうどその六十年ほど前の管理局黎明期に活躍した三提督による提唱でオルフェノクは見つけ次第全力で生死問わず捕縛されることになってしまっている。オルフェノクは迫害の対象となってしまうているのだ。

そのために巧はグラムに正体を明かすことは出来ない。

「大体理解はしたが、はやての監視は大丈夫なのか？」

「……心苦しいがカメラを設置して欲しい」

「分かった」

巧は考えていた。理想は誰もが笑い会える世界、そこには人間もオルフェノクもいる。

それなのにオルフェノクは迫害の対象となっており、何十年もその体制になっているせいで管理局は簡単に考えを改めないだろう。

最早『感情を持たない人に化けた怪物』として認識されているために、昔のようにオルフェノクを説得して人間に攻撃させないだけでは解決できない。草加が可愛く思えてきた巧だった。

こうして局に一時的とはいえ関わりを持ってしまった巧は地球で暮らすにしても局との関わりは絶つことは難しい。監視される中で

オルフェノクに変わってしまったえば追われる身となる。

ため息をついた巧にリニスは何か探るような目をして見つめていた。

このような事もあり、警戒はしていたのだが数日後、巧は焦っていた。

「巧、電話は!？」

「出ねえ! 恭也! 月村の方で何か情報は無いのか!？」

「無いって忍が」

「チツ!」

巧と恭也が怒鳴っている所になのはがやってきた。そのただ事ではない様子にビクリしてなのはが恭也に聞く。

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「……八神はやてが、行方不明になった。クソッ! 被害者の共通点は分かっていたというのに!」

「はやてちゃんが!？ それに共通点？」

なのはは驚いて恭也に問い詰めるのだが、それについても答えは巧が教えた。

「前に士郎さんが言っていた行方不明事件……その被害者は全員、昔に生きていることが不思議に思えるような大事故で重傷を負っている」

（つまり、オルフェノクになっている可能性のある人間ってことだ  
！）

巧は心の中でそう続けた。

二丁 1 話 死を垣間見た人間の運命（後書き）

予定ではこうなる筈では無かった

クロスされる予定のライダーに変身予定の人間が出てくる筈だった

何故こうなったし

実を言つとここ最近誕生日を迎えました

2nd A・sが出るまでなのはオワコンな扱いがされそうで怖い

## 二―2話　生きるために殺す怪物のお話

くぐもった声が聞こえる。私がココに集めてきた『人間』は全員私によって喋ることの出来ない状態にさせられている。ただ1人の例外を除いて。

目隠しをされ、私に担がれている少女はとても幼く、私が今の生活に至る原因となったあの忌々しい事件を思い出してしまう。

「……ごめんね、でも、私のために餌になつてもらおうわ」

その少女を私は他の『人間』達より数倍強度の低い、人間を抑えるのに十分な強度の縄で手を縛って、地面に転がした。そしてお腹を踏みつけてたたき起こす。

「起きなさい」

「うつ……ここは……」

「黙りなさい」

少女、八神はやてを傷つけない程度に蹴る。蹴られた彼女は暫く転がって止まった。その目にはしっかりと恐怖と涙が浮かんでいる。潤んだ瞳には長年適当に切っていたせいで痛んでいる私の金髪がうつる。

「あまり五月蠅いと、殺すよ？」

「っ!？」

脅しかけると顔が更に恐怖に歪んだ。私はそれを見て嫌な気分になったが仕方がない。これは自分が生きるために必要なことなのだから。

そう思つて少女と同じように転がされている約五名の男女に声をかけた。

「ねえ、あなたたち。死にたくないでしょう？」

喋れるようにしておくとうるさいために口に布を捲いていたのを外してやる。すると案の定五人の内一人が叫んだ。

「お前！ いい加減俺たちをここから出せ！！」

「いつもいつもうるさいわね。少しは黙らない？ 極東の猿が」

「っざけんな！」

軽く挑発してやると男は顔を真っ赤にして顔にオルフェノクの紋章を浮かび上がらせる。ここにいるヒトガタの中で本当に人間なのは八神はやて只一人。その他は全員オルフェノクだった。

オルフェノクというのは感情の浮き沈み、特に怒りの感情を表すとしても顔にオルフェノクの紋章が出てしまう。誰かが精神が高ぶってオルフェノクの本能が呼応するからだと言っていたが、どうでもいい。

「そっちがそのつもりなら相手になるわ……第一、前私に負けたアンタが勝てるとは思わないけどね」

「くっ……！」

私の答えを聞いた男は悔しそうな顔をしながらうつむく。

「無駄なことをしないのなら別にいい。この件が終わったら全員ここから出してあげる」

私がそういうと全員の顔が変わった。これは私の本心からだし、

第一無駄に命を散らせたりはしたくない。

私だってこんな拉致監禁なんてしたくもないし、八神はやてのような下半身不随でも、目が見えなくても、何も聞こえなくても、何も喋れなくても日のあたる表の世界で生きていきたい。

でも、私にはそれができない。数年前のあの事件から私は変わってしまった。

「あなたたち五人にはこの男を連れてきてもらう。方法は問わないけれど、死なせたりしたら駄目よ」

私が懷から手に取った写真には八神はやてと同じ年の男の子が写っていた。そして、その写真を見た彼女は驚きながらも、必至に声を出さないようにしていた。

ふと、今にも崩れ落ちそうなビルのなかにあるこの部屋のカレンダーを見ると、今日は六月に入ったばかりだった。

画面を見ていた男がふと顔を上げ、周りにいた男女数名に声をかけた。声をかけられた人影はうなずきあって画面の前に一人を残してどこかへ消えていってしまった。

「ローウェルも良く考えたな。人質をつかって乾巧を呼び出そうとするとは」

机の上に置いてあったマグカップを取って、珈琲を飲む。ほどよく溶けた砂糖が彼を満足させた。彼の口ぶりからすると、画面にう

つつている十代に入りかけの金髪の少女がローウェルというのだろうか。周りにいる捕まった日本人の女よりも十年近く若いのに発育が良いのは外人だからだろうか。

「うまくいけば対オルフェノク用の兵器が手に入るし、入手経路がわかる。指示通りに上手くいけばいいが……」

画面は切り替わって、さきほどまで映していた廃ビルではなくどこかの研究施設を映していた。そこには液体の中に浸かっている灰色の灰、オルフェノクの死後の物体が大量に浮かんでいた。同じようなものが何十個もある。

「死後の灰まで利用され尽くして死ぬオルフェノク……か。裏切り者には良い末路だ」

その液体の入った容器には様々な実験が施されていた。電気を流されたり、薬品を投与されたり、魔力の塊をぶつけられたり、と。

「『インフィニティプロジェクト』か……成功すれば私たちも寿命を気にしないで生きていけるようになる、か」

『インフィニティプロジェクト』とはつまり簡単。どのようにかして短い寿命であるオルフェノクを長い寿命にさせようという計画だ。管理局に復讐を誓い、ミッドチルダをオルフェノクの楽園とするべく動いているオルフェノク組織で一番活発に行われている計画だったりする。

『∞』を冠するこのプロジェクトが、数年後とんでもない怪物を作り出すのだが、このときは誰もそんなことを考えることなく輝かしい未来に向けて必至に研究を重ねていった。

## 二丁二話 生きるために殺す怪物のお話（後書き）

一ヶ月近く待たせたな。だが、話が進まなかったし正直言って支離滅裂です。

本当にごめんなさい

今月は何も無いしちょっとは投稿できるはず

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4935o/>

---

魔法少女リリカルなのはΦ's【活動遅延中】

2011年12月3日13時52分発行